

第2項 5次SI-002にみられる動物骨集中について

1. はじめに

取掛西貝塚の5次調査において、4軒の竪穴住居と土坑1基の覆土中からヤマトシジミ主体の貝層が検出されている。このうち、5次SI-002の貝層は約5m四方の範囲に広がり、厚さは最大で75cmにもおよび、貝層中からは多数の動物遺体や炭化種実、骨角歯牙製品、貝製品などが出土している。貝層直下からは、頭部の骨を中心とした動物遺体が多く出土し、その多くはシカ・イノシシであり、一部は被熱している。これらについて出土状況や分布範囲、動物種の構成などを明記し、動物骨出土の様相について改めて検討してみたい。

2. 出土動物種と数量

5次SI-002の覆土にはヤマトシジミを主体とするほぼ純貝層に近い混土貝層、混貝土層、灰層が16層にわたり堆積している。西側は一部調査区外に入るため不明だが、貝層の範囲は南北で約5.25m、最大厚は約75cmを測る。これらの貝層中には多量の動物遺体や骨角歯牙製品がみられ、特に貝層下部からは多くの動物骨が出土した。貝層中の動物遺体は、哺乳類では、イノシシ、タヌキ、シカ、ウサギ、キツネ、テン、サル、アナグマ、ムササビが出土している。鳥類ではキジ類、カモ類、ハクチョウ類、ガン・カモ類、ツグミ類、ウミスズメ類、キジバト、カイツブリ類、ヤマゲラ類などがみられ、魚類ではタイ、ボラ、イワシ、コイ、フナ、ウゲイ、アイナメ、カサゴ、スズキ、カレイ、ヒラメ、マグロ、コチが出土している。またツノガイ製の玉類が約2,000点以上と多量に出土している。

こうした豊富な自然遺物の中、貝層直下からは特に多くの陸獣類の骨が出土し、中でもイノシシとシカの頭部を中心とした動物遺体が目立つ。これらは居住跡の東側を中心に出土しており、イノシシやシカ以外にもタヌキが含まれ、また鳥類ではハクチョウとキジ、魚類ではカレイとマグロが出土している。動物骨集中箇所では150点の動物遺体の出土がみられるが、そのうちイノシシは86点出土しており、全体の57%と半数以上を占める。次に多いのはシカ43点である。その他はすべて10点以下の出土量である。出土量の多いイノシシおよびシカの出土部位を最小個体数でみてみると、イノシシの頭部が10個体、シカの頭部が3個体である。一方で四肢骨および体幹部の骨をみると、イノシシでは左上腕骨および左大腿骨が最も多く3個体、シカでは若獣個体もいることから2個体である。イノシシの上腕骨や橈骨、大腿骨の遠位部などが四肢骨の中では多く出土しているものの、全体的に四肢骨や体幹骨などが頭部の骨に比べて少ない。同様に、シカの四肢骨もほとんどみられないなどの部位組成のアンバランスさが目立つ(第3表)。切痕については四肢骨を中心にみられ、イノシシでは寛骨や距骨などにもみられるなど、解体痕のよくみられる部位として挙げられている部分に相応する(本郷1991)。

3. 出土状況および被熱

貝層直下にみられるこれらの動物遺体の出土状況および被熱の有無を以下に記載する。以下、第297図に示した遺物Noとともに説明していく。まず、出土量の多いイノシシやシカの頭部の骨の出土状況をみると、動物骨集中箇所の中央部にイノシシの頭蓋骨6個、下顎骨1個がまとまって出土している。これらのイノシシ頭部の骨の出土状態をみてみると、成獣の雄個体であるNo.0536を除いた6個体(No.0416、No.0531、No.0453、No.0531-2、No.0523、No.0509)が吻部を北西ないしは南東に向か、長軸方向を揃えて隙間なく並列した状態で出土している。No.0416とNo.0531-2、No.0509は吻部を南東に向か、No.

No. 0531 と No. 0453、No. 0523 は吻部を北西に向けて出土している。No. 0453 は第 297 図では上部にある他の骨などによって一部しか示されていないものの、後頭骨頸静脈突起が南東側に示され、やはり吻部が北西側を向いていたことがわかる。また No. 0416 はイノシシの幼獣の切歯骨のみの出土であるが、やはり骨の長軸方向が北西—南西を向いている。切歯間縫合が北西側にあることから、吻部を南東に向けていたとみられる。つまり、イノシシ頭部の骨の集中箇所では、1 個体を除いて、吻部の向きを南東方向に向けるものと北西方向に向けるものが交互に検出されている。

これらのイノシシ頭部の骨の上下面の向きをみると、すべての骨が頭頂部を上面に向けた状態(つまり現在私たちが目にする生体のイノシシと同じ正位)で出土したのではない。No. 0531-2 は口蓋面を上に向けた状態で出土し、No. 0509 の頭蓋骨はやや右側を上面にした状態で検出されている。この No. 0509 の被熱状況をみると、右頬骨に近い上顎骨や左上顎骨がやや黒色化するなど、出土状態では下面部分にあたる箇所が被熱を受けている。また、周囲の被熱状況と合致しないことなどから、被熱を受けた当時から向きが変わっている可能性がある。おそらく本来は No. 0509 も口蓋面を上面にしていたものと思われる。また北東方向に吻部を向ける No. 0536 も口蓋面を上に向けた状態で出土している。表裏面での出土状態は、頭蓋骨では正位 1 個体、逆位 3 個体、不明 2 個体、下顎骨では逆位 1 個体である。

ではこれらの動物遺体の出土位置の高さを検討してみたい。頭蓋骨の集中箇所での断面がなかったので、そのやや南側の B-B' の断面にプロットされた動物骨の垂直分布をみると、イノシシの頭部の集中箇所の骨はすべて貝層直下に位置することがわかる(第 297 図)。No. 0531 や No. 0416 など、北東側で検出されている動物遺体は、やや上部に位置しているように見えるが、これは北東側が住居の縁に近いからであり、レンズ状堆積を示すものと考えられる。

イノシシ頭部の骨の集中箇所から 20cm ほど北側に、シカの頭蓋骨 No. 0518 と下顎骨 No. 0530、No. 0531 および角 No. 0527 が出土している。頭蓋骨は左右の頭頂骨と右岩様骨の部分のみであり、上顎骨はみられなかった。この頭蓋骨の右角坐骨は前面から斜めに切断され、左角坐骨は外面から斜めに切断された痕跡が確認された。小型であり角を持っていることから、やや若い雄の個体であることがわかる。左右の角坐骨と右岩様骨に被熱の痕跡が認められ、火ハネによる欠損もみられることから全面に火を受けていることがわかる。頭蓋骨の右側には左右の下顎骨がみられ、ともに成獣個体である。歯の咬耗度合いから同一個体である可能性が高い。さらに頭蓋骨および下顎骨の上に、角坐から先端部まで残るシカの角が、先端部を北にして出土している。4 尖の形態を示し、3、4 歳以降の成獣個体とみられる。4 歳以降はほとんどが 4 尖となり、またこれ以降加齢に伴う変化として、角幹と各枝のなす角度が大きくなり左右の角が外方に広がる傾向があるが、No. 0527 は第 1 枝および第 2 枝を欠損しているため、成獣個体以上の詳細な年齢については不明である。この角は角突起および角座骨を持つため、落角ではなく、秋から春に捕獲されたシカの角であるとみられる。先端部近くに被熱の痕跡がみられ、一部が黒色化していた。この先端部の被熱痕の近くから出土している No. 0392 のシカの軸椎の左側部分や No. 0393 のシカ・イノシシの肩甲骨片にも被熱の痕跡が認められたことから、No. 0527 の鹿角先端部近くでも小規模な被熱範囲が認められる。またこの鹿角は角坐骨部分も被熱を受けている。これらの頭蓋骨、下顎骨、角の関係性だが、頭蓋骨および角にはそれぞれ角突起があることや大きさの違いなどから、頭蓋骨と角は同一個体ではなく、別の個体のものとみられる。頭蓋骨と下顎骨の関係性については、上顎骨がないため歯による年齢推定ができず、同一個体かどうかは不明である。

イノシシ頭部の集中箇所およびシカの頭蓋骨・下顎骨・角の出土地点にかけて南北方向に長く被熱の痕跡が認められる。動物遺体の被熱状況からみると、長さ 120cm 以上、幅 20cm 以下の範囲が焼けているこ

とがわかる。No. 0536 や No. 0509、No. 0461～0464 などは強い被熱の痕跡が認められる。また、1 個の骨の中でも被熱を受けている部分と受けていない部分があり、近接資料の中でも、被熱を受けている骨に隣接して出土した骨は被熱を受けていないなど、出土状況から被熱の範囲が明確に示せる。こうした状況から、おそらく別の場所で火を受けた後にここに廃棄されたものではなく、出土場所で火を受けたと考えられる。また、これほど強い被熱の痕跡は、捨てられた灰によって一部被熱を受けたのではなく、意図的に焼かれたと考えて良いであろう。

この他にも被熱の痕跡は、上記に示した No. 0527 の鹿角先端から北側にかけての小範囲の他に、No. 0437 のシカ上腕骨から No. 0438 のシカの中手骨にかけての小範囲にもみられた。また第 297 図にはみられないが、No. 0646 のイノシシの遊離歯とシカないしはイノシシの頭蓋骨片がまとまって出ている箇所でも小規模な被熱の痕跡が認められた。No. 0646 は、イノシシ頭部の骨集中箇所から 1 m ほど南側地点から出土し、後頭部のみ残るシカ頭蓋骨の北西側に隣接して出土している。このシカの頭蓋骨は、頭頂骨から側頭骨にかけて人為的に切り取られた加工の痕跡が認められる。これら小範囲の被熱がみられる箇所から出土した骨をみると、イノシシ頭部の集中箇所の被熱と同様に、貝層直下からの出土である。ただし、No. 0527 の鹿角先端部の被熱範囲に含まれる No. 0392 や No. 0393 などは貝層直下ではなく、それより上部の貝層中からの出土であり、これらは貝層直下にみられる動物遺体の廃棄時期よりも後に廃棄された可能性が高い。

4. 年齢構成と雌雄

年齢の判別しているイノシシの齢構成は、最小個体数で幼獣 3 個体、若獣 2 個体、亜成獣 2 個体、成獣 3 個体である。様々な年齢の骨が出土していることから、限定した年齢の個体を狙って捕獲していたのではないことがわかる。一方で、シカについては、最小個体数 3 個体すべてが成獣個体であった。幼獣のものはみられなかった。

イノシシの雌雄は最小個体数で、3 個体が雄、3 個体が雌であった。雄の若獣個体 1、雄の成獣個体 2、雌の若獣個体 1、雌の亜成獣個体 1、雌の成獣個体 1 が出土している。シカについては 1 個体が雄である。

5. 考察

(1) 部位別頻度について

取掛西貝塚の 5 次 SI-002 の貝層直下にひろがるシカ・イノシシ遺体には、頭部が多いという部位による組成の偏りが顕著である。縄文時代の遺跡において、部位の偏りはよくみられる。こうした原因にまず、土中での消失というタフォノミーの問題がある。これは骨の部位ごとによって骨の強度が異なるために起こる。海面質主体の部分は密度が低く、骨密度が高い部位とは消失速度が異なる。この他に非人為的行為による部位の偏りとして、イヌなどの動物による破壊行為がある。また、人為的な行為としては、運搬や分配などによる影響が考えられる。運搬では、キル・サイトとベース・キャンプなど遺跡の性格によって異なったり、また本貝塚のように集落内貝塚であり、ベース・キャンプであることが明らかな場合でも、部位組成の偏りがみられることから、分配や食肉交換の議論も行われてきた(林 1980、西本 1995)。1970 年代の Binford による出土部位の有用性の研究以降、遺跡の性格を出土部位によって判断することが盛んに行われてきたが、こうした研究は肉量や骨髄量など、動物遺体を「食」として捉えた場合である。

こうした食としての利用以外に、骨角器への利用などの骨角そのものの利用、また脳髄を脳鞣しに使う

のような場合の人為的破壊による損失、さらにこうした実用的利用以外の、例えばアイヌのイオマンテに代表されるような祭祀的行為への使用による集積ないしは損失が考えられる。本貝塚のような頭部に非常に偏った部位の比率は、他の遺跡と比較してみても顕著であり、四肢骨がほとんど見られない出土状態は、縄文時代の遺跡における部位の偏りとは異なる廃棄状況が想定される。ただし、頭部と四肢骨・体幹骨の比較において、頭部の骨の多量の出土は頭部の骨の集積の可能性と共に、四肢骨の欠如は四肢骨を使用したことによる結果である可能性もあることを念頭に置く必要がある。

(2) 配置(配列)について

イノシシ頭部の骨の集中箇所に見られる計7個体の頭蓋骨および下頸骨は、すべて貝層直下から出土している。その中でも北東側にある骨がやや高い位置から出土したが、これはレンズ状堆積の結果、住居の縁に近い位置で出土した北東側の骨が他の骨に比べて高い位置にプロットされた。つまり、5次SI-002の廃絶後、住居址に少しづつ土が堆積していき、大きなくぼみ状の形態をなしていた際に、これらの動物骨が廃棄されたとみられる。そしてこれらの動物遺体の上に貝層が形成されていることから、イノシシの頭部など多くの動物遺体が廃棄された後に貝層が形成されたとみられる。ただし、動物遺体の垂直分布からも明らかなように、貝層形成後に廃棄された動物遺体も当然ながらある。

イノシシ頭部の骨の集中箇所をみると、6個体が吻部を北西ないしは南東に向け、長軸方向を揃え隙間なく並列して出土し、1個体のみこれに直交する形で北東側に吻部を向ける。また吻部の向きは南東方向に向くものと北西方向に向くものが交互に検出されている。さらに、上下面の出土状況をみると、すべてが頭頂部を上面にした正位で検出されておらず、頭頂部を下にし口蓋面を上面にした逆位で出土したものもある。

動物遺体が単なる廃棄行為の結果であれば、特定の部位がまとまって出土したり、並んでいるような出土状況が示されることは少ないであろう。配置や特定部位骨の集中がみられた場合に、偶然ではなく、これを故意とみるのは、アイヌをはじめとした北方諸文化の狩猟儀礼に、頭骨などの特定の部位を集めそれを配置(配列)する行為が民族例にみられるため、これを動物儀礼の痕跡とみなす場合が多く、意図的に配列された動物骨をもって動物祭祀の遺構と考えることが一般的であるとする見方もある(松井2003)。本貝塚の場合、その目的が何であれ、頭部の骨の出土状況は、一定の規則性が認められることから、廃棄というよりも配列とみなすべきであろう。

(3) 被熱痕について

シカ・イノシシの頭部集中箇所における骨をみると、被熱痕は全体に黒色化している。白色・チョーク化するような個体はみられないものの、部分的に茶色に変色する程度ではない。こうした被熱の状況から、非常に強い火を受けていることがわかる。また、被熱範囲が限定され、同じ骨の中でも被熱部分の近くに位置する別の骨にも被熱がみられる一方で、被熱を受けていない部分の近くの骨は同様に被熱の痕跡がみられないなど、出土した場所で火を受けた可能性が高い。灰ブロックではなく、被熱したヤマトシジミを含む灰層が水平堆積を見せ、それらが上層から下層にかけて何層かみられることから、出土場所での被熱の可能性が高い。

動物骨の故意の被熱の可能性として、調理以外に、骨髄抽出の前の被熱などが挙げられている(Binford 1981, 植月2010)。しかし、本貝塚のように、出土位置で被熱を受けた可能性が高い場合、動物遺体廃棄後、骨に近い状態で強い火を受けていると考えられる。このような状況下で火を受けた理由として、一つには

衛生面での処理が考えられる。この他の理由として、縄文時代中期以降、配石遺構や敷石遺構に伴う焼骨が大量に検出されることがよくみられ、また縄文時代の後晩期の山梨県北杜市金生遺跡の土坑内の焼骨集積に代表されるように、特異な出土状況と共に被熱の痕跡が伴う事例が多くみられることから、意図的に焼いた痕跡のみられる動物骨については祭祀的行為の結果ともいわれる場合がある。

また、北側から出土したシカの頭蓋骨および下顎骨の上に、角坐から先端部まで残るシカの角が検出され、この鹿角には被熱箇所が2か所認められた。1か所は角坐骨部分の基部に当たる部分である。この部分では、周辺の骨も被熱を受けており、イノシシ頭部の骨の集中箇所から続く一連の被熱範囲に含まれる。もう1か所は先端部近くにみられる被熱の痕跡である。一部のみ黒色化し、周辺の骨にも被熱の痕跡が認められる。付近での小範囲での被熱の痕跡が認められるが、周辺の被熱骨はやや高い位置から出土し、時期の隔たりがあるとみられる。また鹿角直下のシカ頭蓋骨が全面に火を受けているにもかかわらず、その上に位置する鹿角の第2枝周辺に被熱の痕跡が全く認められない。同一個体の基部と先端部に見られるこれらの被熱についての解釈として、上記のような時間的差異の可能性があることから、既報告の『取掛西貝塚(5) I』での指摘のように、例えば、廃棄当時、角は立っておりその際に基部は火を受け、その後倒れ、先端部がある付近で火を受けたと想定すれば、この出土状況と被熱の痕跡に説明がつく。

(4) 祭祀的要素の可能性の有無

(1)～(3)に挙げたような部位の比率、出土状況、被熱の有無が通常の廃棄行為によって起こりえるかどうかについて検討してみたい。そこでまず、どういった場合に動物儀礼などを含む祭祀的行為があったと考古学者がみなしているのかを挙げてみたいと思う。

出土動物遺体から動物儀礼の可能性を考えるにはいくつかの要件が必要である。a. 頭部の骨があること b. 意図的な配列がみされること c. 骨に伴った区画や施設があること d. 骨に加工がみされること e. 焼けていること f. 特異な部位や種などの偏りがみられること、これらa～fまでのなかで2個以上の要件がそろって初めて動物儀礼の可能性が出てくる。例えば、a・b = 「頭骨儀礼」、c・e = 「焼骨儀礼」、d・e = 「ト骨儀礼」、d・f = 「刻骨儀礼」、b・f = 「未成獣儀礼」と呼称されている儀礼の可能性が考えられている。取掛西貝塚では動物儀礼の認定条件のa、b、e、fなどの様相がみられることから動物儀礼の可能性が提示されている。まずaおよびfに関してだが、部位別頻度の項目で示したように、頭部の骨への偏りは明らかであり、aの「頭部の骨があること」やfの「特異な部位や種などの偏りがみられること」に関しては条件を満たしている。

次にbの「意図的な配列」に関してだが、これに相当する可能性がある箇所が、イノシシ頭部の骨の集中箇所である。イノシシの頭部の骨にみられるある程度規則性をもった出土状況は、配列に相当すると考えられる。単純な廃棄行為の結果であれば、規則性をもった配置という検出状況にはならないであろう。こうしたことから、ある一定の規則性を持った出土状況の場合には、それを意図的な配列や配置とみなすことは可能である。

ではeの「焼けていること」に関してはどうであろうか。本貝塚のように、強い火による意図的な行為があったと想定されるような被熱状況の場合であっても、その行為が衛生面の考慮などによるものか、祭祀的思惑があつての被熱なのかは不明である。ここで、そもそも火を受けること自体が祭祀行為の結果とみなせるかどうかも焦点の一つになってくると思われる。火を受けることが祭祀的行為を伴うとみなす多くの要因が、縄文時代後晩期に多く出土する被熱を受けた骨片が念頭に置かれている場合が多い。こうした焼骨出土例の要因として、縄文時代晩期に増加するシカ・イノシシの骨の増加から狩猟儀礼との結びつ

きを、後晩期という社会性を含んだ上での指摘がある(新津 1985)。一方で、配石遺構出土の焼骨事例をまとめ、その傾向を早く示した高山は民俗・民族例から骨を焼くことは狩猟・漁撈儀礼とは結びつく事例はみられないとして、焼骨と狩猟儀礼の結びつきを否定している(高山 1976、1977)。ただし、死者に持たせるために焼き、碎いて撒くという、アイヌの「物送り」に通じる信仰の存在を想定するなど、この時期の焼骨という特異な事例に対しては、何らかの心理的側面に基づく行為の結果と捉えている意見が多い。しかしこうした焼骨は、住居や土坑、包含層からも出土しているものの、多くは配石遺構に伴い、いわゆる特異な遺構の検出状況がみられ、c の「骨に伴った区画や施設があること」を伴う場合が多い。焼くといった行為と骨の関係性については、大場による聖火での浄化(大場ほか 1963) や金子の火と淨めの思想による焼骨の形成(金子 1984)などをはじめ、縄文社会における火そのものの神聖さが指摘されるなど(新津 1985)、火そのものに何かしらの特別なものがあったとみなしている意見がある。

こうした状況は、貝塚そのものにもいえる。研究者によっては貝塚そのものを儀礼と捉える場合があるなど、貝塚そのものの認識ともかかわる複雑な問題を含んでいる。①貝塚の存在そのものが儀礼行為の結果であると考える場合②貝塚や遺跡内で少し動物骨がまとまって出土したのを儀礼的配置と考える場合③動物の頭蓋骨などが何らかの人為的加工をされたり、配石などの遺構を伴って明らかに人為的配慮が加えられていると認めるときに限って、それらを儀礼に伴うと考える場合など様々な意見がある(西本 1983)。

これまでに動物儀礼の可能性が考えられる遺跡として、本貝塚以外に以下の遺跡が報告されている。動物儀礼の代表例として挙げられるのが、北海道釧路市の東釧路貝塚(縄文時代前期)や静岡県伊東市の井戸川遺跡(縄文時代後晩期)である。これらは配列に特徴を持ち、前者はイルカ類の後頭部を中心に吻部を外側に向けた 5 個の頭蓋骨を放射状に配置したものと吻端部を中心にし後頭部を外側に向けた 5 個の頭蓋骨を放射状に配列したものがみられ、後者は鯨の椎体を中心にして、イルカ類、シカ、イノシシの頭蓋骨が配置されている。また千葉県茂原市の下太田貝塚(縄文時代中期)では、中期後葉の墓域は人を環状に埋葬し、そのうちの一つの環状墓域の中央にイノシシの若獣が屈葬姿勢で埋葬されていた。大規模な配石遺構をもち、有名な山梨県北杜市金生遺跡(縄文時代晩期)では、8 号土壙中から大量の焼けたイノシシ下顎骨が出土している。総破片数 176 点、最小個体数にして 138 個体が出土し、うち 115 個体は第 1 後臼歯の萌出する段階のもので当歳であり、死亡推定季節は秋、雄の成獣の犬歯はすべて抜かれているという非常に特異な面をもつ。またこの他にも千葉県松戸市幸田貝塚(縄文時代前期)では、掘り込みの深い竪穴住居が北方狩猟民に見られる「冬の家」である可能性を考え、獣骨は冬の家を去るにあたっての送りであり、さらに貝の送りを行ったという意見が提示された。福島県いわき市大畑貝塚(縄文時代中期)では、縄文中期の貝層に大型のアワビを選んで敷きつめているのでアワビ送りの存在が指摘され、岩手県大船渡市宮野貝塚(縄文時代後期)では、動物骨集中の中で、イノシシとシカの頭部の骨が分けて置かれていることから、何らかの祭を行った可能性が指摘されるなど、いくつかの遺跡によって、動物儀礼の可能性が唱えられる場合がある。さらに石川県能登町真脇遺跡(縄文時代晩期)では骨の間から彫刻を施した大きな柱状木製品が出土し、大量に出土しているイルカの骨との関係性が指摘され、福島県いわき市薄磯貝塚(縄文時代晩期)では、シカとイノシシの送り行為、カキの特殊な扱いが唱えられ、その他にもいくつかの遺跡で動物儀礼について指摘される例がみられる。しかし、こうした事例は先述の通り、研究者により動物儀礼とみなさないものもある。

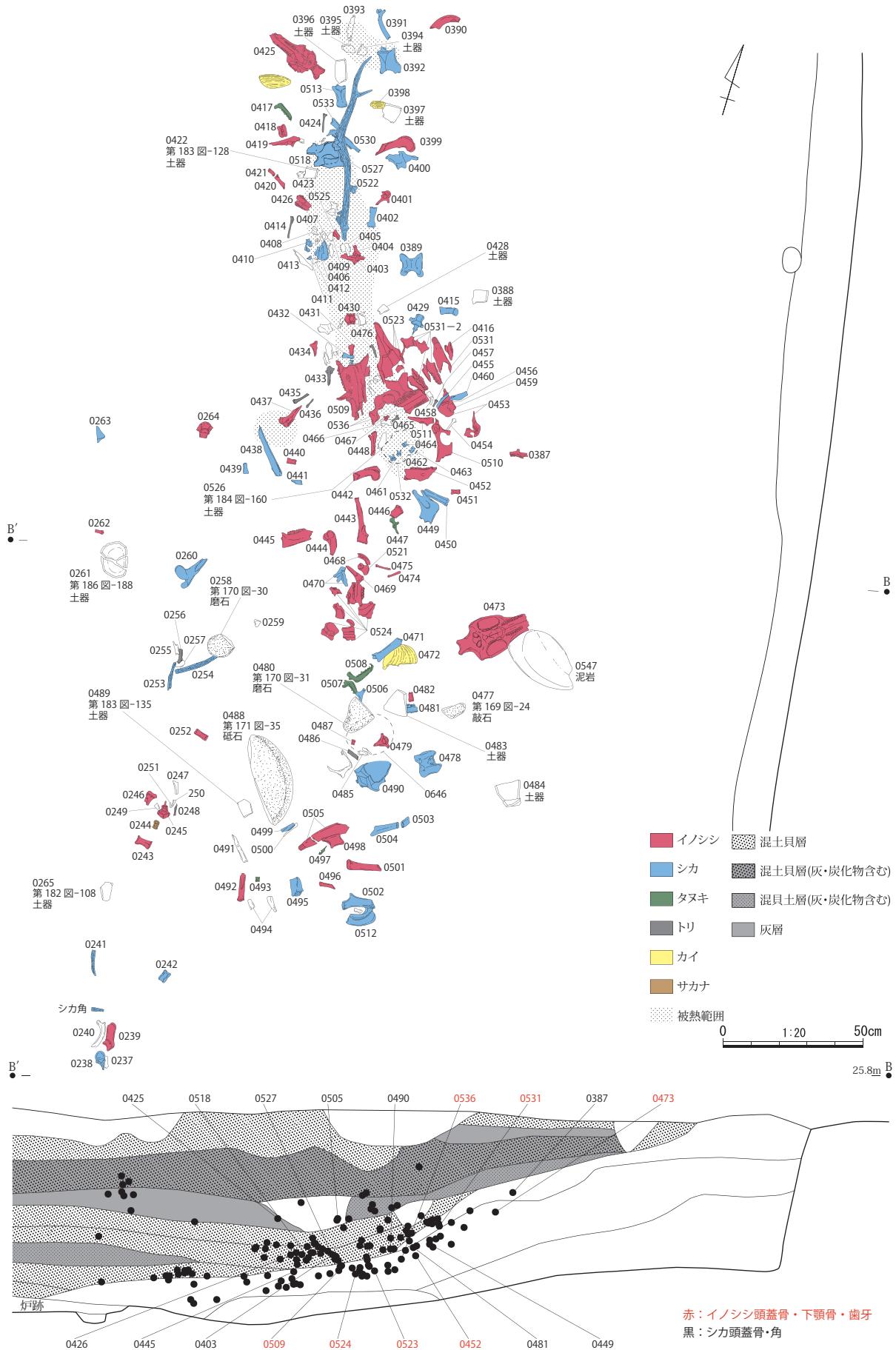
縄文時代早期という早い段階に本貝塚以外に同様の検出事例がこれまでにみられないことも、積極的に動物儀礼と認定することを考古学者によっては踏みとどまらせる理由の一つにあるだろう。食料以外の目

的で焼かれ、埋納されるようになるのは、長野県千曲市幅田遺跡や同県坂城町込山C遺跡の事例からも、これまで中期後半からとみられてきた。両遺跡からは配石や敷石の下の埋設土器中からイノシシ等の焼骨が出土している。また最近では、埼玉県春日部市神明貝塚などで灰の生成や集積など、灰層に対しても新たな見解が出されるなど(中野 2018)、「焼く」行為への新しい見方もあることから、様々な要素から検討する必要がある。また、動物遺体の状態からだけでは儀礼の内容、つまり葬送儀礼であったのか、狩猟儀礼であったのか、それとも通過儀礼などであったのかはわからないため、そこには動物絵画や動物像などの遺物、民族誌や民俗誌、現代の神事など幅広い要素が加わった上で、動物儀礼について議論がはじめて可能となるわけであり、考古学上の動物儀礼の認定には可能性の提示にとどまることが多い。動物儀礼の認定には十分な考慮が必要であるが、本貝塚でみられた、特定の部位への偏りや配列、また被熱の状況は事実であり、祭祀的様相を含む可能性がある。今後同様な事例が増加することにより、本貝塚事例がより重要になることは間違いないであろう。

末筆となりましたが、今回の報告にあたっては、西本豊弘先生(国立歴史民俗博物館(当時))に多大なるご教示を賜りました。深く感謝申し上げます。また、発掘調査現場に出させていただき、分析と報告の機会を与えていただきました船橋市教育委員会の方々に厚く御礼申し上げます。

【引用・参考文献】

- 植月 学 2010 「縄文晩期骨塚における動物遺体の形成過程」『動物考古学』27 日本動物考古学会
- 大竹憲治 1983 「縄文時代における動物祭祀遺構に関する二つの様相—東北地方南部の資料を中心として」『道平遺跡の研究』福島県大熊町教育委員会
- 大場磐雄・永峯光一・原 嘉藤 1963 「長野県東筑摩郡四賀村井刈遺跡調査概報」『信濃』15-12 信濃史学会
- 金子浩昌 1984 「動物遺存体」『なすな原遺跡—No.1 地区調査』なすな原遺跡調査会
- 桐原 健 1969 「縄文中期にみられる室内祭祀の一姿相」『古代文化』21-3・4 古代学協会
- 佐藤孝雄 1993 「動物儀礼の「復元」と民俗誌の利用」『新視点 日本の歴史』第1巻原始編 新人物往来社
- 高山 純 1976 「配石遺構に伴出する焼けた骨類の有する意義(上)」『史学』47-4 三田史学会
- 高山 純 1977 「配石遺構に伴出する焼けた骨類の有する意義(下)」『史学』48-1 三田史学会
- 戸田哲也 1971 「縄文時代における宗教意義について—田端環状積石遺構を中心として」『下総考古学』4 下総考古学研究会
- 中野達也 2018 「灰層を伴う燃焼遺構の特徴」『春日部市埋蔵文化財発掘調査報告書第20集 埼玉県春日部市神明貝塚総括報告書』春日部市教育委員会
- 新津 健 1985 「縄文時代後晩期における焼けた獸骨について」『日本史の黎明—八幡一郎先生頌寿記念考古学論集』六興出版
- 西村正衛 1956 「信仰」『日本考古学講座』第3巻縄文文化 河出書房
- 西本豊弘 1983 「縄文時代の動物と儀礼」『歴史公論』雄山閣
- 西本豊弘 1995 「縄文人の食肉交換について」『動物考古学』5 日本動物考古学会
- 林 謙作 1980 「貝の花貝塚のシカ・イノシシ遺体」『北方文化研究』13 北海道大学北方文化研究室
- 本郷一美 1991 「哺乳類遺体に残された解体痕の研究—鳥浜貝塚85区出土の獸骨をとおして」『国立歴史民俗博物館研究報告』29 国立歴史民俗博物館
- 松井 章 2003 「動物祭祀」『神々のいる風景』岩波書店
- Binford,L.R. 1981, Bones: Ancient Men and Modern Myths. Academic Press. New York



第297図 5次SI-002 動物骨出土状況

第3表 5次 SI-002 動物骨集中 動物遺体リスト

遺物番号	枝番	グリッド	別表	種名	部位	L・R	残存部分	個数	年齢	備考
0190		C区		シカ・イノシシ	頭蓋骨片		眼窩	1		
0203		H区		シカ・イノシシ	大腿骨片		中間部片	1		
0234		H区		シカ・イノシシ	胸椎		椎体・椎弓	1		
0235		H区		シカ・イノシシ	四肢骨片		中間部片	1		
0236		H区		シカ・イノシシ	椎骨片		椎弓片	1		
0237		H区		シカ・イノシシ	肋骨片		先端部のみ	1		
0238		H区		シカ	胸椎		椎体・椎弓	1		
0239		H区		イノシシ	踵骨	R	完存	1	I95.16.d:35.34	
0240		H区		シカ・イノシシ	肋骨	L	近位端-中間部	1		
0241		H区		シカ	角		角尖部のみ	1		
0242		H区		シカ	距骨	R	完存	1	I45.65.d:28.85	
0243		H区		イノシシ	肩甲骨	L	白-中間部	1	白I34.26.d:21.97	
0244		G区		マグロ	椎骨		椎体のみ	1		
0245		G区		イノシシ	軸椎		完存(椎環板未癒合)	1		
0246		G区		イノシシ	脛骨	R	近位部(近位端未癒合)	1	若獣	
0247		G区		シカ・イノシシ	肩甲骨片		破片	1		
0248		G区		キジ	中足骨	L	近位端-中間部	1		
0249		G区		陸獣	部位不明破片		破片	1		
0250		G区		陸獣	部位不明破片		破片	1		
0251		G区		ヒト	頭蓋骨片		破片	1		
0252		G区		イノシシ	基節骨	L	完存	1		
0253		G区		シカ	角			1		
0254		G区		シカ	角			1		No 0253・No 0254は同一個体、一本角、切痕あり
0255		G区		シカ・イノシシ	四肢骨片		中間部片	1		No 0253・No 0254は同一個体、一本角、基部の方の表面にスズ付着
0256		G区		キジ	肩甲骨	R	近位端-中間部	1		
0257		G区		陸獣	頭蓋骨片		破片	1		
0259		G区		シカ・イノシシ	寛骨片		破片	1		
0260		G区		シカ	上腕骨	L	近位端-中間部	1		上腕骨及び近位部骨体(三角筋線近く)内側に解体痕あり Bp:70.20.Dp:(56.58).Bt:41.99
0262		ベルト⑦区		イノシシ	第3中手骨	R	近位端-遠位端	1		一部スス付着
0263		ベルト⑦区		シカ	寛骨片	L	坐骨片	1		
0264		F区		イノシシ	胸椎		椎体・椎弓(棘突起一部のみ)(椎環板未癒合)	1		
0387		ベルト⑧区	第4表					1		
0389		B区		シカ	環椎		ほぼ完存	1	I88.76.d:(99.74), 白 d:53.84	
0390		A区		イノシシ	下顎骨片		下顎角のみ	1		
0391		A区		シカ	肋骨	L	近位端-中間部	1		
0392		A区		シカ	軸椎		ほぼ完存(左側の横突起へ後関節突起欠く) (椎環板未癒合)	1		左側(関節面～横突起)被熱し黒色化、一部火ハネによる欠損部分有 t:(109.07), 白 d:54.43
0393		E区		シカ・イノシシ	肩甲骨片		破片	1		被熱あり(ややオレンジ色に変色)、スズ付着
0398		A区		カラスガイ?	—	—	—	—		
0399		A区		イノシシ	大腿骨	L	中間部-遠位端	1		内側頸のすぐ上に切痕あり Bd:66.33.Dd:57.89.Bt:59.61
0400		B区		シカ	頸椎		ほぼ完存(一部左側の横突起の頸肋部欠く)	1		
0401		B区		イノシシ	胸椎		ほぼ完存(椎環板未癒合)	1		
0402		B区		シカ	肩甲骨	L	白-頸	1		被熱あり 白 d:31.17
0403		F区	第4表					1		
0404		F区		イノシシ	頭蓋骨片		左側後頭頸、後頭骨頸静脈突起	1		
0405		F区		シカ・イノシシ	腰椎		椎体(全面欠く)・椎弓(横突起欠く)	1		被熱あり(黒色化著しい)
0406		F区		シカ	頭蓋骨片		側頭骨-頭頂骨片	1		
0407		F区		シカ・イノシシ	頭蓋骨片		破片	1		被熱あり(全面黒色化)
0408		F区		シカ・イノシシ	頭蓋骨片		破片	1		被熱あり(全面黒色化)
0409		F区		シカ・イノシシ	頭蓋骨片		破片	1		
0410		F区		シカ	頭蓋骨片		左後頭骨片(左岩様骨・左後頭頸一部・左後頭骨頸静脈突起一部)	1		後頭頸一部被熱あり
0411		F区		シカ	頭蓋骨片		側頭骨片(眼窓部片)	1		
0412		F区		シカ・イノシシ	頭蓋骨片		破片	2		
0413		F区		シカ・イノシシ	四肢骨片		中間部片	1		
0414		F区		オオハクチョウ	中手骨	R	近位端-中間部	1		
0415		B区		シカ	肩甲骨	L	白-中間部	1		頸部裏面に切痕あり I49.06.d:34.30, 白 d:(35.56)
0416		B区	第4表					1		
0417		E区		タヌキ	下顎骨	R	(× PIP2P3P4M1M2M3) 下顎枝欠く	1		M1 l:12.89,d:5.63
0418		E区		イノシシ	距骨	L	完存	1		距骨滑車に切痕あり I45.48,d:31.51
0419		E区		イノシシ	尺骨	R	近位端-中間部(近位端未癒合)	1		滑車に切痕あり 滑車 d:23.10
0420		F区		イノシシ	第3中手骨	R	近位端-中間部	1		
0421		F区		イノシシ	基節骨		完存	1		
0423		F区		不明	部位不明破片		破片	1		
0424		E区		キジ	大腿骨	L	近位端-中間部	1		
0425		E区	第4表					1		
0426		F区	第4表					1		
0429		B区		シカ	胸椎		椎体・椎弓(椎環板未癒合)	1		
0430		F区		イノシシ	頸椎		ほぼ完存	1		
0431		F区		イノシシ	基節骨		完存	1		
0432		F区		シカ	基節骨		完存	1		
0433		F区		オオハクチョウ	中手骨	L	中間部-遠位端	1		
0434		F区		イノシシ	肩甲骨	R	白-頸	1	I(34.80).d:(25.15), 白 d:(30.08)	
0435		F区		キジ	大腿骨	L	中間部-遠位端	1		
0436		F区		キジ	尺骨	L	中間部-遠位端	1		
0437		F区		イノシシ	上腕骨	L	中間部-遠位端	1		被熱あり Bd:43.88,Bt:35.53
0438		ベルト⑦区		シカ	中手骨	R	後面のみ	1		半裁(加工痕あり、前面のみ切り取って使用か) 内面にスス付着
0439		ベルト⑦区		シカ	基節骨		完存	1		
0440		ベルト⑦区		イノシシ	基節骨		完存	1		
0441		ベルト⑦区		シカ	桡骨	R	近位端-中間部(近位端一部欠く)(骨端線有)	1		並成獣 スス付着
0442		ベルト⑧区		イノシシ	上腕骨	L	中間部-遠位端	1		Bd:44.60,Dd:41.17,Bt:34.06
0443		ベルト⑧区		イノシシ	尺骨	L	完存(両端未癒合)	1		少量のスス付着 Bp:16.09,Dp:31.35,Bd:16.47,Dd:19.59,Bt:21.67

遺物番号	枝番	グリッド	別表	種名	部位	L・R	残存部分	個数	年齢	備考
0444		ベルト⑦区		イノシシ	上腕骨	R	中間部-遠位端(中間部ほとんどなし)	1		極少量のスス付着 Bd:43.47,Dd:44.97,Bt:37.24
0445		ベルト⑦区	第4表					1		
0446		ベルト⑧区		イノシシ	桡骨	L	近位端-中間部(中間部ほとんどなし)	1		裏面に切痕多数あり Bp:44.97,Dp:23.88
0447		ベルト⑧区		タヌキ	寛骨	L	白一腸・恥・坐	1		
0448		ベルト⑧区		イノシシ	上腕骨	L	中間部-遠位端(遠位端未癒合)	1	若獣	遠位端に被熱あり(黒色化)
0449		ベルト⑧区	第4表					1		
0450		ベルト⑧区		シカ	中足骨	R	近位端-中間部(近位端一部欠く)	1		Bp:29.02
0451		ベルト⑧区		イノシシ	基節骨		完存	1		
0452		ベルト⑧区	第4表					1		
0453		B区	第4表					1		
0454		B区		—	—	—	—	1	—	
0455		B区		シカ	肋骨	R	近位端-中間部	1		
0456		B区		イノシシ	上顎II	R		1		
0457		B区		キジ	大腿骨	L	中間部-遠位端	1		
0458		B区		陸獣	部位不明破片		破片	1		
0459		B区	第4表					1		
0460		B区		シカ	上腕骨	R	中間部-遠位端(遠位端一部未癒合(欠),骨端線有)	1	若獣	Bd:44.36,Bt:33.60
0461		ベルト⑧区	第4表					1		
0462		ベルト⑧区	第4表					1		
0463		ベルト⑧区	第4表					1		
0464		ベルト⑧区	第4表					1		
0465		B区		キジ	大腿骨	R	近位端-中間部	1		
0466		B区		イノシシ	中間手根骨	R	完存	1		
0467		B区		シカ・イノシシ	頭蓋骨片		破片	1		強い被熱痕あり(黒色化)
0468		ベルト⑧区		イノシシ	上顎C	R		1		♂
0469		C区		イノシシ	桡骨	L	中間部-遠位端	1		Bd:36.63,Dd:29.42
0470		G区		シカ	頭蓋骨片	L	切歯骨片	1		
0471		C区		シカ	脛骨	R	中間部-遠位端	1		Bd:39.91,Dd:31.26
0472		C区		カラスガイ／イケチョウガイ？	—	—	—	—		
0473		C区	第4表					1		
0474		C区		イノシシ	第2中手骨	L	完存	1		
0475		ベルト⑧区		イノシシ	第2中手骨	R	完存	1		
0476		B区		キジ	大腿骨	L	近位端-中間部	1		
0478		C区		シカ	環椎		ほぼ完存	1		I:87.13,d(98.56),D:d:56.98
0479		C区		イノシシ	胸椎		椎体・椎弓・棘突起一部(椎環板未癒合)	1		
0481		C区	第4表					1		
0482		C区		イノシシ	基節骨		完存	1		
0485		C区		シカ・イノシシ	基節骨		近位端-遠位端	1		
0486		C区		種不明鳥類	四肢骨片		中間骨片	1		
0487		C区		イノシシ	中節骨		完存	1		
0490		C区	第4表					1		
0491		H区		シカ・イノシシ	四肢骨片		中間骨片	1		
0492		H区		イノシシ	桡骨	L	近位端-中間部	1		Bp:29.98,Dp:21.47
0493		H区		タヌキ	腰椎		椎体・椎弓(横突起欠く)	1		
0494		H区		シカ・イノシシ	四肢骨片		破片(骨端未癒合)	1		
0495		H区		シカ	寛骨	R	腸骨	1		
0496		H区		イノシシ	第5中足骨	L	完存	1		近位及び中間部に切痕あり
0497		H区		タヌキ	尺骨	L	近位端-中間部(近位端一部欠く)	1		
0498		H区		イノシシ	尺骨	R	近位端-中間部(近位端未癒合)	1	若獣	
0499		G区		シカ	中足骨	不明	中間部	1		切痕あり
0500		G区		シカ・イノシシ	四肢骨片		中間骨片	1		
0501		D区		イノシシ	桡骨	L	中間部-遠位端(遠位端未癒合)	1	若獣	
0502		D区		シカ	大腿骨	R	近位端-中間部(近位端未癒合)	1	若獣	
0503		C区		シカ	中手・中足骨片		中間骨片	1		
0504		C区		シカ	脛骨	L	中間部-遠位端	1		Bd:42.77,Dd:32.52
0505		G区	第4表					1		
0506		C区		シカ	寛骨	L	白一坐(白及び坐骨端未癒合)	1	幼獣	
0507		C区		タヌキ	下顎骨	L	(××I3C × P2P3P4M1M2M3) 下顎骨完存	1		
0508		C区		タヌキ	下顎骨	L	(××× CP1P2P3P4M1M2M3) 下顎骨完存	1		
0509		F区	第4表					1	成獣	
0510		ベルト⑧区		イノシシ	寛骨	R	白一腸・恥・坐(腸骨ほとんど欠く)	1		坐骨に切痕あり
0511		B区		イノシシ	尺骨	L	近位端-中間部(近位端未癒合)	1		滑車及び近位部に切痕あり Bp:17.00,Dp:29.96,Bt:22.59
0512		D区		シカ	大腿骨	L	遠位部(おそらく中間部も少しあるが破損)	1		Bd:59.71,Dd:82.37
0513		E区		シカ	軸椎		ほぼ完存	1		左側横突起被熱(黒色化) L(84.29)
0518		F区	第4表			L・R		1		
0521		G区		イノシシ	寛骨	L	白一腸・恥・坐(腸骨ほとんど欠く)	1		No 0510 よりわずかに小さく、同一個体ではない
0522		F区		シカ	脛骨	L	近位端-中間部	1		Bp:68.95,Dp:68.78
0523		B区	第4表					1		
0524		C区	第4表					1		
0525		F区		イノシシ 陸獣 陸種 種不明破片	岩様骨 頭蓋骨片 椎骨片 部位不明破片		破片 破片 破片	1 6 7 13		被熱あり(黒色化) 被熱あり(黒色化) このほかに見あり
0527		F区		シカ	角・角座骨	R		1	成獣	角坐骨被熱、角尖と角基部も一部被熱(角尖は一部のみ黒斑あり)
0530		E区	第4表					1		
0531		B区	第4表					2		
0532		ベルト⑧区		シカ シカ シカ イノシシ 陸獣	大腿骨 肩甲骨片 上顎M3 下顎m3 陸獣骨片	L R L	近位端-中間部(近位端未癒合) 破片 破片	1 2 1 1 9	若獣	I:19.85,1d:19.23,2d:18.28 このほかに見あり
0533		E区	第4表					1		
0536	A	B区	第4表	イノシシ	大腿骨	L	遠位部(滑車のみ)(遠位端未癒合)	1	若獣	摩耗著しい
0623		ベルト⑦区		シカ・イノシシ	頭蓋骨片		破片	1		
0646		G区		イノシシ	上顎M2 下顎M2	L R	未萌出齒 未萌出齒	1 1		I:22.74,1d:17.23,2d:16.00 I:23.74,1d:17.16,2d:15.88
0648		C区		陸獣	部位不明破片		破片	1		

第4表 取掛西貝塚動物骨集中 頭部データ

遺構	遺物 No.	種名	部位名	左右	残存部分	年齢	雌 雄	備考	計測値(mm)									
									M1			M2			M3			
									長さ	前幅	後幅	長さ	前幅	後幅	長さ	前幅	中央 幅	後幅
1	SI-002	0425	イノシシ	頭蓋骨	LR L(× m2m3m4M1M2) R(× P1m2m3m4M1M2) 左右のM2は未萌出で歯槽骨の孔だけ開いている	幼獣 (1歳ぐらいか)			L 16.92	L 13.17	L 13.75							
2	SI-002	0453	イノシシ	頭蓋骨	LR L(P1P2P3P4M1M2M3) R(× P4M1M2M3) 左右M3未萌出・歯槽骨の孔だけあいている I2(R)の未出歯有 頭頂骨・側頭骨・後頭骨・上顎骨・左岩様骨有	若獣 (1.5歳)	頭頂部～後頭部にかけて斜めに切断されている(頭頂部を叩き割られているわけではない)		L 17.45	L 14.00	L 13.17	L 20.92	L 16.56	L 15.69	L 34.43	L 18.98	L 17.23	
3	SI-002	0473	イノシシ	頭蓋骨	LR L(× P4 × M2M3) R(× P3P4M1M2M3) LのM1は歯根のみ残存 LのM2磨滅結構・M3磨滅有(第3咬頭まで磨滅) RのM1磨滅著しい・M2磨滅結構・M3磨滅有(第3咬頭まで磨滅) 頭まで磨滅 頭頂骨・側頭骨・後頭骨・上顎骨	成獣			14.67	(12.65)	13.54	20.37	16.39	16.46	34.08	18.53	16.45	
4	SI-002	0509	イノシシ	頭蓋骨	LR(C × P2P3P4M1M2M3) R(× P1P2P3P4M1M2M3) LRともにM1磨滅著しく、M2磨滅かなり、M3は第1咬頭～第3咬頭まで磨滅有。 左右上顎骨、左頸骨、口蓋骨有	成獣	被熱有(右の頸骨に近い部分の上顎骨黒色化、左の上顎骨や黒色化、火ハネ有)。	♂	R 15.50	R 13.63	R 13.54	R 21.07	R 16.78	R 16.01	R 30.90	R 18.53	R 16.51	R 11.01
5	SI-002	0523	イノシシ	頭蓋骨	LR L(I1I2I3) R(I1 × ×) 頭頂骨・後頭骨・頸骨・左右鼻骨・左右後頭頸・左右鼓室骨・左右岩様骨・左後頭骨頸静脈突起など有	成獣	上部を中心に戻熱し、頭頂骨や後頭骨など黒色化著しく、戻熱によると想われる破損がみられる。吻部など先端部(北側)は戻熱を受けていない。											
6	SI-002	0524	イノシシ	頭蓋骨	LR L(× P4M1M2M3) R(P4M1M2M3) M3はLRともに萌出途中(第1咬頭萌出、第2咬頭萌出途中) 後頭骨・右鼓室骨・右頭頂骨・右眼窩骨有	亜成獣 (2歳前後か)			L 18.32	L 13.97	L 14.95	L 22.75	L 17.27	L 16.81				
7	SI-002	0531-2	イノシシ	頭蓋骨	LR L(C × P3P4M1M2M3) R(I1 × C × P3P4M1M2M3) 後頭骨・右頸骨・右後頭頸・右眼窓・鼻骨・眼窓骨・左後頭骨頸動脈突起・右鼓室骨など有 左右M3未萌出	若獣 (1.5歳)	♂		L 16.61	L 14.01	L 14.86	L 21.94	L 17.54	L 16.54	L 31.40	L 18.49	L 17.26	
8	SI-002	0536	イノシシ	頭蓋骨	LR (× × ×)(P2P3P4M1M2) R(× × × C × P3P4M1M2M3) LRの上記××はI1～I3 LRのP4～M2は歯根のみ残存 LRのM3被熱・磨滅けっこ進む 右耳骨・左鼓室骨・左後頭頸・蝶形骨体など有	成獣	口蓋面を上面にして出土し、眼窓やIのM3などが焼けており、左側(南側)に戻熱の痕跡が認められる。	♂	R 17.51	R 14.65	R 14.79	R 22.44	R 18.48	R 18.75	R 37.58	R 20.69	R 18.38	R 13.20
9	SI-002	0646	イノシシ	頭蓋骨片・遊離歯	LR 右頭頂部・右後頭骨・左右後頭頸・蝶形骨体など有 左右未萌出M2有		右後頭頸など焼骨有				L 22.93	L 17.23	L 16.08					
10	SI-002	0426	イノシシ	上顎骨	LR L(P1m2m3m4M1) R(P1m2m3m4M1) 左右ともP1・M1萌出途中(M1はほとんど出る) 口蓋面のみ残存	幼獣 (5ヶ月程度)												
11	SI-002	0452	イノシシ	上顎骨	L (× P1P2P3P4M1M2 ×) M2磨減少 M3萌出途中	亜成獣 (2歳前後か)	♀	咬耗指数 M1:e M2:d	18.59	14.96	14.98	23.25	18.41	16.05				
12	SI-002	0387	イノシシ	上顎骨	L (× m2m3m4M1) M1磨滅ほとんどなし 標本 8601-12 同歳	幼獣 (0.5歳程度)			17.62	14.11	13.83							
13	SI-002	0403	イノシシ	上顎骨	R (× × × M2 ×) M2磨減少 M3萌出途中	亜成獣 (2歳前後か)						21.70	17.39	16.63				
14	SI-002	0505	イノシシ	下顎骨	LR (I1I2I3 ×) R(I1I2I × C)(× P4M1M2 ×) 左右I2が下に有 RのCは萌出途中 M1磨減少し・M2磨滅ほとんどなし	若獣	♀		17.11	9.96	10.79	20.34	13.38	13.14				
15	SI-002	0531	イノシシ	下顎骨	LR L(I1I2 × × × P3P4) R(I1I2 × × × P3) LのみP1有 LのP3・P4磨滅有	成獣	♀	標本 8601-31 同 サイズ 年齢は標本 8601-31 よりもう少し上か										
16	SI-002	0445	イノシシ	下顎骨	L (× P4M1M2M3) P3は抜けて前部の歯槽骨埋まる P4は歯根のみ残存 M1の磨滅著しい M2・M3はかなり磨滅すすむ	老獣		咬耗指数j	16.30	11.05	12.37	20.39	14.94	15.09	32.87	16.57	16.21	
19	SI-002	0459	イノシシ	上顎骨片	R (× × ×) ← I1I2I3		№0453 同一個体か?											
20	SI-002	0416	イノシシ	切歯骨	R (× × ×) ← i1 ~ i3 I2の未出歯が下に有	幼獣												
22	SI-002	0490	シカ	頭蓋骨	LR 後頭骨・後頭骨底部・右鼓室骨・左右岩様骨・後頭頸・蝶形骨体有	成獣	頭頂骨から側頭骨にかけて人為的に切り取られ、前頭骨などはみられない。このため、頭頂骨角突起の有無など不明で雌雄はみられない。											

	遺構	遺物No	種名	部位名	左右	残存部分	年齢	雌雄	備考	計測値(mm)										
										M1			M2			M3				
										長さ	前幅	後幅	長さ	前幅	後幅	長さ	前幅	中央幅	後幅	
23	SI-002	0518	シカ	頭蓋骨	LR	左右頭頂骨・右岩様骨など有		♂	右角坐骨は前面より斜めに切断。左角坐骨は外側面より斜めに切断。 左角坐骨・右岩様骨に被熱痕。 被熱(黒色化)した部分や火ハネによる欠損部分など全面に火を受けているか。											
24	SI-002	0461・0462・0464	シカ	上顎骨	L	(M1M2) M3 M3 (No.0464) が遊離歯で有 M1 が I No.0464、上顎骨と M2 が No.0462		成獣	出土箇所一帯が被熱を受けており、バラバラに破損して出土。下記シカの右上顎骨が出土状況やサイズや咬耗状態からみて同一個体とみられる。	16.23	17.95	17.03	18.32	19.68	19.71	19.40	19.57	—	18.74	
25	SI-002	0463	シカ	上顎骨	R	(M2)		成獣	上記シカ左上顎骨と同一個体か。											
25	SI-002	0481	シカ	上顎骨	L	(× P3P4 ×) P3・P4 磨滅有		成獣												
26	SI-002	0530	シカ	下顎骨	L	(P2P3P4M1M2M3)		成獣	咬耗指数5 出土状況及び歯の大きさや咬耗状態から下記と同一個体とみられる。	17.32	10.62	10.60	18.23	12.39	12.04	25.83	11.43	11.15		
27	SI-002	0533	シカ	下顎骨	R	(P2P3P4M1 ×)		成獣	咬耗指数3-4 出土状況及び歯の大きさや咬耗状態から上記と同一個体とみられる。	16.31	10.78	11.07								
28	SI-002	0449	シカ	下顎骨	R	(M3) M3 の第3咬頭のみ残存 下顎枝有														

動物遺体の表の凡例

L は左、R は右を示す。

♂ は雄、♀ は雌を示す。

幼は幼獣、若は若獣、亜成は亜成獣、成は成獣、老は老獣を示す。

計測の数値の単位は mm である。

哺乳類の()内は上顎もしくは下顎の植立歯の歯式を示す。

I は切歯、C は犬歯、P は前臼歯、M は後臼歯を示し、小文字は乳歯を示し、数値は歯の番号を示す。また、× は歯が脱落していることを示す。

完は完存、近は近位部、遠は遠位部、幹は骨幹部(中間部)を示す。

咬耗指数については以下の文献による。

シカ：大泰司紀之 1980 「遺跡出土ニホンジカの下顎骨による性別・年齢・死亡季節査定法」『考古学と自然科学』13

イノシシ：Grant,Annie 1982 "The use of tooth wear as a guide to the age of domestic ungulates". Ageing and sexing animal bones from archaeological sites. BAR British Series 109

第5表 取掛西貝塚動物遺体集計

部位	L/R	残存部分	イノシシ	シカ	タヌキ	オオハクチョウ	キジ	その他
頭蓋骨			9, 岩様骨 (L)1,(R)1	2 岩様骨 (L)1				
上顎骨	L		3	3				
	R		4	1				
下顎骨	L		3	1	2			
	R		2	2	1			
遊離歯			12	5				
環椎				2				
軸椎			2	2				
肩甲骨	L		1	1				
	R		1	1			1	
上腕骨	L	完存 近位部 遠位部	2, 若1	1				
	R	完存 近位部 遠位部	1, 亜成1					
橈骨	L	完存 近位部 遠位部	1 1	1				
	R	完存 近位部 遠位部	亜成1 若1					
尺骨	L	完存 近位部 遠位部	若1 若1		1			
	R	完存 近位部 遠位部	若2				1	
寛骨	L		1		1			
	R		1, 幼1					
大腿骨	L	完存 近位部 遠位部	若1 1, 若2	若1			2 3	
	R	完存 近位部 遠位部	若1	1			1	
脛骨	L	完存 近位部 遠位部		1 1				
	R	完存 近位部 遠位部	若1	1				
中手骨	L	第2 第3 第4 第5	1	完存 近位部 骨幹部 遠位部	第2 第3 第4 第5	完存 近位部 骨幹部 遠位部	完存 近位部 骨幹部 遠位部	
	R	第2 第3 第4 第5	1	完存 近位部 骨幹部 遠位部	第2 第3 第4 第5	完存 近位部 骨幹部 遠位部	完存 近位部 骨幹部 遠位部	1
中足骨	L	第2 第3 第4 第5	1	完存 近位部 骨幹部 遠位部	第2 第3 第4 第5	完存 近位部 骨幹部 遠位部	完存 近位部 骨幹部 遠位部	1
	R	第2 第3 第4 第5	1	完存 近位部 骨幹部 遠位部	第2 第3 第4 第5	完存 近位部 骨幹部 遠位部	完存 近位部 骨幹部 遠位部	
中手・中足骨	LR不		1					
踵骨	L		1					
	R		1					
距骨	L		1					
	R							
頸椎			1	1, 亜成1				
胸椎			若3	1, 若1				
腰椎				1	1			
肋骨			2	1				
基節骨			6	2				
中節骨			4	1				
末節骨				2				
その他			手根骨 1	角 3		趾骨 1		カレイ椎骨 1 マグロ椎骨 1

第3項 縄文時代前期以降

2次 SI-001(第 298 図)

調査次：2次 **位置：**調査区西側の平坦部、3・4Tに所在する **遺存状況：**南西側の一部が調査区外となる **形態：**隅丸方形 **規模：**南北(5.6)m、東西(3.9)m、深さ 14cm **重複：**なし **覆土：**下層にローム粒混じりの褐色土、上層にローム粒混じりの暗褐色土が堆積 **床面：**平坦であり、貼床が形成される。硬化面は見られない **炉跡：**調査区内では検出されなかった **ピット：**11基検出した

出土遺物：土器と石器が出土し、IV群2類の土器破片が主体となる。そのうち土器を5点、石器を2点図示した。

土器(第 315 図)

1～5はIV群2類で、1・2は口縁部、3～5は胴部破片である。

石器(第 315 図)

6・7は敲石である。

時期：出土土器の主体がIV群2類であることから、取掛西V期とした。

2次 SI-002(第 298 図)

調査次：2次 **位置：**調査区東側の平坦部、3Tに所在する **遺存状況：**良好 **形態：**胴張隅丸方形 **規模：**南北 3.47m、東西 2.9m、深さ 25cm **重複：**東側で SK-020、南側で SK-021、西側で SK-024 と重複。新旧関係は SK-020・SK-024(古)→SI-002→SK-021(新) **覆土：**壁際に暗褐色土、下層にロームブロック粒混じりの褐色土が堆積した後、上層に黒褐色土が堆積 **床面：**全体的に平坦であり、炉跡および出入口周辺で硬化面が見られる **炉跡：**住居の長軸上やや北壁寄りに位置する。長軸 45cm、短軸 38cm、深さ 8 cm の規模で、円形を基調とし、明瞭な火床面が認められる **周溝：**なし **ピット：**4基検出した

出土遺物：IV群2類の土器破片が主体となる。そのうち土器を5点、石器を2点図示した。

土器(第 315 図)

1～5はIV群2類で、1・2・4は胴部、3は口縁部、5は口縁部から胴下部まで残存する個体である。

石器(第 315 図)

6は磨石、7は磨石もしくは敲石である。

時期：出土土器の主体がIV群2類であることから、取掛西V期とした。

3次 SI-001(第 299 図)

調査次：3次 **位置：**2～5Tに所在する **遺存状況：**完存 **形態：**隅丸長方形 **規模：**北西-南東 7.0m、南西-東南 4.8m、深さ 15cm **重複：**なし **覆土：**壁際に暗褐色土、上層に黒褐色土が堆積し、覆土中に3箇所貝層が検出された **床面：**平坦であり、硬化面は見られない **炉跡：**住居中央部北側で地床炉2基を検出した。炉1は長軸 80cm、短軸 50cm、炉2は長軸 50cm、短軸 40cm、深さは共に 10cm **ピット：**14基検出した **備考：**P4の南側で焼土を検出した。P10は床面からの深さ 264cm で、覆土中から磨製石斧と磨石が出土した。貝層は、いずれもハマグリを主体とする

出土遺物：土器と石器が出土し、IV群4類の土器破片が主体となる。そのうち土器を4点、石器を4点図示した。

土器(第 316 図)

1～4はIV群4類で、1は胴部、2・3は底部、4は口縁部～胴部にかけての破片である。

石器(第 316 図)

5は石鏃、6は磨製石斧、7は軽石製品、8は敲石である。

時期：出土土器の主体がIV群4類のため、取掛西VI期とした。

4次 SI-001(第 300 図)

調査次：4次 位置：調査区南部に所在する 遺存状況：住居跡の南半および東半の大部分は調査区外で、検出範囲の中央に攪乱を受けている 形態：方形に近いと推測される 規模：南北(0.8)m、東西(2.1)m、深さ 38cm 重複：なし 覆土：攪乱により不明 床面：平坦であり、硬化面は見られない 炉跡：検出されなかった ピット：検出されなかった 備考：IV群の3・4類が混在して出土した。また、出土石器の多くに被熱が見られた

出土遺物：土器と石器が出土し、IV群3類・4類の土器破片が主体となる。そのうち土器を1点図示した。

土器(第 317 図)

1はIV群4類で、平縁の口縁部である。

時期：取掛西VI期に帰属すると考えられる。

4次 SI-002(第 300 図)

調査次：4次 位置：調査区南部に所在する 遺存状況：住居跡の北端および南端の一部は調査区外で、部分的に攪乱を受けている 形態：ほぼ長方形に近いと推測される 規模：南北 6.3m、東西 4.6m、深さ 20cm 重複：なし 覆土：壁際～下層に明褐色土、上層に黒褐色土が堆積 床面：平坦であり、硬化面は見られない 炉跡：住居北よりの中央部で地床炉を1基検出した。径 40～50cm の円形で、深さ 9 cm ピット：10基検出され、そのうち P1～4・7 が主穴柱と考えられる 備考：IV群の3・4類が混在して出土した。また、出土石器の多くに被熱が見られた

出土遺物：土器と石器が出土し、IV群3類・4類の土器破片が主体となる。そのうち土器を1点図示した。

土器(第 317 図)

2はIV群4類で、口縁部に突起が見られる。

時期：取掛西VI期に帰属すると考えられる。

4次 SI-003(第 301 図)

調査次：4次 位置：調査区北部に所在する 遺存状況：大部分が攪乱を受けている 形態：ほぼ円形に近いと推測される 規模：径 4.3～4.4m、深さ 25cm 重複：西側でピットと重複し、新旧関係は SI-003(旧)→ピット(新)である 覆土：壁際に暗褐色土および明褐色土が堆積した後、混貝土層が堆積 床面：平坦であり、硬化面は見られない 炉跡：住居中央で地床炉を1基検出した。長軸 61cm、短軸 44cm の円形で、攪乱による削平のため深さは不明である 周溝：2条検出され、外側の周溝が最大幅 20cm で深さ 5 cm、内側が最大幅 26cm で深さ 5 cm である ピット：12基検出され、多くが壁際を巡る 備考：覆土中に混貝土層が検出された。貝の組成はハマグリが主体となり、ほかにも魚類、哺乳類などの動物遺体や炭化種実、貝刃が出土した。IV群の3・4類が混在して出土した。また、出土石器の多くに被熱が見られた。

出土遺物：土器と石器が出土し、IV群3類の土器破片が主体となる。そのうち土器を7点図示した。

土器(第317図)

3～9は4群3類で、3～7は口縁部、8・9は胴部である。4・6は片口の形状となる。

石器(第318図)

24は石皿の破片である。

時期：出土土器はIV群3類が主体であることから、取掛西V期に属すると考えられる。

4次 SI-004(第301図)

調査次：4次 **位置**：調査区北部に所在する **遺存状況**：大部分が攪乱を受けている **形態**：ほぼ円形に近いと推測される **規模**：径3.6～3.8m、深さ14cm **重複**：なし **覆土**：壁際に明褐色土が堆積した後、暗褐色土が堆積 **床面**：平坦であり、中央に硬化面が見られた **炉跡**：検出されなかった **ピット**：検出されなかった **備考**：出土石器の多くに被熱が見られた

出土遺物：土器と石器が出土し、IV群3類の土器破片が主体となる。そのうち土器を2点図示した。

土器(第317図)

10・11はIV群3類で、11は片口の形状となる。

時期：出土土器はIV群3類が主体であることから、取掛西V期に属すると考えられる。

4次 SI-005(第302図)

調査次：4次 **位置**：調査区北部に所在する **遺存状況**：大部分が攪乱を受けている **形態**：ほぼ円形に近いと推測される **規模**：径4.3～4.7m、深さ22cm **重複**：なし **覆土**：壁際に明褐色土が三角堆積した後、褐色土～黒褐色土が堆積 **床面**：平坦であり硬化面が見らなかつた **炉跡**：検出されなかつた **周溝**：1条検出され、最大幅24cm、深さ4cm **ピット**：8基検出された **備考**：出土石器の多くに被熱が見られた

出土遺物：土器と石器が出土し、IV群3類の土器破片が主体となる。そのうち土器を8点図示した。

土器(第318図)

12～19はIV群3類で、12～16は口縁部、17・18は胴部、19は底部である。

時期：出土土器はIV群3類が主体であることから、取掛西V期に属すると考えられる。

4次 SI-006(第302図)

調査次：4次 **位置**：調査区北部に所在する **遺存状況**：大部分が攪乱を受けている **形態**：ほぼ方形に近いと推測される **規模**：東西(2.1)m、南北(0.6)m、深さ15cm **重複**：なし **覆土**：下層に明褐色土が堆積した後、上層に褐色土が堆積 **床面**：形状は不明。硬化面は見られなかつた **炉跡**：検出されなかつた **周溝**：1条検出され、最大幅30cmで深さ51cmである **ピット**：5基検出された

出土遺物：土器と石器が出土し、IV群3類の土器破片が主体となる。そのうち土器を2点図示した。

土器(第318図)

20・21はIV群3類で、20は口縁部、21は胴部である。

時期：出土土器はIV群3類が主体であることから、取掛西V期に属すると考えられる。

4次 SI-007(第302図)

調査次：4次 位置：調査区北部に所在する 遺存状況：大部分が調査区外となる 形態：ほぼ方形に近いと推測される 規模：東西(2.4)m、南北(3.5)m、深さ52cm 重複：北側でピットと重複する。新旧関係は、ピット(旧)→SI-006(新) 覆土：壁際～下層に褐色土が堆積した後、上層に黒褐色土が堆積 床面：平坦で、全体的に硬化面が見られた 炉跡：住居中央東側で地床炉を1基検出した。長軸93cm、短軸77cmの円形基調で、深さ8cmである ピット：11基検出され、その内4基は壁際を巡る出土遺物：土器と石器が出土し、IV群3類の土器破片が主体となる。そのうち土器を2点と石器を1点図示した。

土器(第318図)

22・23はIV群3類で、22は口縁部、23は胴部である。

時期：出土土器はIV群3類が主体であることから、取掛西V期に属すると考えられる。

5T-001 住居跡(第303図)

調査次：6次 位置：5T北端部に所在する 遺存状況：床面の一部にまで耕作の影響を受けていたため遺存状況が悪く、壁面の大部分が消失していた 調査内容：掘削はせずに平面プラン・炉・ピットの検出および記録を行い保存した 形態：不明 規模：検出された炉を住居の中心付近と仮定すると、最大径7m程の規模と考えられる 重複：なし 覆土：住居南の一部に、遺構最下層と考えられる黒褐色土の堆積が見られる 床面：一部残存する床面は基本的に平坦であり、炉の南側には東西約1m、南北約0.8mの範囲で硬化面が見られる 炉跡：地床炉である。トレーニチ北壁より南に60cm程離れた場所で炉を1基検出した。径約0.5mの規模で、円形を基調とする一部に耕作の影響を受けており、上部は削平されていると考えられる。検出のみを行ったため、深さは不明である ピット：炉の周辺から径30～50cmほどの円形プランを4基検出したが、住居内での位置に規則性が見られず、埋没過程について住居覆土と比較検討が出来ないため、4基全てが当住居跡に伴うものと断定出来ない

出土遺物：南側を中心に残存していた覆土から、IV群4類とみられる土器の小破片が5点出土しており、その内2点を掲載した。

土器(第322図)

1～2はIV群4類の胴部破片である。

時期：出土遺物が微量であるが、出土土器がIV群4類のため取掛西VI期に帰属すると考えられる。

5T-002 住居跡(第305～307図)

調査次：6・8次 位置：5T中央部に所在する 遺存状況：北東部分の一部が攪乱されている 調査内容：全ての貝層を採取し、住居構造を記録するために床面まで掘削を行った。なお、東西南北に設定した土層観察用のベルトと、P1～4以外のピットは掘削せずに保存した。調査終了後床面上に山砂を敷き詰め保存処置を行った 形態：隅丸方形 規模：南北5.5m、東西5.7m、深さ20cm 重複：北西側で5T-004住居跡(取掛西VI期)、南西側で5T-005住居跡(取掛西II期)と重複。新旧関係は5T-005(古)→5T-004→5T-002(新) 覆土：壁際に暗褐色土、下層にロームブロック混じりの黒褐色土が堆積した後に、複数の貝層がブロック状に堆積 床面：全体的に平坦であり、長軸4.5m×短軸3.5m程の範囲で硬化面が見られる。また、縄文時代早期の竪穴住居跡(10T-001・007)と比較するため、床面の硬度を土壤硬度計で計測した(第305図下段)。計測箇所は、N-N'上のN1～N6の6か所である。得られた数値か

ら、住居の壁際よりも中央部の硬度が高いという結果になり、検出された硬化範囲と一致した **炉跡**：住居の東西軸で中央部分、南北軸で北壁から南へ約 60cm の位置に地床炉を 1 基検出した。長軸 90cm、短軸 78cm、深さ 15cm で、ややいびつな長楕円形である。火床面が認められ、覆土中に焼土粒および炭化物が含まれる **周溝**：北西と南西側の一部を除き、壁際を巡る。幅 15～40cm、深さ 5～15cm **ピット**：50 基を検出した。径は 11～39cm で、壁際には径の小さいピットが巡る。遺構保存処置の観点から、掘削対象を最小限にするため検土杖を用いて深さを調査し、特に深い P 2～4 以外のピットは概ね 10～30cm 程度であることを確認した。壁際を巡る P 6・19・24～27・31・33・34・38・39・48～50 などは深さ 20cm を超えるものが少なく、他ピットよりも浅い傾向にある。P 1 は北東側の攪乱部分に位置していたために大部分は削平されており、底面付近のみ残存していたが、住居床面からの高低差を考慮に入れると元々 70～80cm 程の深さがあったと考えられる。P 1～4 については他ピットと比較して平面規模がいずれも大きいこと、P 1～4 が住居を 4 分割した際に均等に配置されていること、ピットの位置関係が一辺約 2.5～3.0m の間隔を有する方形となり住居の平面形態と一致すること、P 1 と P 4 との中心部分に炉が配置されることなどをふまえ、P 1～4 を主柱穴と想定し、掘削および記録を行った。ピットの深さは P 2 が 78cm、P 3 が 104cm、P 4 が 79cm であり、事前に行った検土杖の調査結果を裏付けるものとなった。いずれのピットの掘り込みも顕著な傾きは見られず、断面形状は先端に向かって徐々に先細りする **備考**：貝層は 21 か所検出した。覆土下層堆積後に約 4 m 四方の範囲で幾つかのブロックに分かれて最大約 20cm の厚さで堆積しており、ハマグリやカキを含む混土貝層が主体となる。貝層および住居覆土の堆積状況をあわせて記録するため、検出範囲の中で特に貝層のまとまりの良い箇所を対象にサブトレーナーを 2 本 (A-A'・B-B'、N-N'・O-O') 設定し、堆積状況の記録及び貝層の採取を 10cm 深度の人工層位で行った。その他の貝層範囲についても、検出範囲を記録した後に適宜ベルトを設定して貝層を採取し、堆積状況の記録を行った。あわせて炉および周囲の覆土を土壤サンプルとして一部採取した **出土遺物**：IV群 4 類を主体とした土器、石器が出土し、貝層からはツノガイ類製品が出土した。

土器(第 319～322 図)

76 点を図示した。1・2 は IV 群 3 類で、その他の土器は全て IV 群 4 類である。

石器(第 327・328 図)

9 点を図示した。1 は石鏃、2 は器種不明、3 は磨製石斧、4・5 は砥石、6 は磨石、7～9 は軽石製品である。

貝製品(第 322 図)

貝層中からツノガイ類製品が 30 点出土し、そのうち 5 点を図示した。内訳は小玉状 6 点、管状 24 点。79、80 は調査時に検出し、その他の資料は貝層の整理作業中に検出した。特定の貝層に集中する傾向は見られなかったが、南西部の貝層(3、13～15 層)からは検出されなかった。77・78 は小玉状、79～81 は管状の製品である。

時期：出土土器の主体が IV 群 4 類のため、取掛西 VI 期に属すると考えられる。

5T-003 住居跡(第 304 図)

調査次：8 次 **位置**：5T 中央拡張部東部に所在する **遺存状況**：住居の東側一部は調査区外と考えられる。北側には、5T-002 住居跡までのびる攪乱が東西方向に横断し、さらに北東側の一部も攪乱されている **調査内容**：住居平面形の記録、サブトレーナーによる覆土堆積の記録、貝層の検出・採取を行った。調査終了後床面上に山砂を敷き詰め保存処置を行った **形態**：隅丸方形と考えられる **規模**：南北 5.1m、

東西(3.3m)、深さ 15cm 重複：なし 覆土：壁際に暗褐色土、下層にロームブロック混じりの黒褐色土が堆積した後に、住居南側を中心に複数の貝層が堆積 床面：サブトレンチ内の検出範囲では、比較的平坦であった。明瞭な硬化面は見られなかった 炉跡：サブトレンチ内では検出されなかった 周溝：サブトレンチ内では検出されなかった ピット：サブトレンチ内では検出されなかった 備考：貝層を 4 か所検出した。覆土下層堆積後に南側を中心に最大 15cm の厚さで堆積しており、ハマグリやカキを含む混土貝層が主体となる。貝層および住居覆土の堆積状況をあわせて記録するため、最初に貝層の検出範囲の中で特に密度の濃い箇所を対象にサブトレンチを 1 本(A-A'・B-B')設定し、堆積状況の記録及び貝層の採取を 10cm 深度の人工層位で行った。その他の貝層範囲についても、遺構確認面で検出できた箇所については全量を採取した

出土遺物：IV群 4 類を主体とした土器、石器が出土した。

土器(第 322 図)

2 点を図示した。1・2 は IV 群 4 類である。

石器(第 328 図)

1 点を図示した。1 は石鏸である。

時期：出土土器の主体が IV 群 4 類のため、取掛西 VI 期に属すると考えられる。

12T-003 住居跡(第 308 図)

調査次：7 次 位置：12T 中央東部に所在する 遺存状況：住居の北東側一部は調査区外と考えられる。西側と南側の一部に攪乱を受けている 調査内容：平面形態を確認したのみで未精査。確認面で出土遺物を取り上げ、遺構は平面形態を記録し保存した 形態：隅丸方形と考えられる 規模：南北(5.7)m、東西(6.0)m 重複：住居南側で 12T-002 住居跡(取掛西 II 期)と重複する。新旧関係は 002(古)→003(新) 覆土：遺構確認面の所見では、全体的に黒褐色土が堆積している状況を確認できた

出土遺物：IV 群 4 類を主体とした土器、石器が出土した。

土器(第 323 図)

14 点を図示した。IV 群 4 類が主体となる。1 は IV 群 1 類で、それ以外は IV 群 4 類である。

石器(第 329 図)

1 点を図示した。1 は敲石である。

時期：出土土器の主体が IV 群 4 類のため、取掛西 VI 期に属すると考えられる。

18T-001 住居跡(第 309・310 図)

調査次：7 次 位置：18T 中央部に所在する 遺存状況：幅 20cm 程の攪乱が南北方向に数条確認されたが、全体的な遺存状況は良好である 調査内容：住居平面形の検出、サブトレンチによる覆土堆積の記録、貝層の検出・採取(採取した箇所はサブトレンチにかかる範囲のみ)を行い、保存した 形態：隅丸方形である 規模：南北 5.5m、東西 4.2m、深さ 30cm 重複：なし 覆土：壁際にぶい黄褐色土、下層にローム粒混じりの暗褐色土が堆積した後に、複数の貝層が堆積 床面：サブトレンチ内の検出範囲では、比較的平坦であった。また、硬化面を確認した 炉跡：サブトレンチ内の北側で地床炉を 1 基検出した。住居内の南北中心軸上で、やや北側に位置する。中央部分を攪乱されており、長軸 55cm、東西(35)cm、深さ 15cm の規模で、円形を基調とする。明瞭な火床面が認められ、覆土中に焼土粒および炭化物が含まれる 周溝：サブトレンチ内では検出されなかった ピット：北壁際と中央付近から径 20～30cm のピッ

トを2基検出した 備考：貝層を8か所検出し、その内サブトレーナーにかかる5か所の貝層（2～6層）を採取した。覆土下層堆積後に最大25cmの厚さで堆積しており、ハマグリやカキを含む混土貝層が主体となる。貝層および住居覆土の堆積状況をあわせて記録するため、住居の中心部分を通る攪乱部分を利用してサブトレーナーを設定した。貝層中から出土した炭化材を年代測定（第5章第2節第1項）

出土遺物：IV群4類を主体とした土器、石器が出土した。

土器（第324図）

13点を図示した。全てIV群4類である。

石器（第329図）

1点を図示した。1は軽石製品である。

時期：出土土器の主体がIV群4類のため、取掛西VI期に属すると考えられる。

19T-001 住居跡（第311図）

調査次：7次 位置：19T中央部に所在する 遺存状況：住居の西側は調査区外となる。また、南北方向に幅約15cm、住居中央部分に幅約1.5mの範囲が攪乱されていた 調査内容：住居平面形の検出、サブトレーナーによる覆土堆積の記録、貝層の検出・採取（採取した箇所はサブトレーナーにかかる範囲のみ）を行い、保存した 形態：南東側は隅丸基調であるが北東側は円形基調となり、検出範囲内ではやや不整形を呈する 規模：南北(6.5)m、東西(3.7)m、深さ20cm 重複：南側で土坑と重複する。新旧関係は土坑（旧）→001（新）である 覆土：壁際にぶい黄褐色土、下層にロームブロック混じりの褐色土や黒褐色土が堆積した後に、複数の貝層が堆積 床面：サブトレーナー内の検出範囲では、比較的平坦であった。明瞭な硬化面は見られなかった 炉跡：サブトレーナー内では検出されなかった 周溝：サブトレーナー内では検出されなかった ピット：北側で径約20cmのピットを1基検出した 備考：貝層を6か所検出し、その内サブトレーナーにかかる3か所の貝層（2～4層）を採取した。覆土下層堆積後に最大15cmの厚さで堆積しており、ハマグリやカキを含む混土貝層が主体となる。貝層および住居覆土の堆積状況をあわせて記録するため、調査区西壁沿いに幅50cmのサブトレーナーを設定した。貝層中から出土した炭化材を年代測定（第5章第2節第1項）

出土遺物：IV群4類を主体とした土器、石器が出土した。

土器（第325図）

2点を図示した。全てIV群4類である。

石器（第329図）

1点を図示した。1は軽石製品である。

時期：出土土器の主体がIV群4類のため、取掛西VI期に属すると考えられる。

24T-004 住居跡（第312図）

調査次：8次 位置：24T南西部に所在する 遺存状況：住居の南～西側は調査区外となる。目立った攪乱は受けておらず、遺存状況は良好である 調査内容：住居平面形の検出、サブトレーナーによる覆土堆積の記録を行い保存した 形態：北東側は隅丸基調であるが南東側は円形基調となり、検出範囲内ではやや不整形を呈する 規模：南北(5.1)m、東西(3.6)m、深さ25cm 重複：東側で24T-003住居跡（取掛西II期）と重複する。新旧関係は003（旧）→004（新）である 覆土：下層に暗褐色土、上層に黒褐色土が堆積している 床面：サブトレーナー内の検出範囲では、比較的平坦であった 炉跡：西壁際で地床炉

を1基確認した。西側の半分程が調査区外と考えられる。長軸50cm、短軸(20)cm、深さ15cmの規模で、円形を基調とする。明瞭な火床面が認められ、覆土中に焼土粒および炭化物が含まれる 周溝：サブトレーニチ内では検出されなかった ピット：径約20～40cmのピットを3基検出した

出土遺物：IV群を主体とした土器、石器が出土した。

土器(第326図)

13点を図示した。1はIV群1類、ほかは全てIV群4類である。

石器(第329図)

2点を図示した。1は石鏸、2は軽石製品である。

時期：出土土器の主体がIV群4類のため、取掛西VI期に属すると考えられる。

10T-010 住居跡(第314図)

調査次：8次 位置：10T東部 遺存状況：炉のみ残存 調査内容：平面形の検出、記録の後、焼土範囲北側を半截した。遺物の取り上げと覆土の記録の後、完掘せず保存した 形態：不明 規模：不明 重複：なし 覆土：残存しない 炉跡：土器片圓炉。火床面の被熱やや弱い 備考：最大径36cmの焼土範囲がみられた。炉体となる土器は裏込めと考えられる土(4層)によって保持される。一部の土器は外面を上にして倒れるような形で出土しており、炉壁を構築していた土器が炉廃絶後に内部に倒れこんだものと推察される

出土遺物：土器片圓炉を構成した土器片が主体となる。他に小礫1点が出土しているが、図示していない。

土器(第330図)

接合資料を含む8点(接合前14点)が出土し、すべてを図示した。すべてVI群2類に比定され、1～4・6は同一個体である可能性が高い。1～4は口縁部片であり、うち1～3は把手を欠損する。5～8は胴部片である。

時期：VI群2類の土器がまとまって出土しており、取掛西VII期に属すると考えられる。

15T-002 土坑(第313図)

調査次：7次 位置：15T中央部に所在する 遺存状況：目立った攪乱は受けておらず、遺存状況は良好である 調査内容：平面形を検出して半截し、覆土堆積の記録を行い保存した 形態：円形 規模：直径約1.5m、深さ8cm 重複：なし 覆土：下層に暗褐色土、上層に褐色土が堆積している 底面：平坦であった

出土遺物：なし

時期：時期を特定できる遺物がないため判断が困難であるが、覆土の観察結果から考えて、縄文時代に属するものと想定される。

20T-003 土坑(第313図)

調査次：7次 位置：17T北端部に所在する 遺存状況：幅20cmほどの範囲で南北方向を攪乱される 調査内容：平面形を検出して半截し、覆土堆積の記録を行い、保存した 形態：北西-南東が長軸になる隅丸方形 規模：長軸2.2m、短軸1.6m、深さ24cm 重複：複数の縄文時代と考えられるピットと重複しており、20T-003土坑のほうが新しい 覆土：下層に暗褐色土、上層に黒褐色土が堆積している 底面：平坦であった

出土遺物：なし

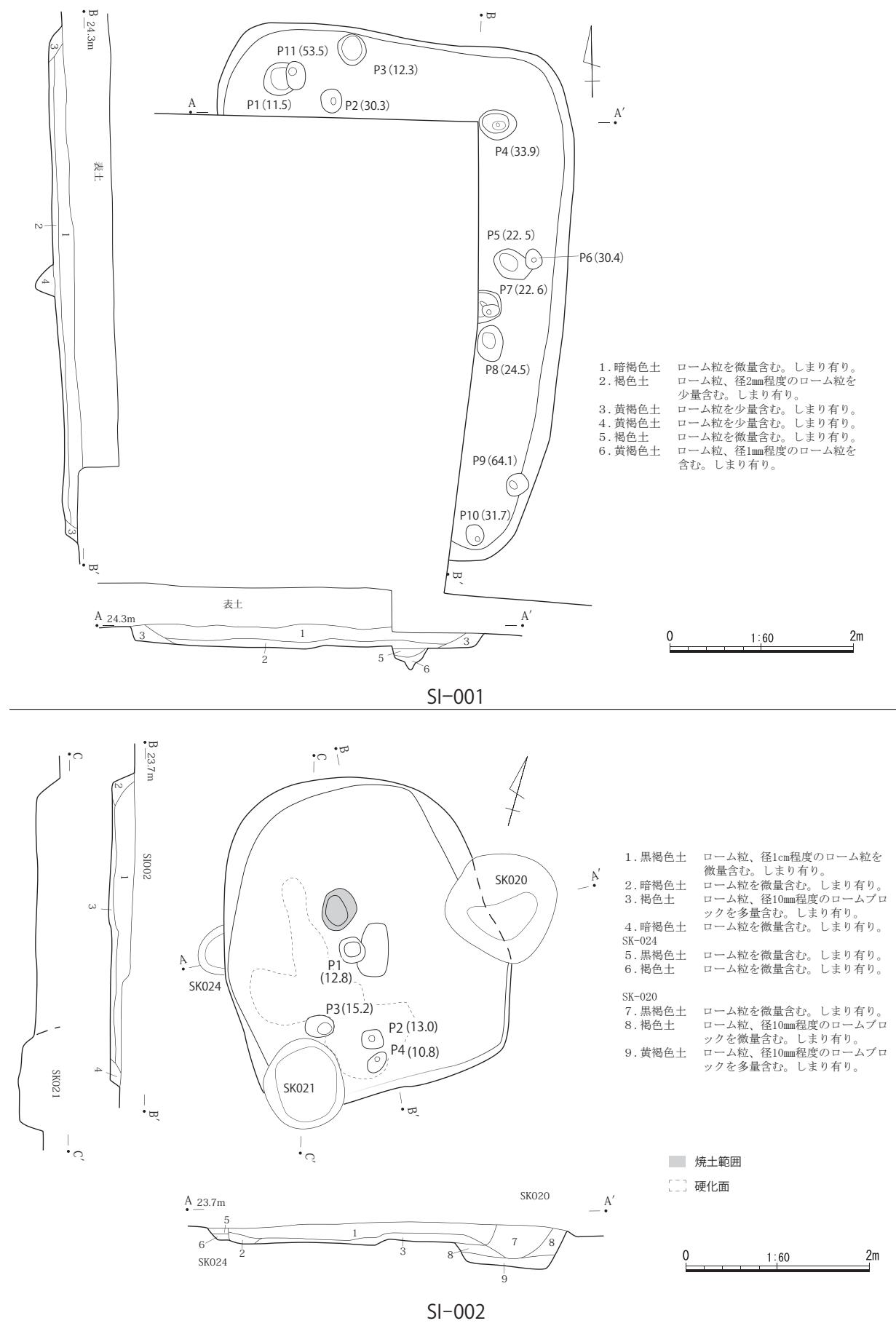
時期：時期を特定できる遺物がないため判断が困難であるが、覆土の観察結果から考えて、縄文時代に属するものと想定される。

20T-004 炉跡(第313図)

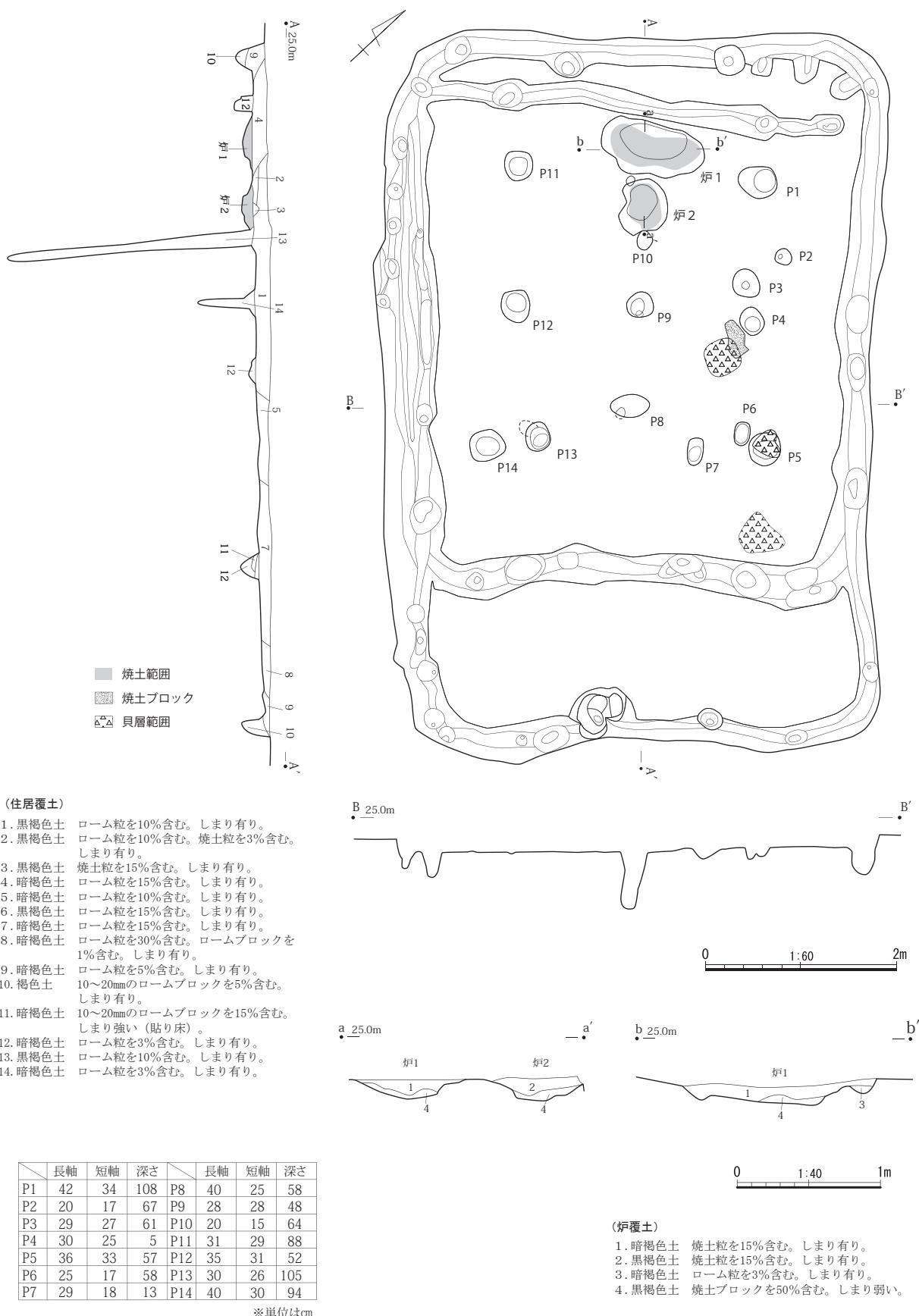
調査次：7次 位置：20T南側に所在する 遺存状況：東側一部および中央部を攪乱される 調査内容：平面形を検出して半截し、覆土堆積の記録を行い、保存した 形態：橢円形 規模：長軸(1.2)m、短軸1.0m、深さ20cm 重複：なし 覆土：下層に褐色土、上層に暗赤褐色土が堆積している。特に覆土中央部は焼土粒が顕著にみられ、底面に火床面が形成される 底面：平坦であった

出土遺物：なし

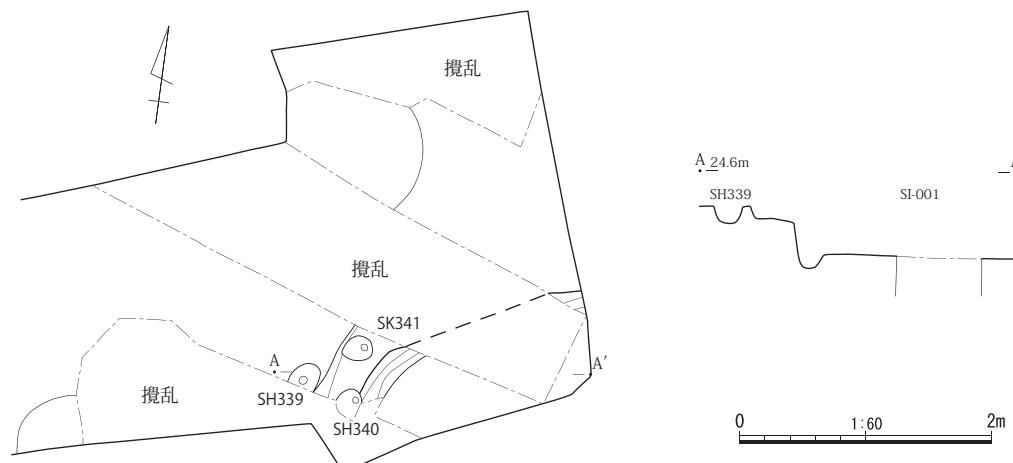
時期：時期を特定できる遺物がないため判断が困難であるが、覆土の観察結果から考えて、縄文時代に属するものと想定される。



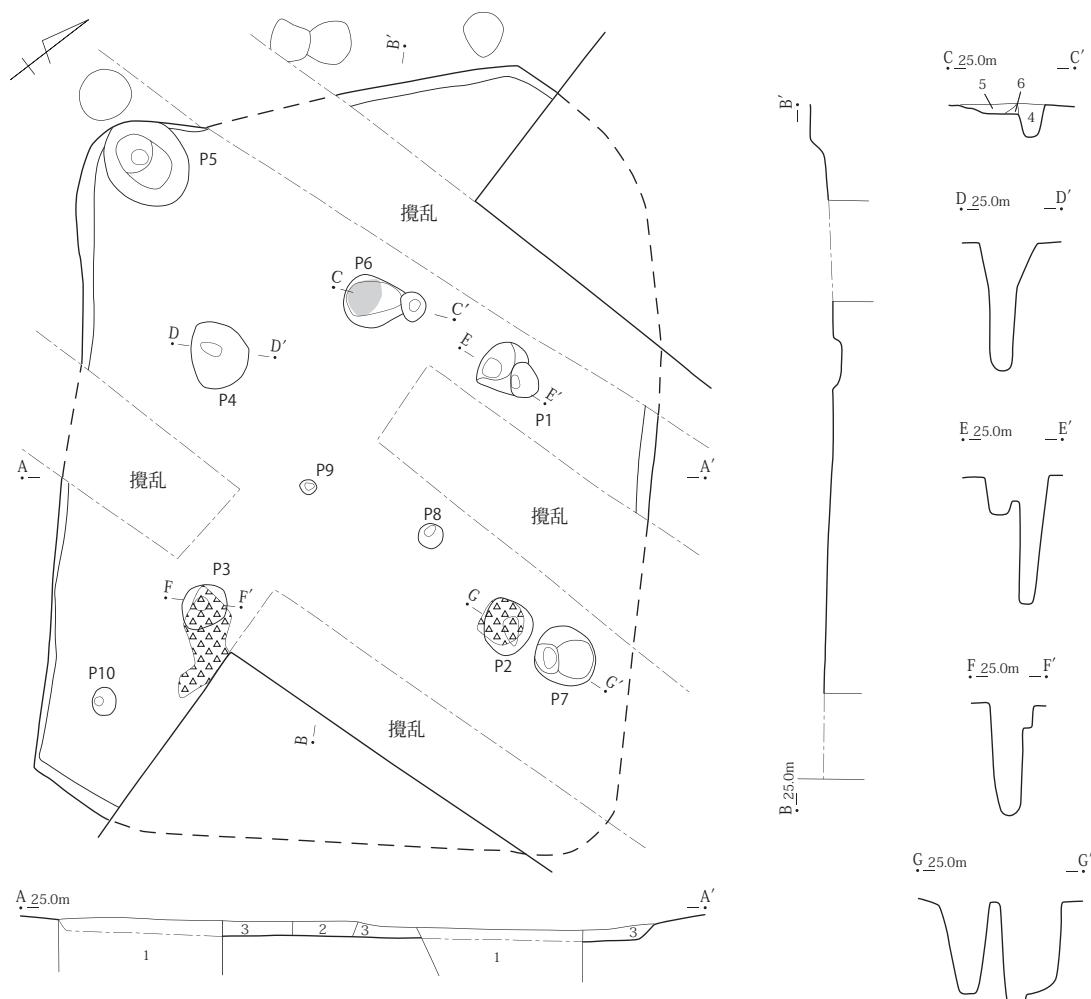
第298図 2次SI-001・002



第299図 3次SI-001

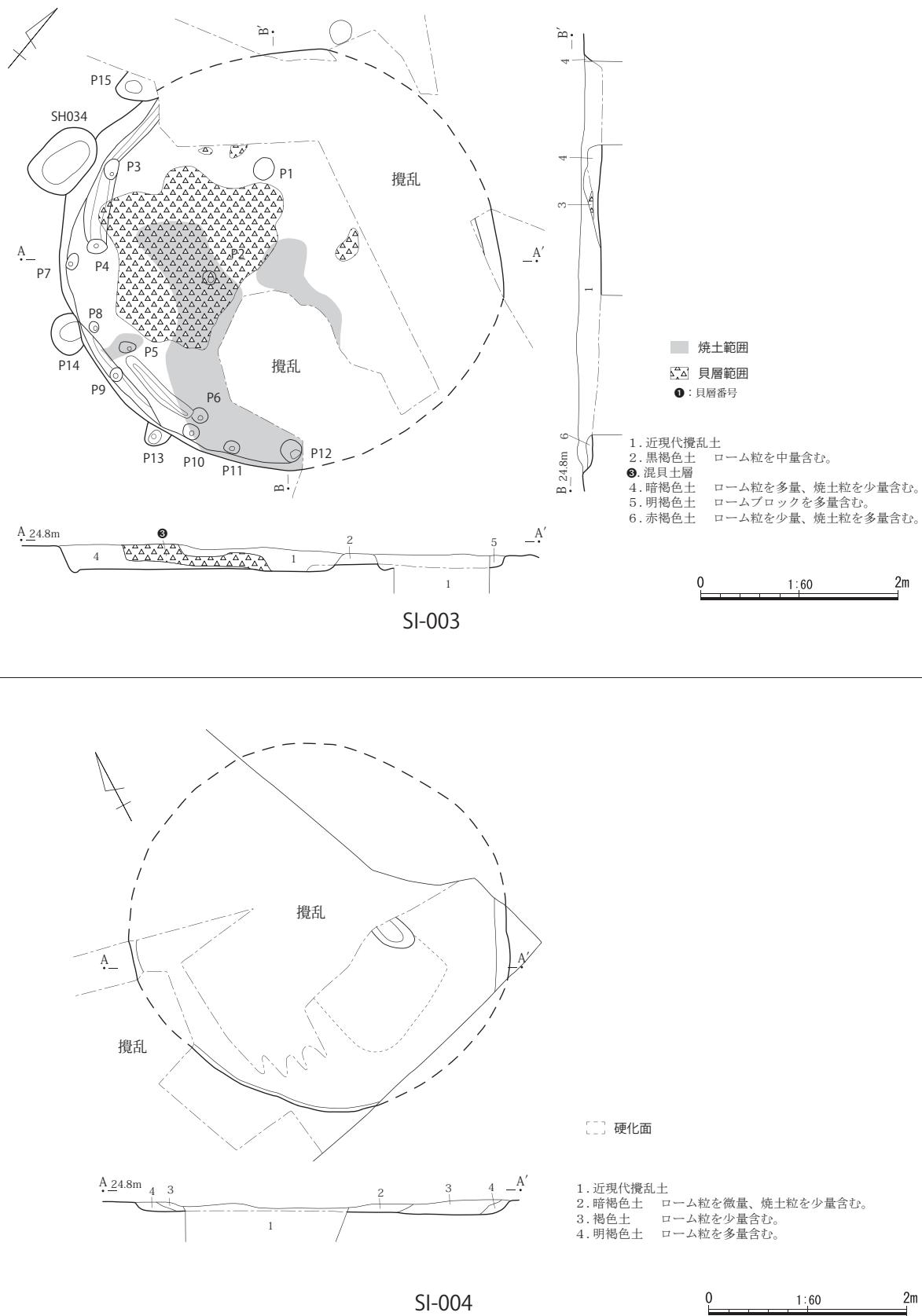


SI-001

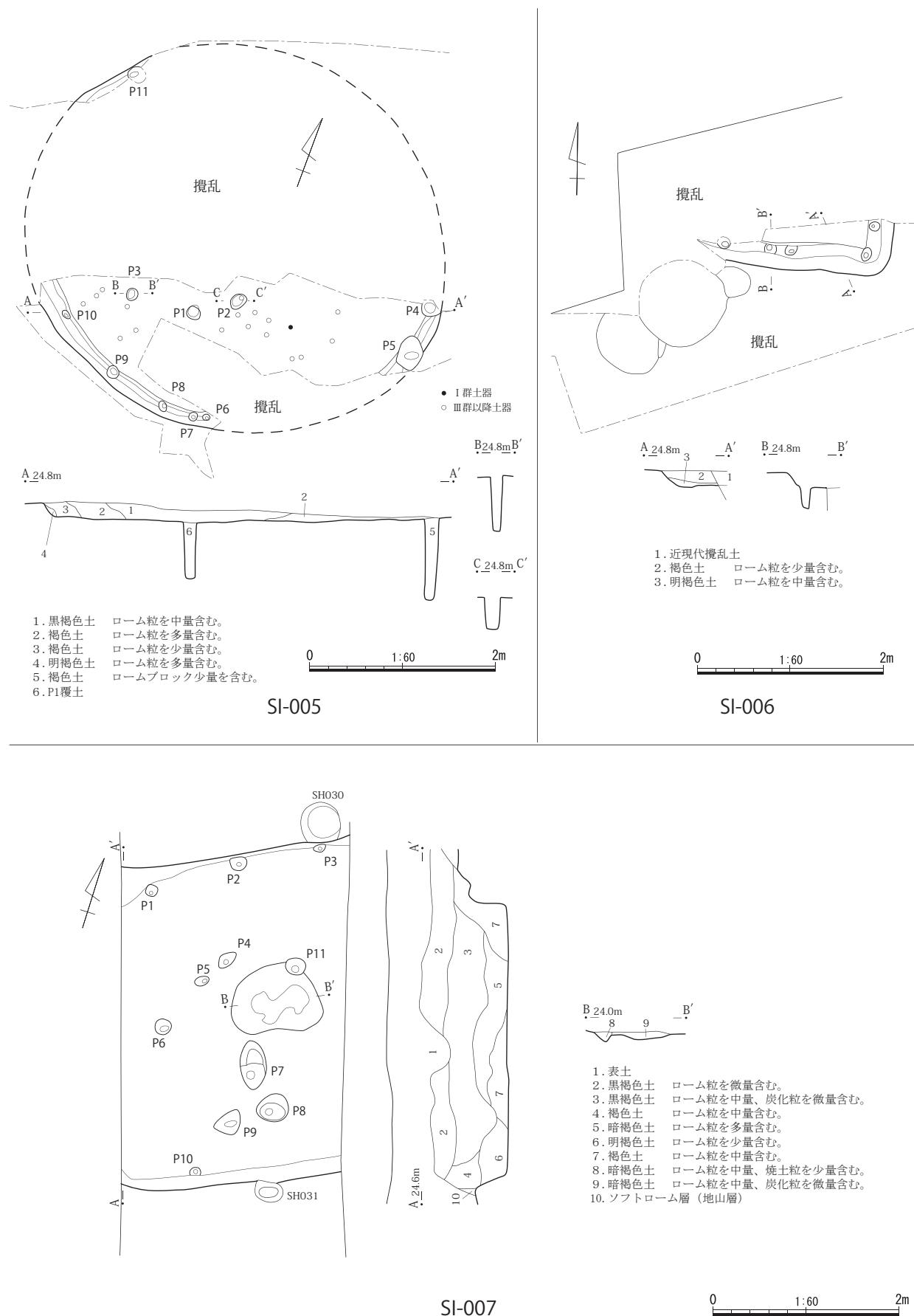


SI-002

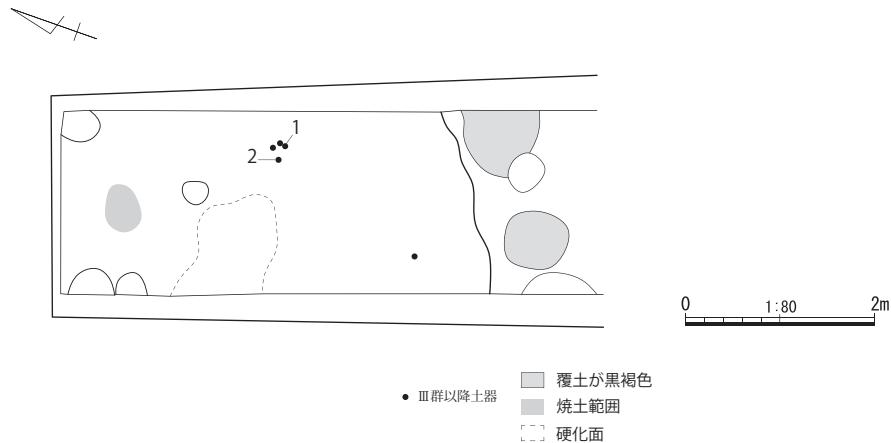
第300図 4次SI-001・002



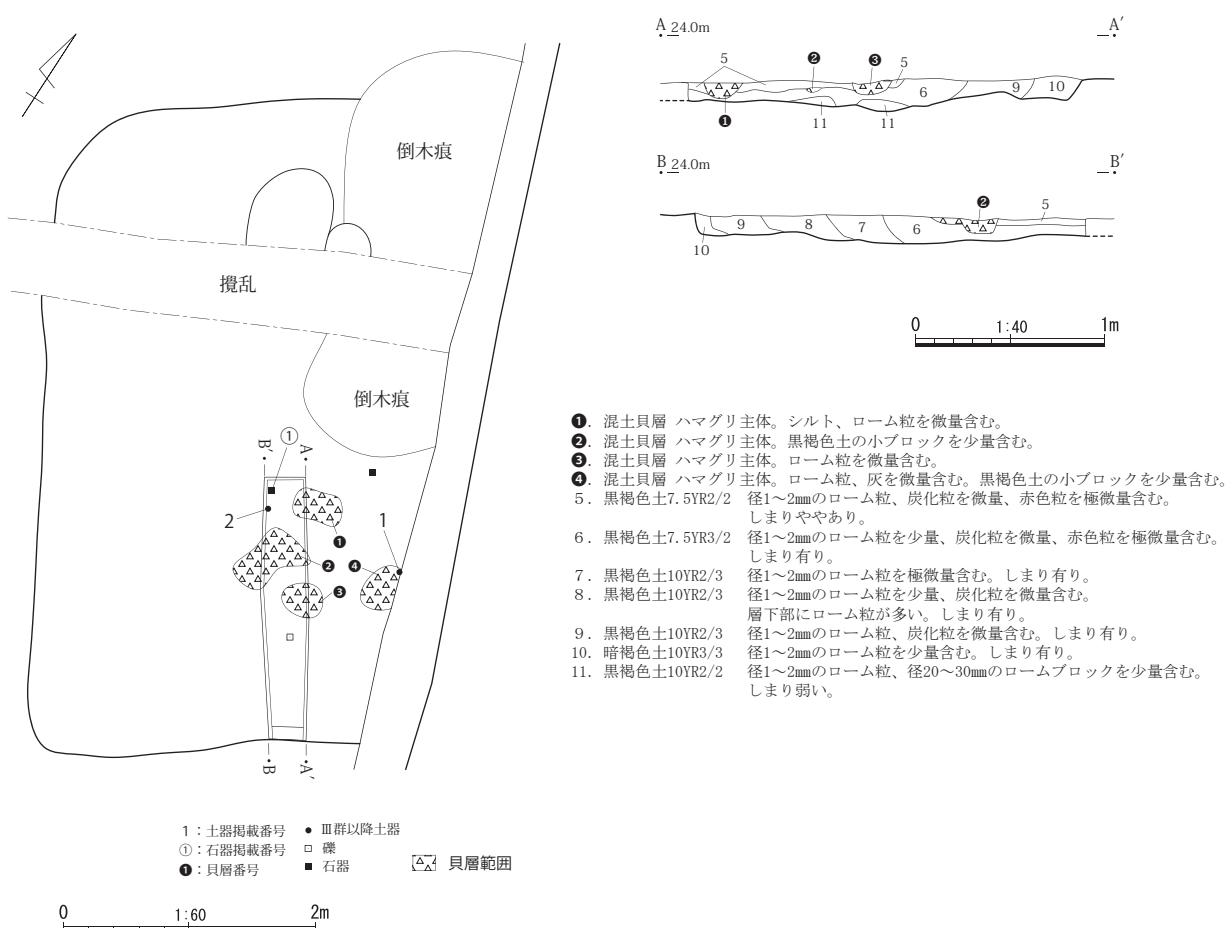
第301図 4次SI-003・004



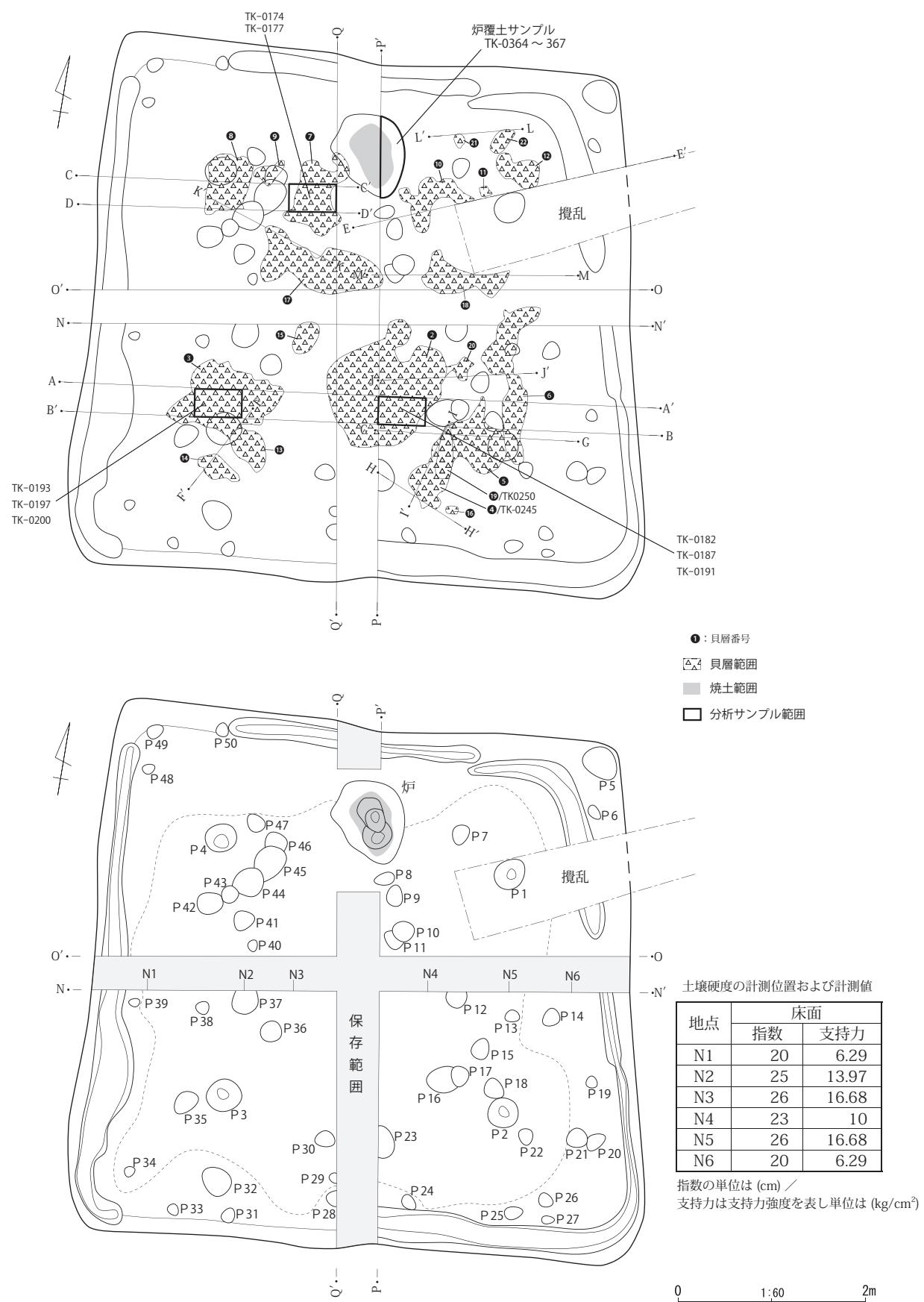
第302図 4次SI-005～007



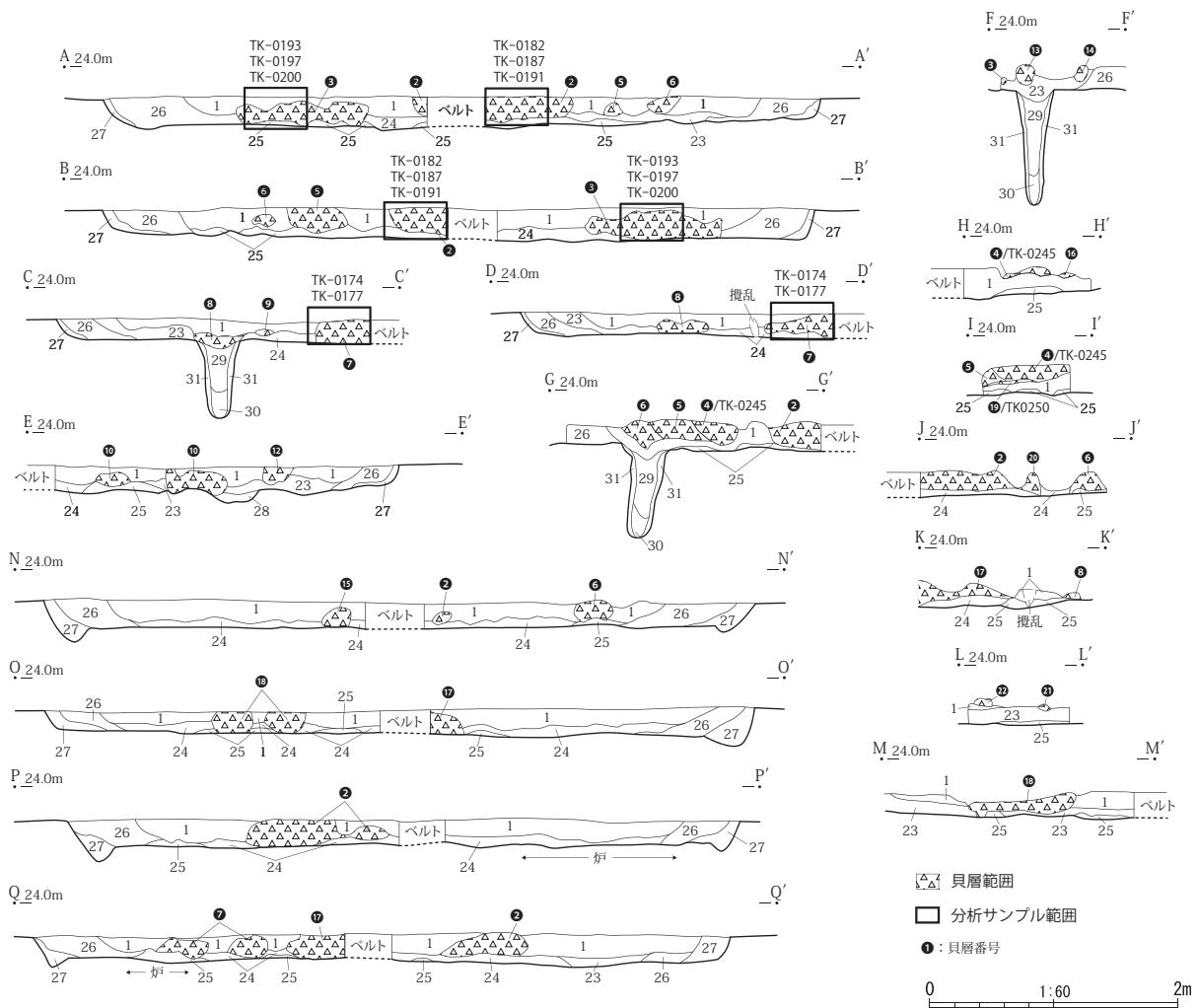
第303図 5T-001 住居跡



第304図 5T-003 住居跡



第305図 5T-002 住居跡(1)



1. 極暗褐色土7.5YR2/3 径1~2mmのローム粒を少量、焼土粒を微量含む。しまり有り。
2. 混土貝層 ハマグリ主体。灰、炭化物、ローム粒を微量含む。
3. 混土貝層 ハマグリ、カキ主体。灰、炭化物、ローム粒を微量含む。
- *4. 混土貝層 ハマグリ、オキアサリ主体。(TK-0245)
5. 混土貝層 ハマグリ主体。灰、ローム粒を微量含む。
6. 混土貝層 ハマグリ主体。灰、ローム粒を微量含む。
7. 混土貝層 ハマグリ主体。灰、ローム粒を微量含む。
8. 混土貝層 ハマグリ主体。ローム粒を極微量含む。
9. 混土貝層 ハマグリ、オキアサリ主体。灰を微量含む。破碎貝が多い。
10. 混土貝層 ハマグリ主体。灰、ローム粒を微量含む。
11. 混土貝層 ハマグリ主体。灰を微量含む。破碎貝が多い。
12. 混土貝層 ハマグリ、オキシジミ、オオノガイ主体。破碎貝が多い。
13. 混土貝層 カキ、オオノガイ、オキシジミ主体。灰を微量含む。
14. 混土貝層 ハマグリ、オオノガイ主体。灰を微量含む。
15. 混土貝層 ハマグリ主体。
16. 混土貝層 破碎貝主体。ローム粒を微量含む。
17. 混土貝層 ハマグリ、オキアサリ主体。
18. 混土貝層 ハマグリ、オキアサリ主体。
- *19. 混土貝層 ハマグリ、オオノガイ主体。オオノガイは破片が多い。(TK-0250)
20. 混土貝層 ハマグリ、オキアサリ主体。
21. 混土貝層 ハマグリ主体。
22. 混土貝層 ハマグリ主体。破碎貝が多い。
23. 黒褐色土7.5YR2/2 径1~2mmのローム粒を少量、径10mm程のロームブロックを少量含む。径1~2mmの炭化粒、焼土粒を微量含む。しまりやや有り。
24. 黒褐色土10YR2/3 径1~2mmのローム粒を層下部に少量含む。しまり有り。
25. 黒褐色土10YR3/2 径1~2mmのローム粒を少量含む、径10~20mm程のロームブロックを層下部に少量含む。しまり弱い。
26. 暗褐色土7.5YR3/3 径1~2mmローム粒を少量含む。焼土粒を微量含む。しまり強い。
27. 暗褐色土10YR3/4 径30~50mmロームブロックを層下部に少量含む。しまり有り。
28. 暗褐色土10YR3/2 層中~下部中心に径10~20mmのロームブロック、径2~3mmのローム粒を中量含む。径10~20mm程の黒褐色土のブロックが若干混ざる。しまり弱い。
29. 黒褐色土10YR3/2 径1~2mmのローム粒を少量含む。破碎貝を少量含む。しまり弱い。
30. 褐色土 10YR4/6 ローム粒を多く含む。しまり弱い。
31. 黑褐色土10YR2/2 ローム粒、ロームブロックを少量含む。

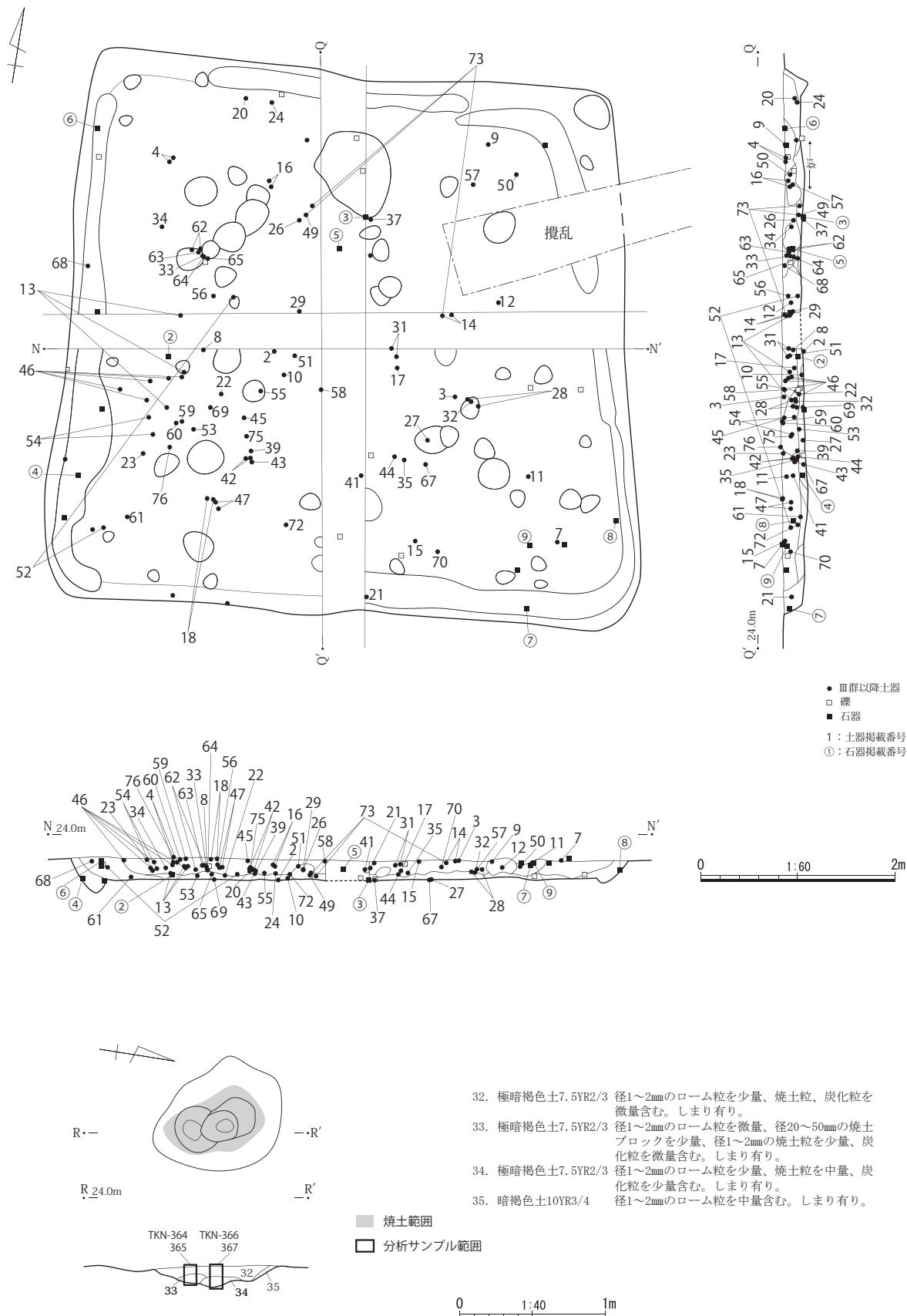
*自然科学分析対象

番号	長径	短径	深さ
P1	36	30	(28)
P2	32	31	78
P3	35	34	104
P4	33	30	79
P5	39	31	—
P6	17	10	—
P7	21	18	—
P8	22	13	—
P9	23	17	—
P10	22	22	—
P11	22	(11)	—
P12	22	(17)	—
P13	15	13	—
P14	19	17	—
P15	23	18	—
P16	(27)	28	—
P17	22	19	—
P18	23	20	—
P19	12	12	—
P20	23	15	—
P21	21	21	—
P22	17	15	—
P23	(27)	(20)	—
P24	18	13	—
P25	20	13	—
P26	16	14	—

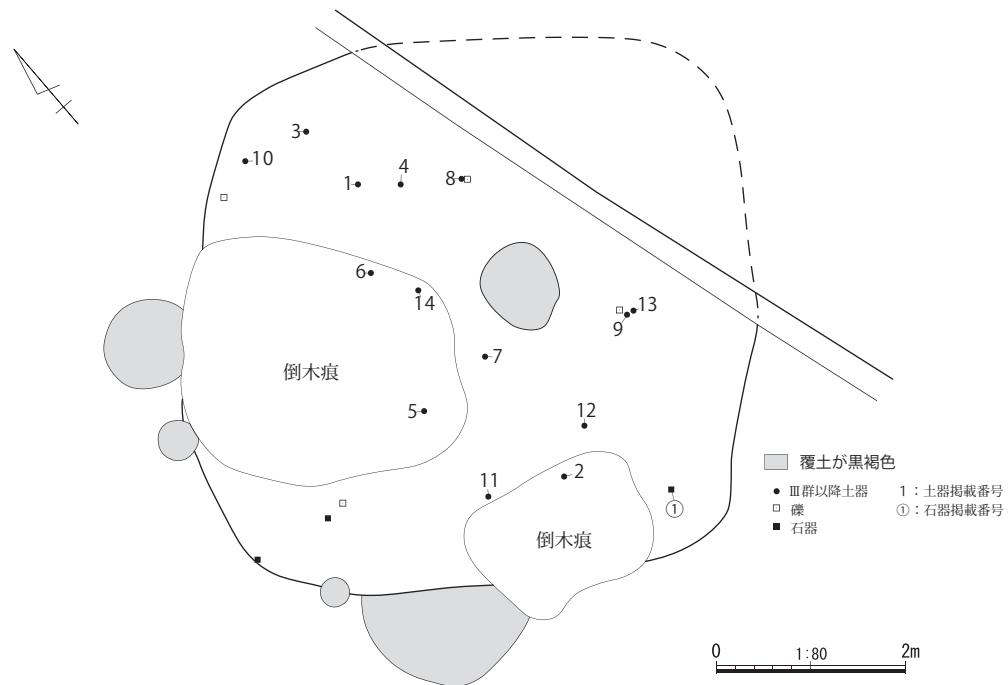
番号	長径	短径	深さ
P27	14	9	—
P28	17	(11)	—
P29	11	(8)	—
P30	21	17	—
P31	16	13	—
P32	33	27	—
P33	13	11	—
P34	12	11	—
P35	28	20	—
P36	23	22	—
P37	29	(25)	—
P38	15	13	—
P39	12	9	—
P40	12	10	—
P41	22	21	—
P42	27	23	—
P43	18	18	—
P44	31	30	—
P45	(33)	30	—
P46	24	(15)	—
P47	21	17	—
P48	13	11	—
P49	18	14	—
P50	15	13	—

※計測値の単位はすべてcm
※計測値の()は残存値

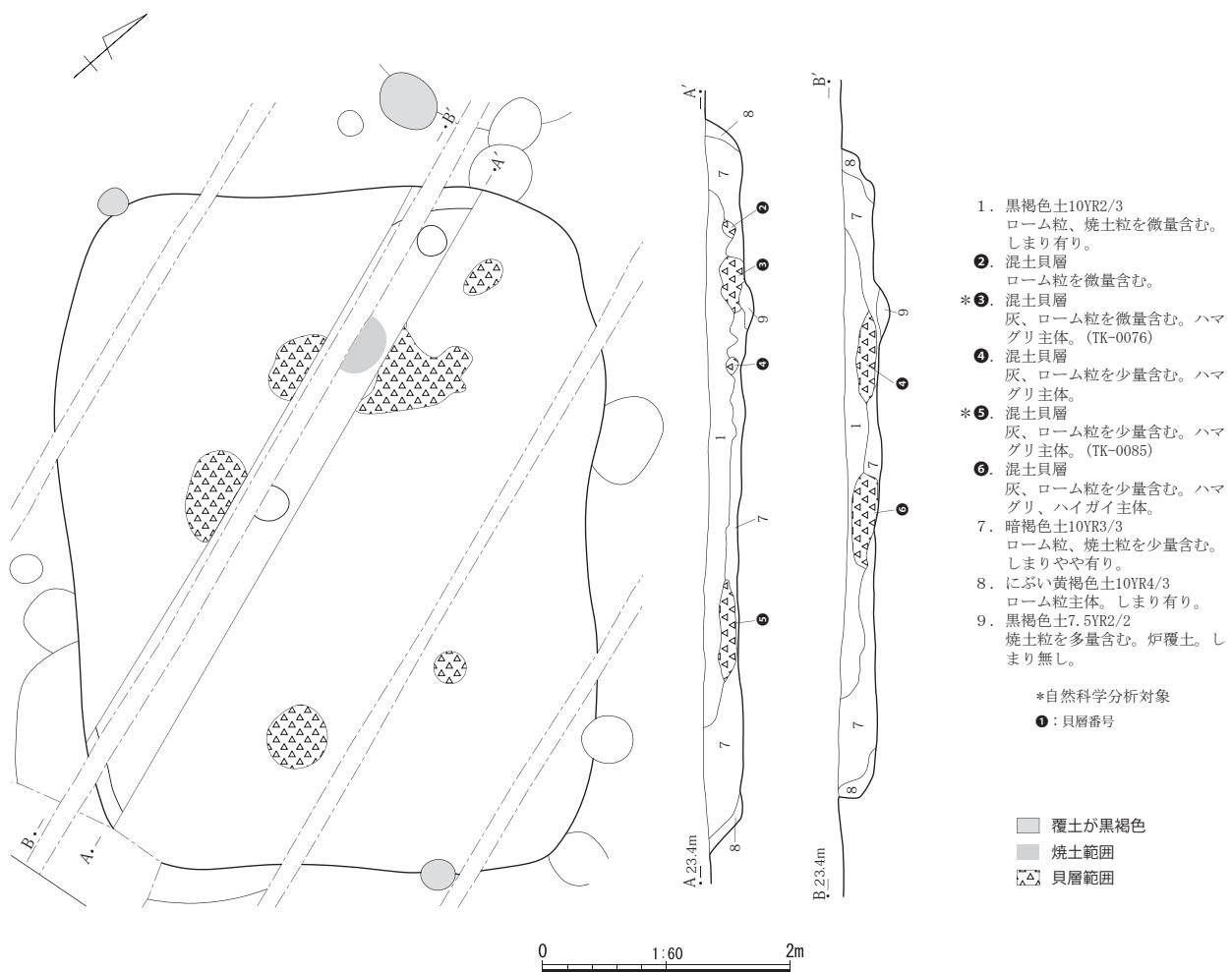
第306図 5T-002 住居跡(2)



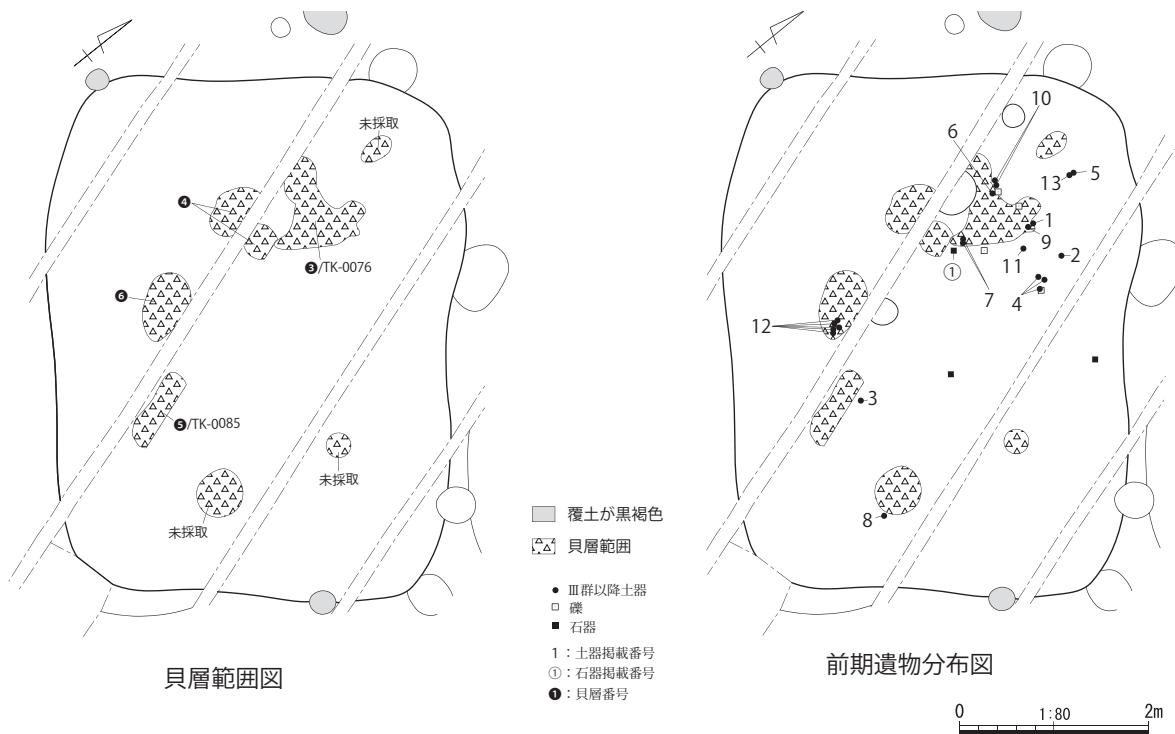
第307図 5T-002住居跡(3)



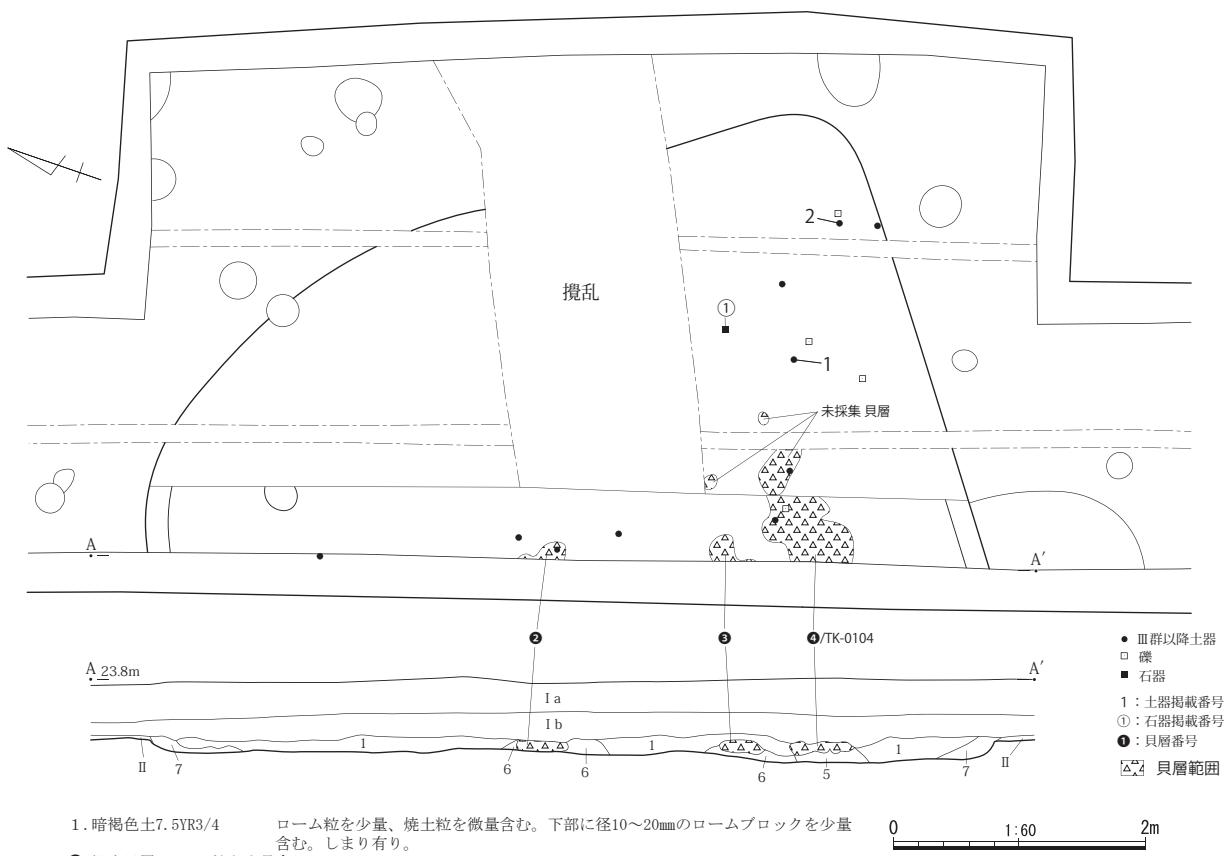
第308図 12T-003 住居跡



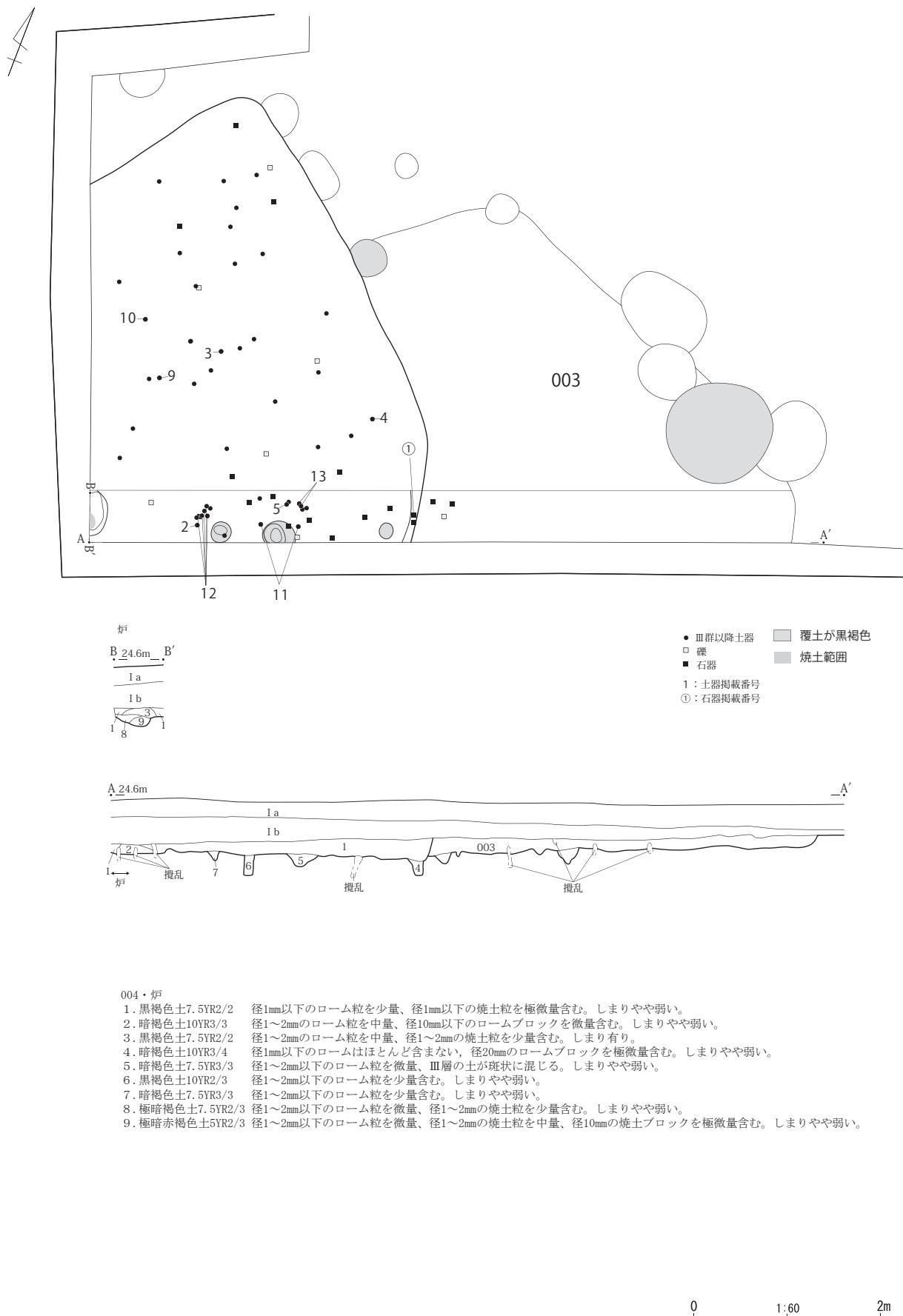
第309図 18T-001 住居跡 (1)



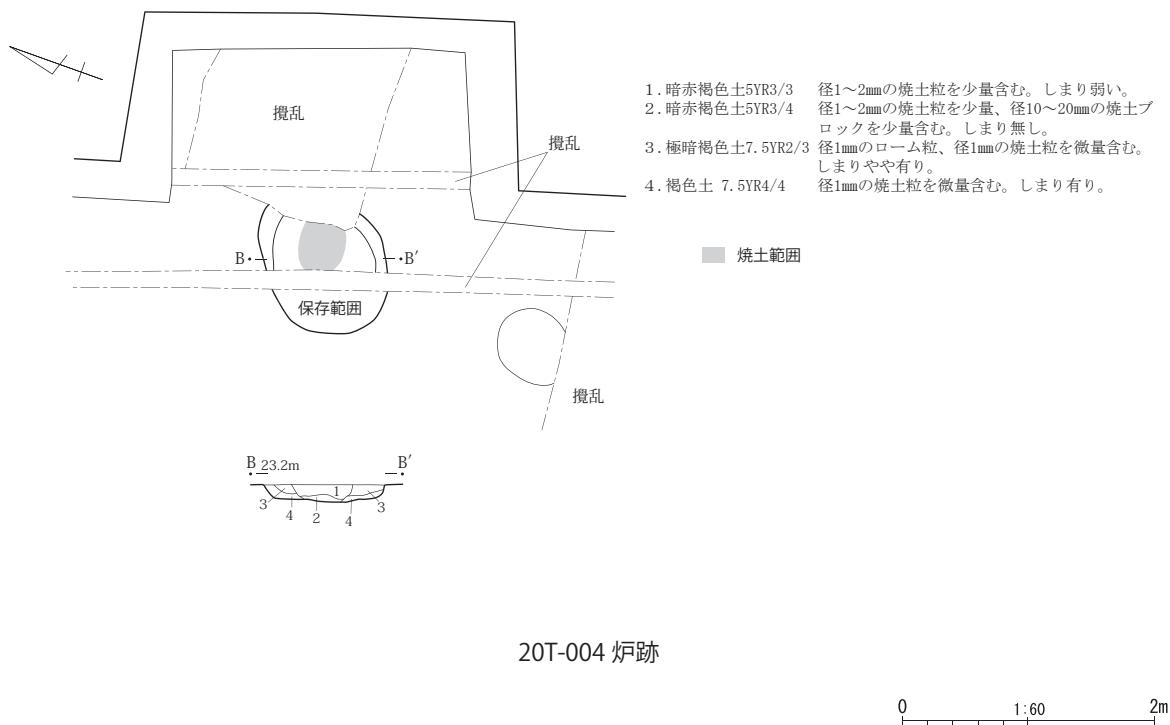
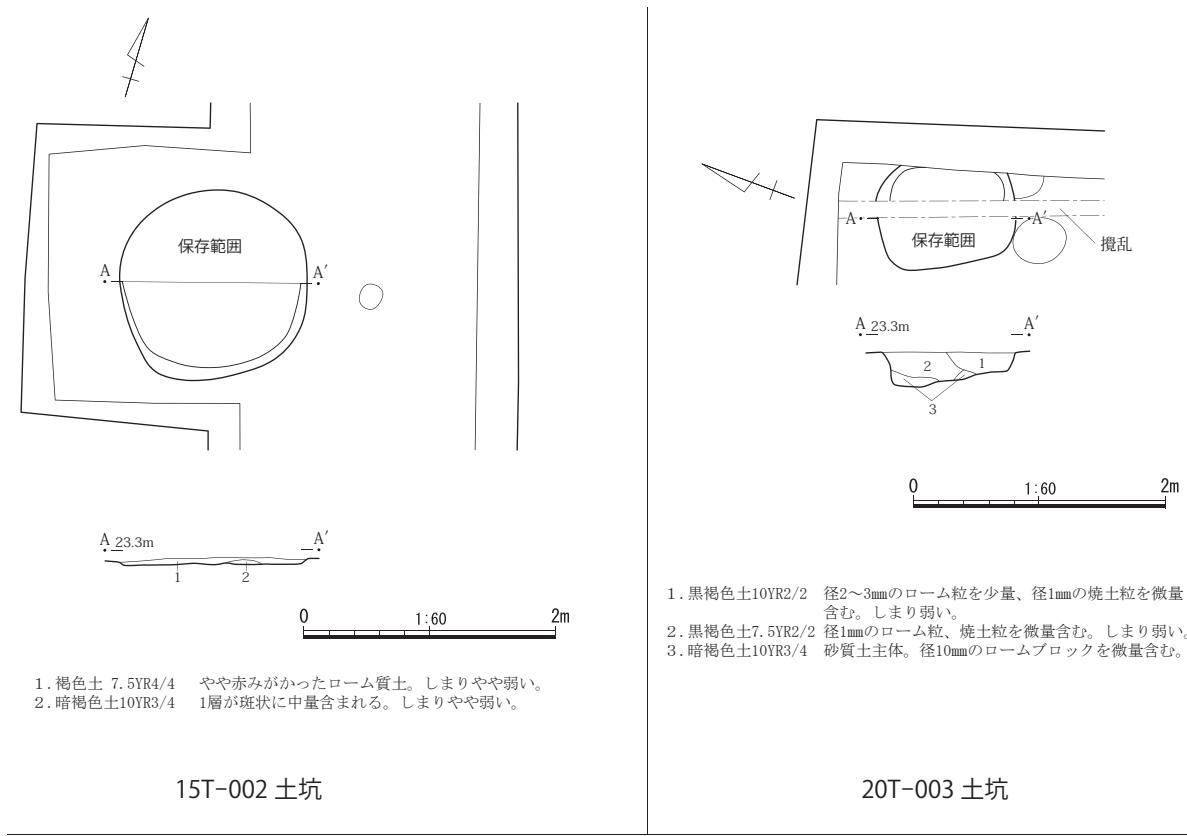
第310図 18T-001 住居跡（2）



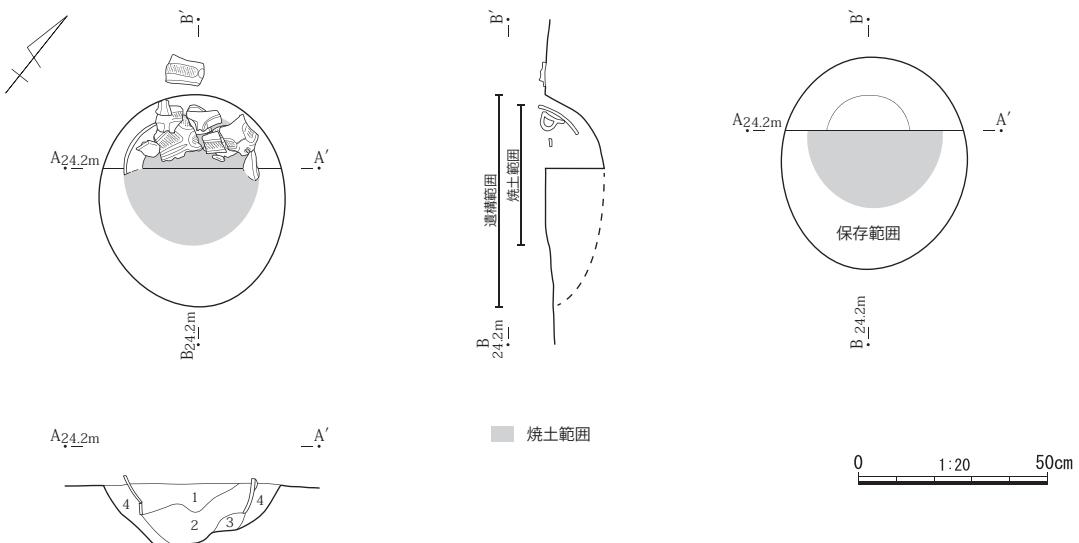
第311図 19T-001 住居跡



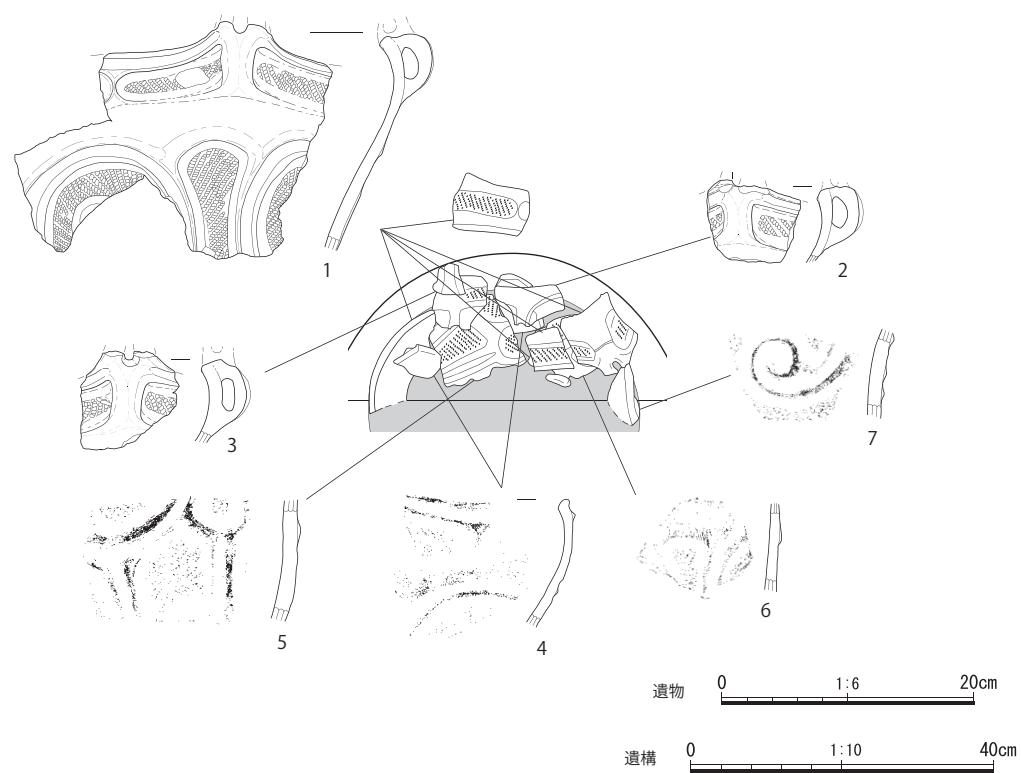
第312図 24T-004 住居跡



第313図 15T-002、20T-003 土坑、20T-004 炉跡



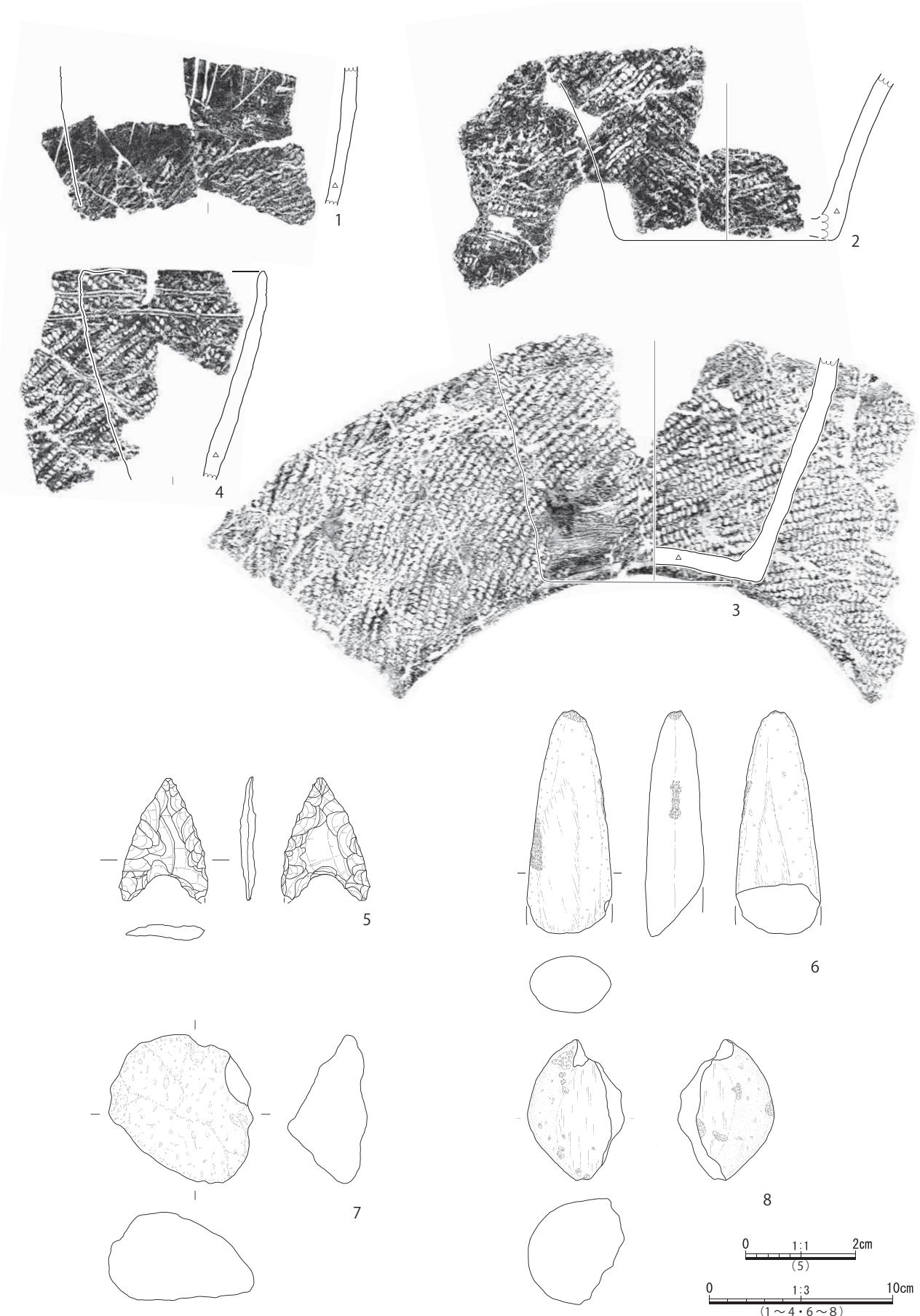
1. 黒褐色土7.5YR3/2 径3~7mmの焼土粒を中量含む。しまりやや弱い。
 2. 極暗赤褐色土5YR2/4 径1~3mmの焼土粒を多く含み、焼土が部分的に濃集する。しまりやや弱い。
 3. 暗褐色土10YR3/4 径1~3mmの焼土粒を少量含む。しまりやや強い。
 4. 暗褐色土7.5YR3/4 径1~2mmの焼土粒を微量含む。しまりやや強い。
 土器片・骨形成時の裏込め土か。



第314図 10T-010 住居跡



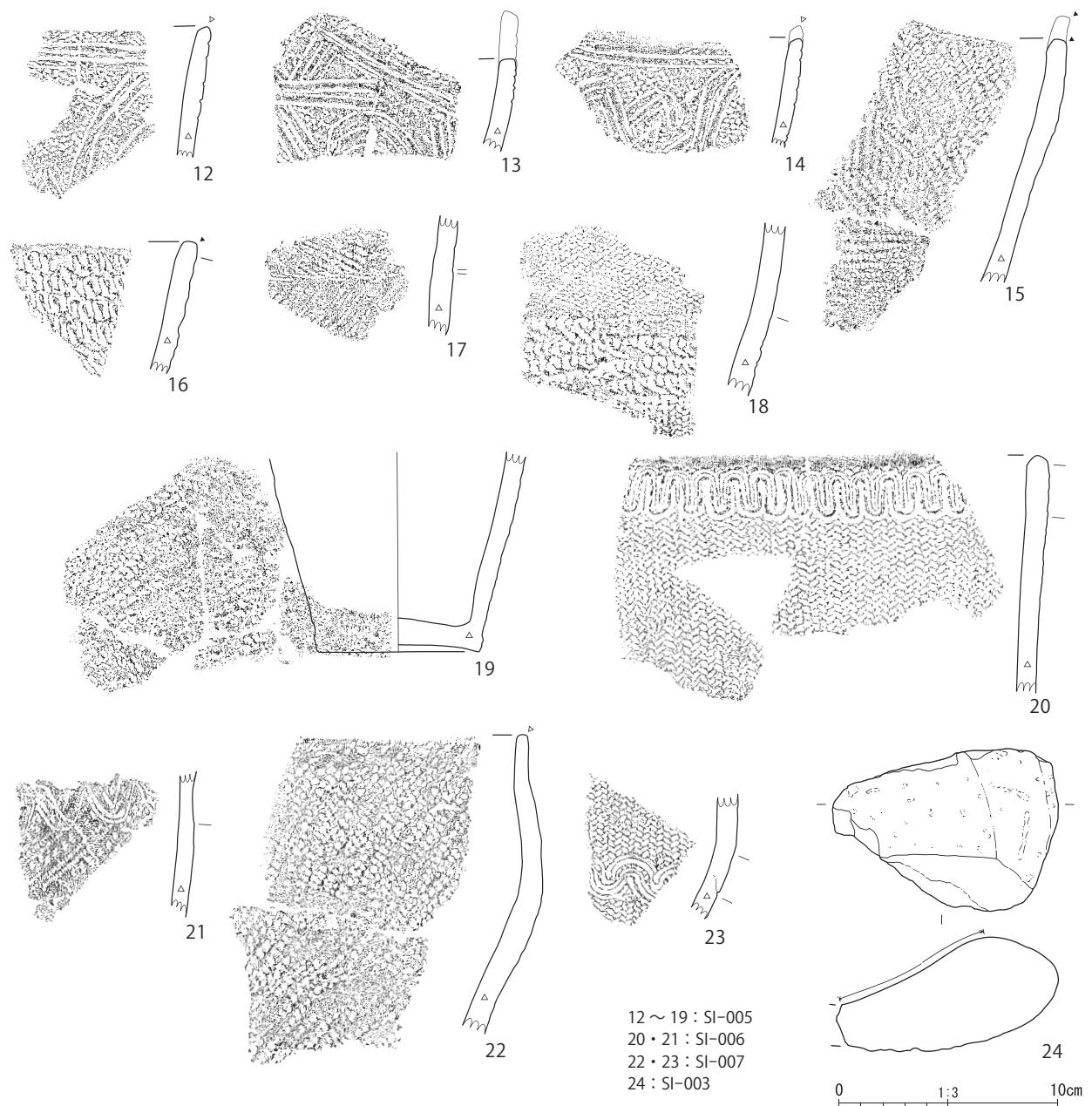
第315図 2次SI-001・002出土遺物



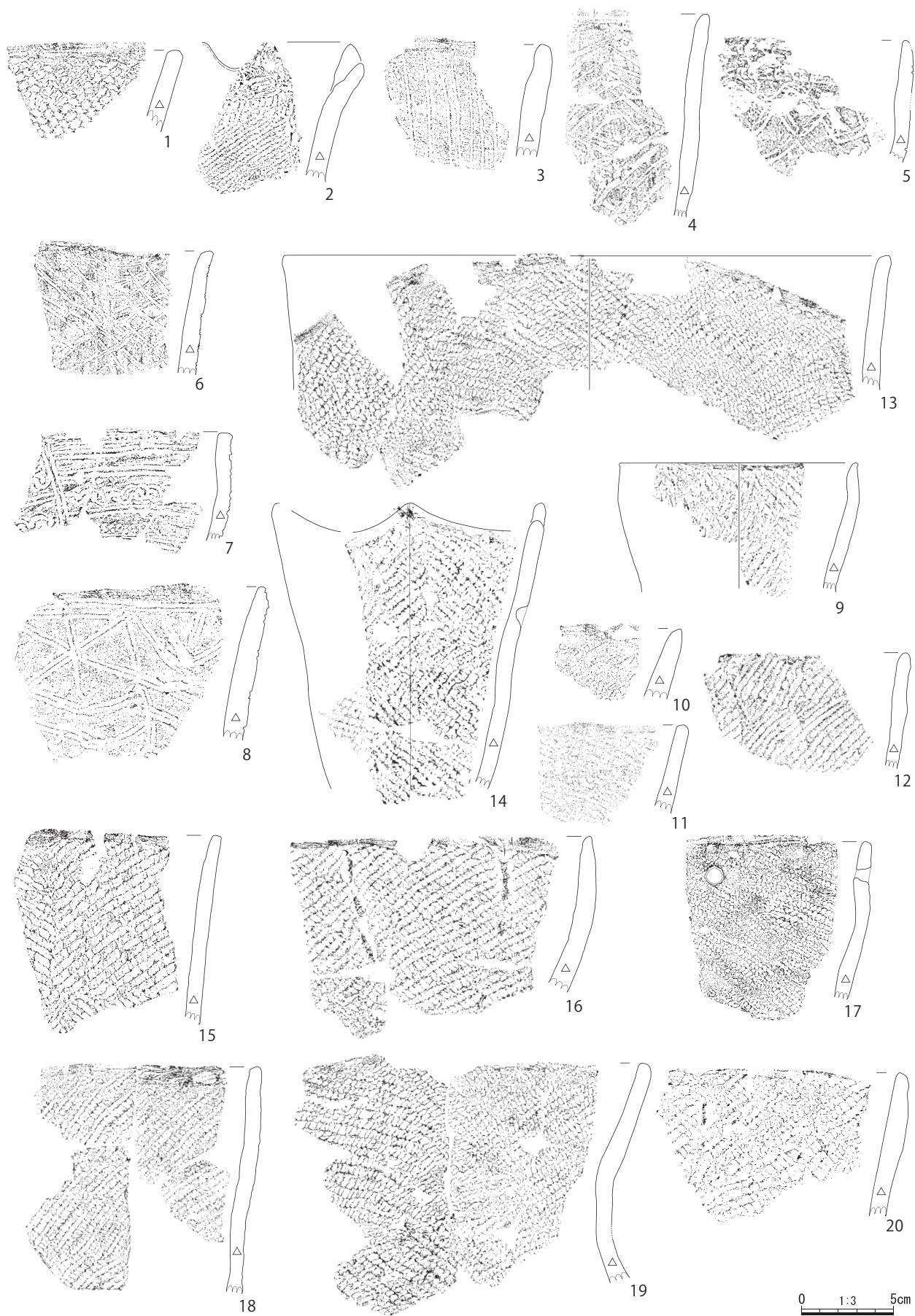
第316図 3次SI-001出土遺物



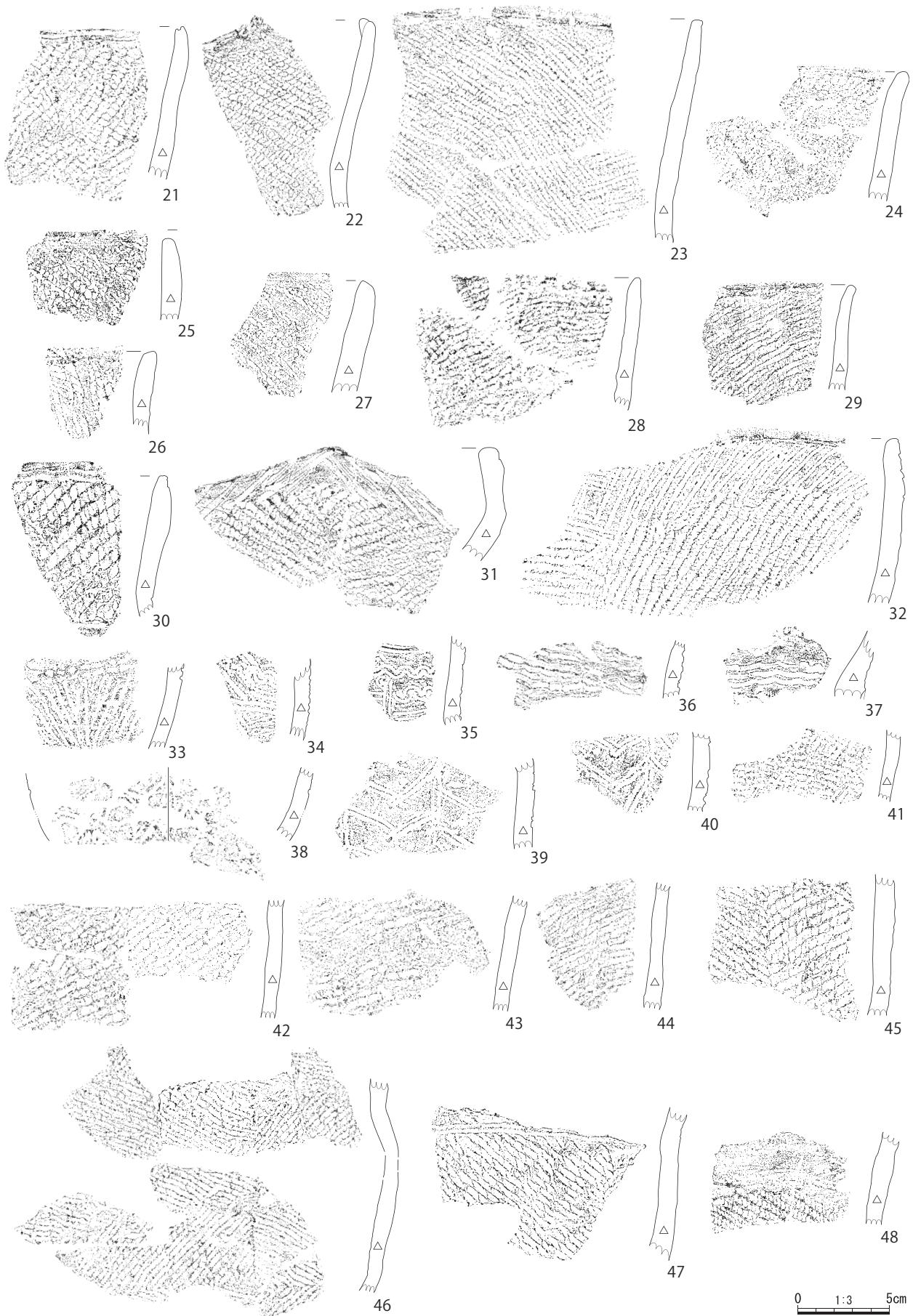
第317図 4次SI-001～004出土遺物



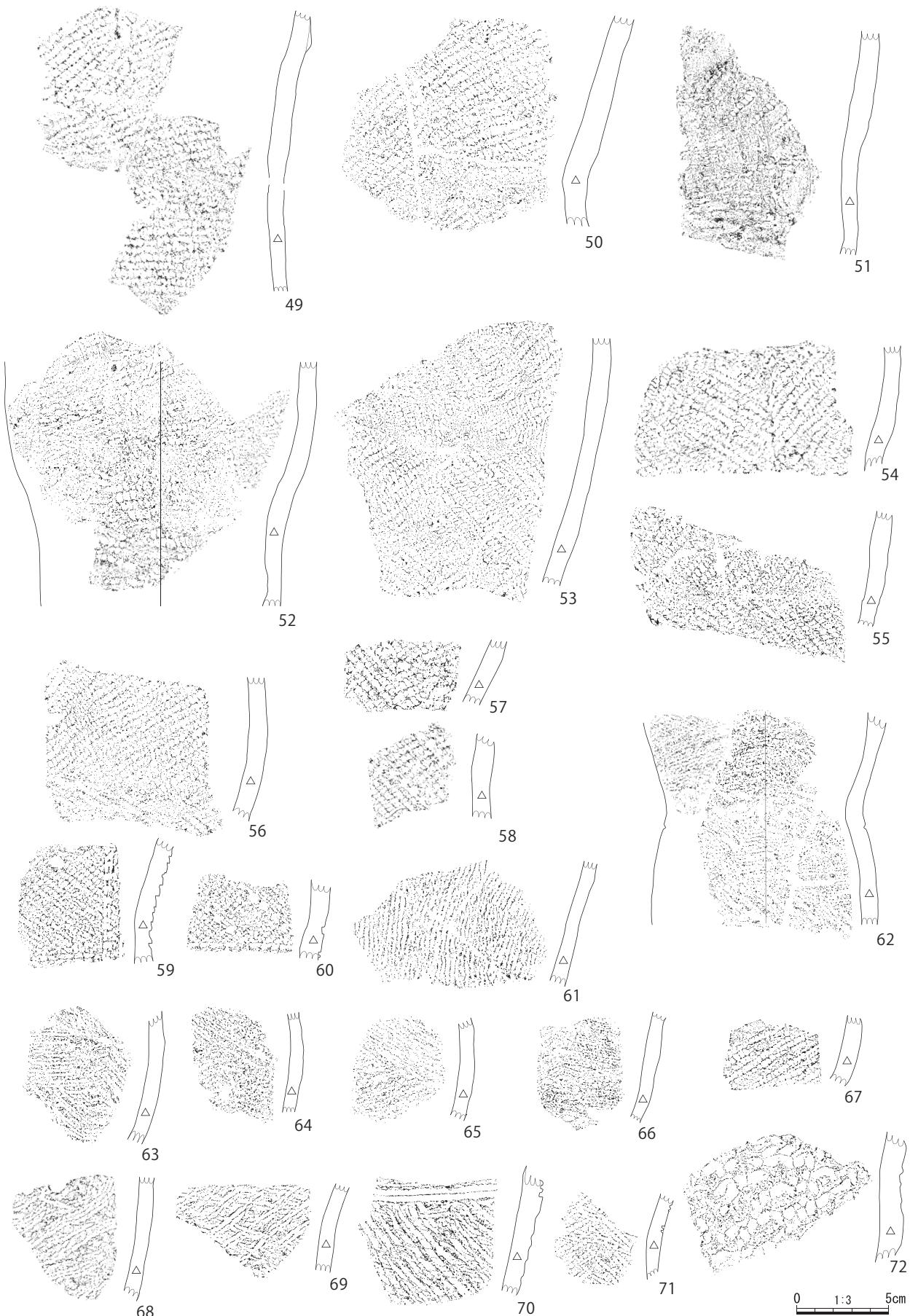
第318図 4次SI-003・005~007出土遺物



第319図 5T-002 住居跡出土土器(1)



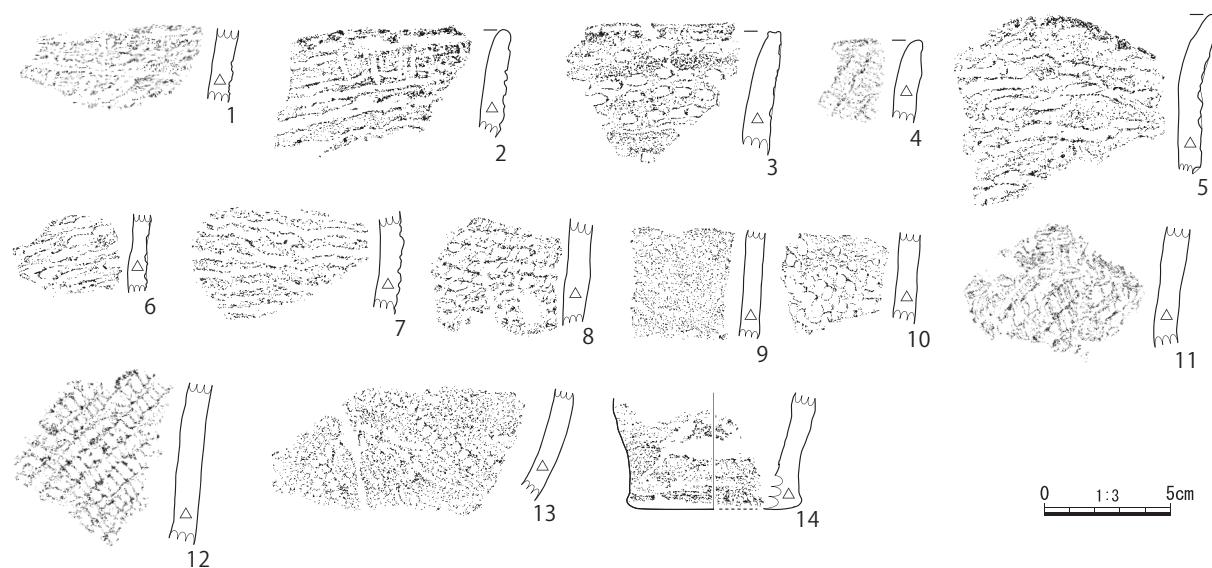
第320図 5T-002 住居跡出土土器(2)



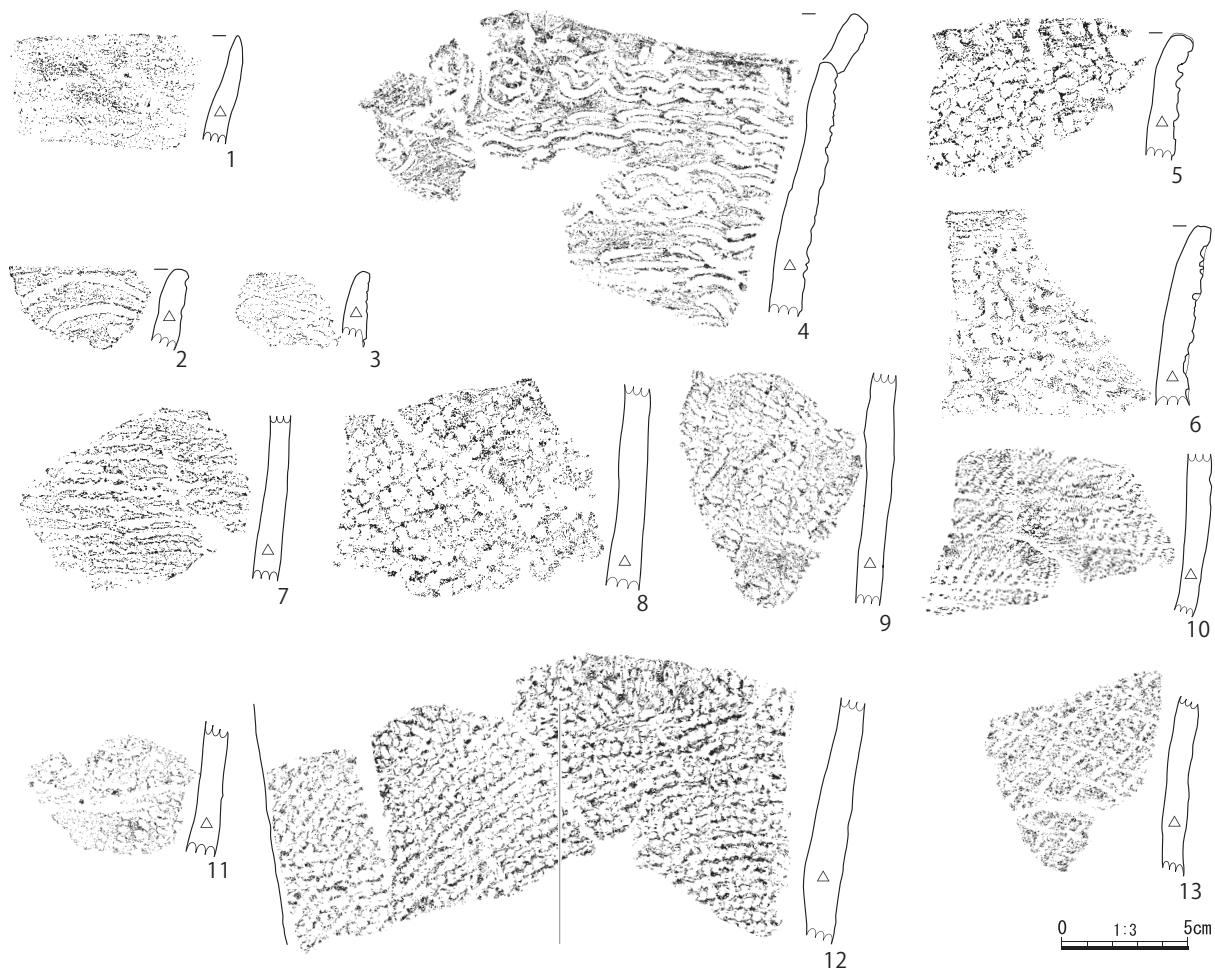
第321図 5T-002 住居跡出土土器(3)



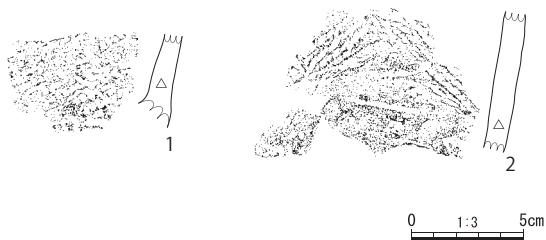
第322図 5T-001～003 住居跡出土土器



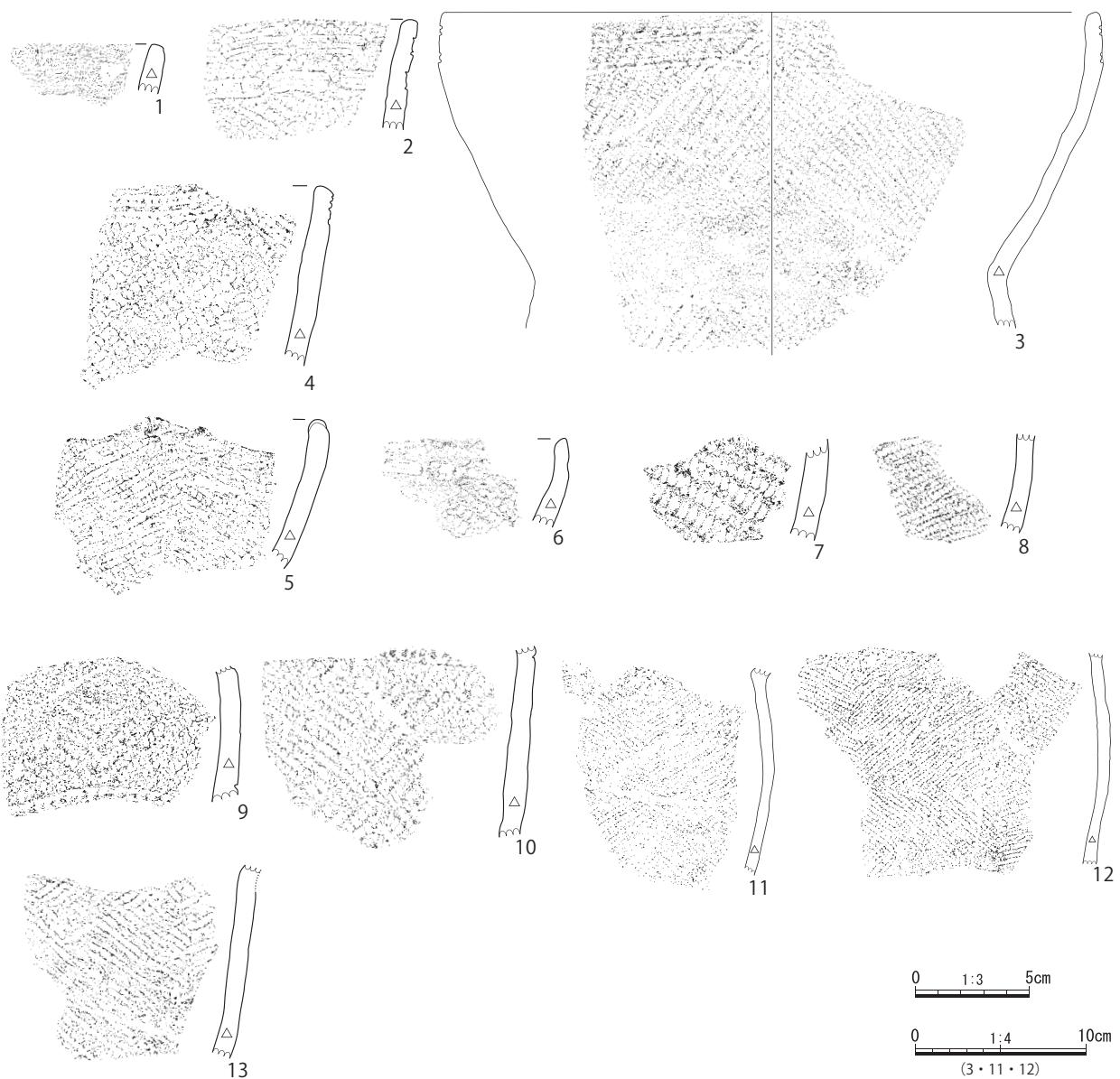
第323図 12T-003 住居跡出土土器



第324図 18T-001 住居跡出土土器



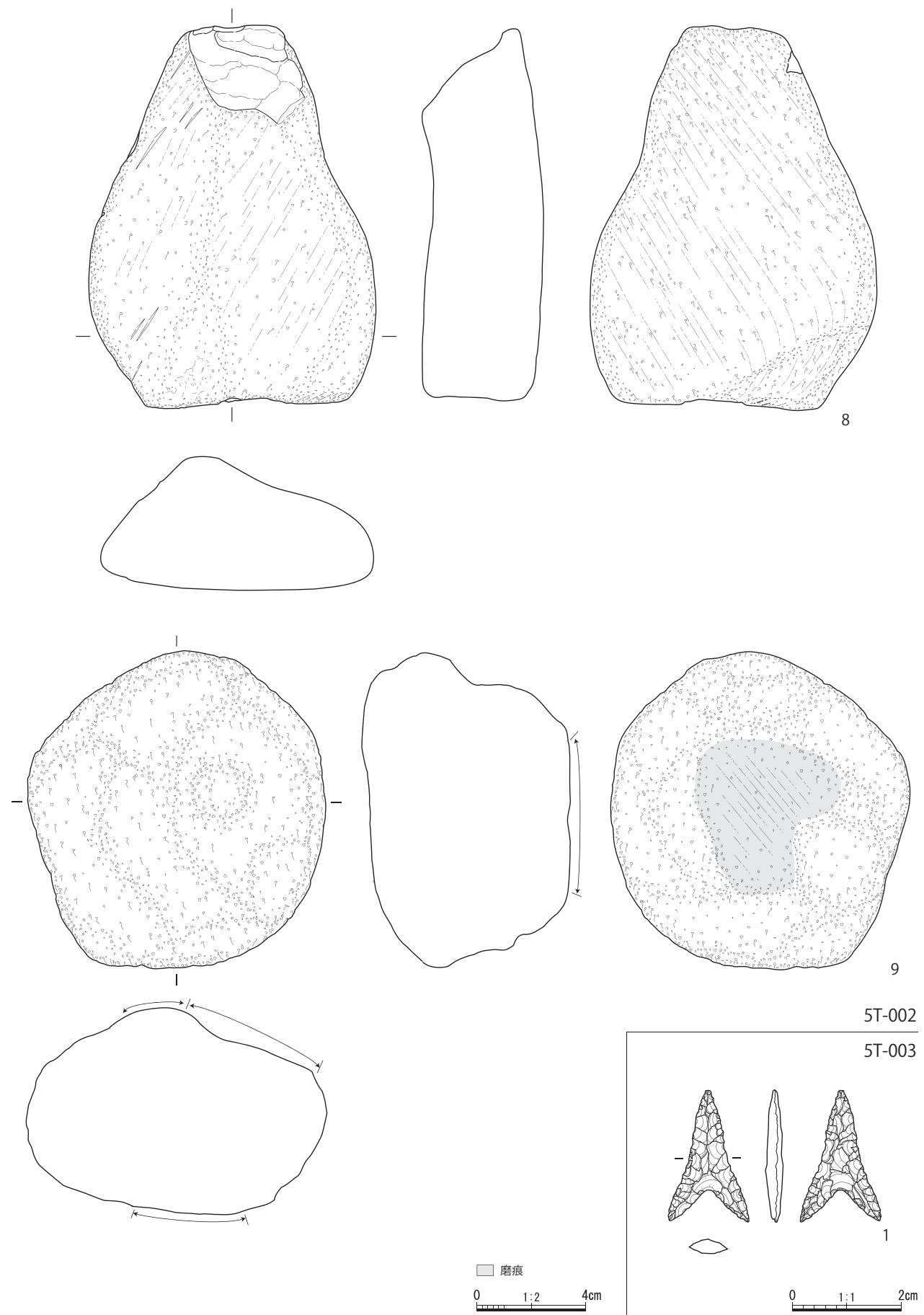
第325図 19T-001 住居跡出土土器



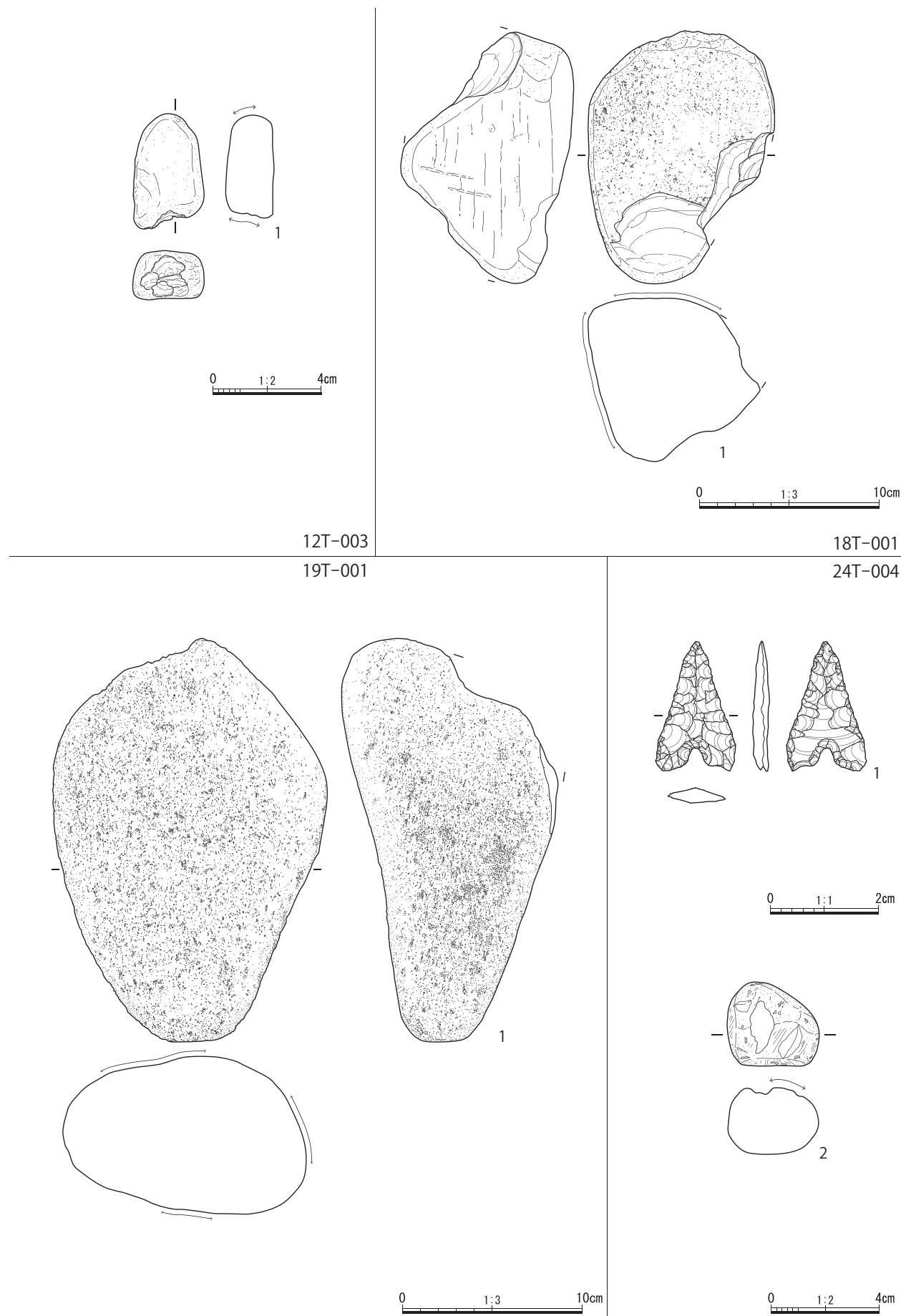
第326図 24T-004 住居跡出土土器



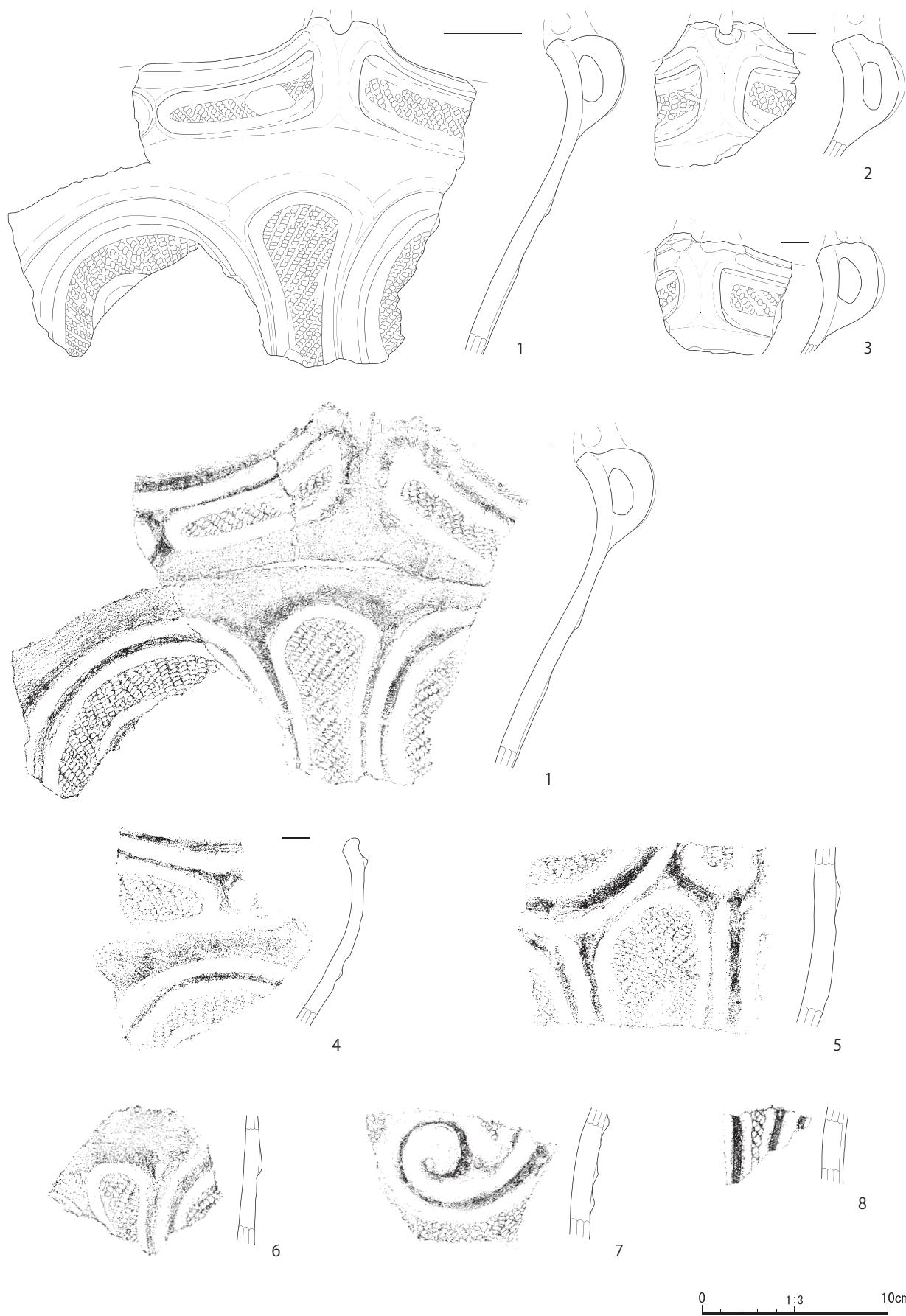
第327図 5T-002 住居跡出土石器



第328図 5T-002・003 住居跡出土石器



第329図 12T-003、18T-001、19T-001、24T-004 住居跡出土石器



第330図 10T-010 住居跡出土土器

第5節 弥生時代

弥生時代の遺構は主に 22T で検出し、竪穴住居跡 6 軒、土坑 3 基が検出された。また、16T において土坑 1 基を検出した。他のトレンチからは遺構に伴わない弥生土器が出土した。

1. 遺構

16T-005 土坑(第 331 図)

隅丸方形の平面プランを呈する土坑である。主軸方向は N-50°-W で、3.1m × 2.7m の規模である。壁面は垂直気味に立ち上がり、底面は概ね平坦である。底面直上で採取された炭化材を年代測定したところ、弥生時代後期に相当する年代値が得られた(第5章第2節第1項)。出土遺物は縄文時代早期の可能性がある土器を含むものの、弥生土器も検出されたことから、上記の年代値と合わせ、弥生時代の遺構と判断した。縄文土器については、周辺の遺構を削平した際に混入したものと考えられる。

22T-001 住居跡(第 332・333 図)

平面プランの全形および規模が不明な竪穴住居跡である。東壁が直線的であることから、楕円形ではなく隅丸方形のプランを呈するとみられる。主軸方向は N-24°-E で、炉が中央部に位置すると仮定した場合、6.9m × 5.3m の規模と推定される。重複関係としては、南東隅付近で 22T-005 住居跡を切り、東壁が 22T-008 住居跡を切っている。壁面は垂直気味に立ち上がり、床面までの深さは 40cm 前後である。炉は径 58cm 前後の円形を呈する。炉の周囲には硬化面が形成されている。周溝は東壁および南東隅で確認され、幅は 12 ~ 16cm、床面からの深さは 13cm である。ピットは床面および周溝内に確認された。セクション上に位置するもののみ掘り下げたところ、A セクション上の床面で検出したピットは径 36cm、床面からの深さ 19cm。A セクション上の周溝内で検出したピットは径 17cm、床面からの深さ 13cm。B セクション上の床面で検出したピットは径 35cm、床面からの深さ 27cm である。いずれのピットも規模が小さく、周溝に近接するか周溝内に位置しており、主柱穴ではないとみられる。出土遺物の大半は遺構確認面から出土したが、覆土中層、または住居内ピットから検出されたものも一部みられる。

22T-002 住居跡(第 334・335 図)

平面プランの全形が楕円形に近い竪穴住居跡である。主軸方向は N-7°-W で、長軸 8m、短軸は推定で 6.6m の規模である。重複関係としては、近世の溝が横断している。また、南東隅で 22T-006 土坑を切っている。壁面は傾斜して立ち上がり、床面までの深さは 6 ~ 12cm である。貼床が確認され、炉と南壁の中間には硬化面が形成されている。掘方の深さは 18 ~ 25cm。炉は中央部に位置し、径 47cm で、楕円形に近い不整形を呈する。周溝は北壁側・南壁側で確認され、幅は 14 ~ 21cm、床面からの深さは 7 ~ 16cm である。ピットは炉跡の北側に 1 基、南壁付近に 1 基確認された。北側のピットは径 85cm、床面からの深さ 84cm で、主柱穴とみられる。南側のピットは径 29cm、床面からの深さ 60cm で、出入口に伴う可能性が考えられる。南西隅にて、復元率の高い土器 1 点が出土した。取り上げレベルとしては床面に相当する高さが計測された。サブトレンチ外の他の遺物は、いずれも遺構確認面から出土した。

22T-003 住居跡(第 336・337 図)

平面プランの全形および規模が不明な竪穴住居跡である。西壁および南壁は直線的であることから、隅丸方形のプランを呈するとみられる。主軸方向は N-7°-E で、長軸 4.7m 以上、短軸 2.8m 以上の規

模である。他の遺構とは重複関係はない。壁面は西壁では垂直気味に、南壁では傾斜して立ち上がる。床面までの深さは30cm前後である。貼床が確認され、掘方の深さは48cm前後である。炉は検出されず、調査区外に位置するとみられる。周溝は西壁側・南壁側で確認され、幅は7～15cm、床面からの深さは11cmである。床面にはピット状の平面プランが2か所確認された。遺物はサブトレンチ内外ともに遺構確認面に近いレベルで出土したものが大半を占め、1点のみ覆土下層から検出された。

22T-004 住居跡(第338図)

平面プランの全形および規模が不明な竪穴住居跡である。後世の削平により、壁面は残存しておらず、硬化した床面も確認できないが、炉の下部が残存している状態である。炉跡と出土遺物との位置関係から、図示したような住居跡の範囲を推定した。炉は2つ検出され、北側が長軸55cm、短軸35cmの隅丸方形に近い不整形、南側が径33cmのほぼ円形を呈する。炉の周囲にはピットが複数みられるが、不規則な配置であり住居跡に伴うものかは不明である。

22T-005 住居跡(第339図)

平面プランの全形および規模が不明な竪穴住居跡である。東壁が直線的であることから、隅丸方形のプランを呈するとみられる。遺構の位置や覆土から、当該期の所産と判断した。主軸方向はN-34°-Wで、長軸2.31m以上、短軸1.83m以上の規模である。重複関係としては、北西側を22T-001住居跡に切られている。壁面はほとんど残っておらず、上部は削平を受けているものとみられ、床面までの深さは18cm前後である。炉および周溝は検出されていない。

22T-008 住居跡(第339図)

平面プランの全形および規模が不明な遺構である。プランの形態が不明であるものの、周溝をもつことから竪穴住居跡とみられる。重複関係としては、22T-001住居跡に東側を切られている。壁面は傾斜して立ち上がり、床面までの深さは19cm前後である。周溝の幅は12～16cm、床面までの深さは10cmである。遺構確認面から覆土上層にかけて、完形の土器1点が出土している。

22T-006 土坑(第340・341図)

長軸1.35m以上、短軸0.82mの楕円形を呈する土坑である。主軸方向はN-4°-E。重複関係については、22T-002住居跡に北端を切られている。底面までの深さは9～16cm。土坑の北側では、遺構確認面から底面にかけて多量の焼土および少量の炭化物が認められる。土坑底面はやや起伏があり平坦ではない。

本遺構では、多量の土器が覆土上層から出土した。肩部以下がほぼ完存するなど復元率の高い個体もあるが、完形品はない。土器の重なる順序については、第341図に示した。最下面に4があり、その上に8・13が乗る。8の上には11が乗るほか、8と13の破片が交互に重なる。13の上には2・3・7・10・12が乗る。11の上には10・12が乗る。2・3の上には7が乗る。

遺物の詳細については後述するが、土器の器種の傾向としては、壺形土器(以下、「形土器」を省略)の個体数が多く、かつ復元率が高い。一方で、甕は数点出土したものの、いずれも小破片であり、全形が復元できるものはない。13の口縁部と頸部以下の部位が離れた位置で出土している点、2の割れ口の上に7がかぶさっている点、甕はいずれも破片である点、8と13の破片が交互に重なる点などから、これらの土器については、埋没後に土圧や後世の削平で破損したのではなく、集積された時点での既に破損品であつ

たとみられる。

22T-009 土坑(第340図)

長軸1.25m、短軸0.95mの橢円形を呈する土坑である。主軸方向はN-63°-W。遺物を伴出しなかつたが、遺構の位置や覆土から、当該期の所産と判断した。底面までの深さは26cm前後である。底面は南北にゆるく傾斜し、丸みをもって立ち上がる。

2. 遺物

弥生時代の遺物量としては、接合前の段階の数値を遺構・トレンチ別に示すと、22T-001住居跡：513点、22T-002住居跡：159点、22T-003住居跡：199点、22T-004住居跡：17点、22T-006土坑：215点、22T-008住居跡：6点、22T一括：28点、10T一括：5点、11T一括：2点、12T-001：1点、12T一括：1点、14T一括：1点、15T一括：1点、16T-005：2点、16T一括：1点、20T一括：2点、21T一括：4点で、総点数は1,157点である。報告書の作成にあたっては、土器については器種および部位が確認できるもののうち、図示しえない程度の微細なものを除き図示した。土器以外の遺物は全て図示した。

16T-005 土坑(第353図2)

2は壺の胴部破片とみられる。外面は非常に摩滅しており、調整・施文は不明。内面ナデ調整。このほか、小片のため図示しえないが、内外面を赤彩した土器が1点出土しており、弥生土器と判断した。

22T-001 住居跡(第342～344図)

遺構確認面およびサブトレンチ内からは土器、石器、鉄製品が出土した。土器の器種としては壺、甕、鉢がみられる。

1・2は壺の口縁部である。1は、無文で、内外面ともに風化しており器面調整は不明。2は、縦長の棒状浮文を貼り付け、側面にヘラ刻みを施す。棒状浮文の両脇には、上下に対向する弧状の構図を沈線で描く。3は、壺の頸部で、ハケメ調整後に、爪形の刺突列3段を施す。4～16は壺の肩部である。4・5は同一個体。複合鋸歯文に類似した構図を描く。6は、櫛描文により、疑似流水文を半単位ずらして2段重畳させるか、直線文と疑似流水文が重畳する構成とみられる。7は、3本1組の櫛描文による直線文と波状文が重畳する。8は、広義の磨消繩文手法で、下垂する舌状文を描くとみられる。繩文は単節RL。無文部をナデ調整。9は、無文帯と文様帯が重畳する。無文帯には粘土を貼り付けて段を作出し、ミガキ調整後に赤彩。文様帯には2条同時施文による斜線を描き、空白部に繩文充填する。繩文は単節LR。10は、ハケメ調整後に、4本1組の櫛描文による、波状文、直線文、丁字文が重畳する構成。丁字文の空白部には直線文を充填する。11は、広義の磨消繩文手法で結紐文を描くとみられる。繩文は単節LR。無文部をナデ調整後に赤彩。12は、板ナデ調整後に、繩文を斜方向に回転し、縁取り線のない結紐文を描くとみられる。繩文は単節LR。13は、ハケメ調整後に、櫛描文で構図を描く。波状文の下端とみられる。14は、沈線区画した無文帯と繩文帯が交互に重畳する。繩文は単節RL。無文部をナデ調整。15は、磨消繩文手法で上開きの連弧文を描く。繩文は単節RL。無文部をミガキ調整。16は、沈線区画した無文帯と繩文帯が交互に重畳する。繩文は単節LR。無文部をミガキ調整。17・18は同一個体。壺の胴部で、繩文を施す。繩文は直前段反撲。19は壺か甕の胴部～底部で、胴部を板ナデ調整。底面をケズリ調整。20は壺の

胴部～底部で、横方向のハケメ調整後にナデ調整。底面に木葉痕。21～24は鉢の口縁部。21は、口縁部と体部の間で強く屈曲する器形。口唇部をナデで面取りする。口縁以下は横方向のハケメ調整。内外面全体を赤彩。22は、口縁部が直線的に外傾し、以下でゆるく括れる器形。口唇部にはLR単節縄文を施す。口縁部以下はケズリ調整後にナデ調整。内外面全体を赤彩。23は、口唇部にLR単節縄文を施した後に1条の沈線を施す。粘土帯を貼り付けて複合口縁を作出し、横方向のハケメ調整後に棒状浮文を貼り付ける。内外面全体を赤彩。24は、口唇部にヘラ刻みを施す。粘土帯を貼り付けて複合口縁を作出し、横方向のハケメ調整。25～34は甕の口縁部。25は、口唇部を内外面から指でつまみ押捺する。外面をハケメ調整後に、まばらにナデ調整。内面を横方向のハケメ調整後に、縦方向のまばらなナデ調整。26は、口唇部に丸棒状工具で刻みを施す。外面をハケメ調整、内面をハケメおよびナデ調整。27は、口唇部を内外面から指でつまみ押捺する。内外面をナデ調整。28は、口唇部に丸棒状工具で刻みを施す。外面をナデ調整、内面をハケメ調整。29は口唇部を指頭押捺する。内外面をハケメ調整。30は、口唇部を指頭か丸棒状工具で押捺する。外面をハケメ調整、内面をナデおよびミガキ調整。31は、口唇部を指頭押捺する。内外面にハケメ調整。32は、口唇部をハケメ調整後、ハケメ状工具で刻みを施す。外面をハケメ調整。33は、口唇部を指頭押捺する。外面をナデ調整。34は、口唇部をハケメ調整後、ハケメ状工具で内外から刻みを施す。外面をハケメ調整、内面をハケメ調整後に縦線文を付加。35～38は甕の胴部。35は、沈線で横位羽状文を描く。36～38は、外面をハケメ調整。39、41・42は甕の底部。39は、胴部外面をハケメおよびナデ調整、底面は風化。40は台付甕の台部で、外面をハケメ調整。41は、胴部外面をハケメ調整し底面をミガキ調整。42は、胴部外面をハケメおよびナデ調整し底面をケズリ調整。

43～46は石器。43は軽石製品。被熱している。およそ半分を欠損。重量は92.14g。44は、小型の扁平片刃石斧。変質玄武岩製で、基部・側面を含む全面が研磨されている。重量は50.44g。45は磨製石斧の未成品とみられる。ホルンフェルス製で被熱している。全体に敲打痕を残し、刃部のみ研磨痕が確認できる。重量は308.37g。46は、砥石とみられ、砂岩製(跳子産)で被熱している。摩耗のためか研磨痕は確認できない。重量は43.50g。

47は鉄製品。棒状を呈するが両端を折損しており全体の形状は不明。重量は0.20g。

22T-002 住居跡(第345・346図)

遺構確認面およびサブトレント内からは土器、土製品が出土した。

1は、壺の口縁部で外面をハケメ調整。2・3は壺の頸部。2は、無文帶と縄文帶が交互に重畠し、縄文帶の下限を沈線区画する。縄文は単節LR。無文部をナデ調整。3は、無文帶と縄文帶が交互に重畠し、区画線はない。縄文は単節LR。無文部をナデ調整。4～10は壺の肩部。4は、4本1組の櫛描文による直線文と山形文が交互に重畠する。5は、櫛描文による直線文と波状文が重畠する。内面をハケメ調整。6は、縄文を地文として沈線で波状文を描く。縄文は単節LR。7は、無文帶と縄文帶が重畠し、沈線で区画する。縄文は附加条第1種。無文部をナデ調整。8は、2本1組の櫛描文による、縦区切りのない疑似流水文と波状文が重畠する。9は、4本1組の櫛描文による波状文を描く。10は、文様の下端部に縄文帯を配し、沈線1～2条で区画する。11は壺の底部で、内外面をナデ調整、底面をケズリ後ナデ調整。12は壺の肩部～底部が残存。全体を縦方向のハケメ調整後、縦・斜めにナデ調整。胴部最大径付近は、内外面で帶状にススが付着。底部は二次被熱し、底面をケズリまたはナデ調整。13～15は甕の胴部。13は、内外面をハケメ調整後に板ナデ。14は、内外面をハケメ調整。15は、外面をハケメ調整し、調整方向はゆるく羽状を呈する。16は台付甕の台部。外面をハケメ調整後に一部ミガキ調整。17は、壺か

甕の底部。外面をナデ調整、底面に木葉痕。18は、鉢の口縁部～体部。内外面をハケメ調整後、口唇部と口縁部外面にLR単節縄文を施す。19は、無頸甕の口縁部。口唇部をヨコナデで面取りする。外面をケズリおよびナデ調整、内面をミガキ調整。20は、円盤状土製品で、全面が風化している。土器片を再加工したものとみられる。

22T-003 住居跡(第347図)

遺構確認面およびサブトレンチ内からは土器が出土した。

1・2は甕の口縁部で、口唇部・外面のほか内面の口唇部直下をハケメ調整。3～14は甕の肩部。3は、LR単節縄文を施す。回転方向は上部が横、下部が斜方向。4は、無文帯と縄文帯が交互に重畠し、沈線区画する。縄文は単節LR。無文部をミガキ調整し、円形突起を貼り付ける。外面を全面赤彩。5は、無文帯と縄文帯が交互に重畠し、沈線区画する。縄文は単節LR。無文部をハケメ調整後にミガキ調整。外面を全面赤彩。6は、ハケメ調整後に沈線による構図を描く。7は、無文帯と縄文帯が交互に重畠する。沈線区画はない。縄文は単節RL。無文部をナデ調整。8は、広義の磨消縄文手法で結紐文を描く。縄文は単節LR、無文部をミガキ調整。外面を全面赤彩。9・10は同一個体。広義の磨消縄文手法で結紐文とみられる構図を描く。縄文は単節LR、無文部をミガキ調整および赤彩し、2個1対の円形突起を貼り付ける。11は、5本1組の櫛描文による波状文が4段重畠する。12・13は同一個体。ハケメ調整後、5本1組の櫛描文で、12は波状文が2段重畠し、13は波状文と直線文が重畠する。14は、櫛描文による直線文と波状文が重畠する。15～19は甕の口縁部。15は、口唇部を指頭押捺する。外面をハケメ調整。16は、口唇部を指頭押捺する。内外面の口唇部直下をナデ調整、以下をハケメ調整。17は、口唇部を指頭押捺する。内外面をナデ調整。18は、口唇部を指頭押捺する。内外面をナデ調整。19は、口唇部を内外面から指でつまみ押捺する。20・21は甕の胴部。20は、3本1組の櫛描文による羽状文を描く。21は、内外面をハケメ調整。22は甕の底部。外面をハケメ調整し、底面をケズリ調整。被熱により変色。23～25は鉢の口縁部。23は、口縁部下端を肥厚し複合口縁を作出する。口唇部にLR単節縄文、口縁部下端にはヨコナデ後にヘラ刻みを施す。体部の調整は不明。24は、口縁部を強くナデ、体部との間に稜線を作出する。体部をハケメ調整後にナデ調整。25は、口唇部をハケメおよびナデ調整による面取りする。外面をナデ調整およびハケメ調整。

22T-004 住居跡(第348図)

遺構確認面およびサブトレンチ内からは土器が出土した。

1は、甕の口縁部。口唇部を内外面から指でつまみ押捺。外面は口縁部直下を横方向、以下を縦方向のハケメ調整。内面は口縁部を肥厚し、器面をハケメ調整。2・3は、甕の胴部で、ハケメ調整を羽状に施す。4は、鉢の口縁部で、口唇部および内外面全体をナデ調整および赤彩。

22T-005 住居跡

遺構確認面およびサブトレンチ内からは、遺物は出土しなかった。

22T-006 土坑(第349～352図)

土坑の遺構確認面より上面において、土器が集中して出土した。このほか、本土坑の覆土を一部サンプル採取したが、水洗選別・抽出作業などの実施に至らず、微細遺物の有無は今後の課題である。

1・2・7・8・10～13は壺。3～6・9は甕。1は、壺の口縁部で、口唇部は成形時の歪みにより波打つ。外面をハケメ調整。口唇部直下に涙滴形の突起剝離痕がある。2は、肩部が約1/2周、胴部最大径から底部がほぼ全周残存する。外面全体を縦・斜方向のハケメ調整後、底部付近をミガキ調整。肩部には沈線区画のない縄文帯と無文帯を交互に重畳し、最下段には3本1組の櫛描文により波状文を描く。波状文の直下には線刻が1か所確認でき、意匠は不明だが記号文の一種とみられる。内面を板ナデまたはナデ調整。底面には木葉痕。3～6は甕の口縁部。3は、口唇部を内外面から指でつまみ押捺。器面は風化しているが内外面にハケメ調整痕が確認できる。4は、口唇部にハケメ状工具で刻みを施す。内外面をハケメ調整。内面にスス付着。5は、口唇部を内外面から指でつまみ押捺。内外面をハケメ調整。6は、外面をハケメ調整。内面を単節RLまたは附加条第1種による縄文施文。補修孔とみられる穿孔が1か所みられる。7は、口頸部～胴部下半が約3/4周残存する。頸部を板ナデ調整、肩部～胴部はハケメ調整後にミガキ調整。肩部のミガキは入念だが、胴部のミガキは粗く、ハケメ調整痕を明瞭に残す。内面の口縁部付近にはハケメ調整、以下はナデ調整。外面のうち、図中網掛け範囲にはススのような不定形の黒色付着がみられる。8は、頸部が約1/3周、肩部～胴部は約1/2周残存する。全体的に器面の風化が著しい。器面全体をハケメ調整。一部にミガキ調整痕が確認できる。頸部には沈線区画のない縄文帯と無文帯を交互に重畳する。肩部には広義の磨消縄文手法により、舌状文を描く。舌状文は中軸線に対して上下対称となる構図であり、部分的に結紐文をなす、描線がつながらないなど構図の乱れがみられる。また、舌状文部分にはわずかに赤彩が確認できる。縄文は単節LR。底面をケズリ調整。9は、甕の胴部。外面をハケメ調整。10は、12と同一個体。壺の胴部下半で、外面をハケメ調整。11は、肩部から底部までがほぼ完存する。外面全体をハケメ調整した後に、肩部に横方向、胴部以下に縦方向のミガキ調整を施す。外面全体を赤彩。内面を板ナデ調整。底面はケズリおよびナデ調整。12は、頸部中位から胴部下半までが約1/4～1/2周程度残存する。器面は風化しているが、頸部に縦方向、肩部～胴部に横方向のハケメ調整を施す。内面を板ナデ調整。13は、口縁部～胴部が約7/8周残存、底面は約1/3周が残存。口縁部に横方向、頸部に縦方向のハケメ調整。肩部以下は入念にミガキ調整を施し、ハケメ調整痕は確認できない。内面は口縁部～頸部上半をハケメ調整。底面に網代痕。

22T-008 住居跡(第353図1)

遺構確認面において土器が1点出土した。1は甕で、ほぼ完存し、倒鐘形の器形を呈する。この個体は、22T-002 住居跡の出土土器片と接合した。口唇部にハケメ状工具で刻みを施す。外面には縦方向のハケメ調整。内面の口縁部～胴部最大径付近には横方向のハケメ調整を施し、以下はナデ調整。括れ部には2個1対の補修孔が1か所みられる。底面にケズリ調整を施し、中央部に直径1.4cmの焼成後穿孔がある。

遺構外(第353図3～8)

10～12・14～16・20・21Tからは、いずれも当該期の遺構に伴わない弥生土器が出土した。土器のなかには無文の破片を含むが、胎土・色調・焼成などから弥生土器と判断した。

3は12T出土で、壺または甕の胴部とみられ、外面に縄文を施す。縄文は単節RL。4は12T出土で、壺の胴部とみられる。外面は摩滅しているが、縄文を施した後に結節縄文を2段めぐらせる。縄文は単節RL。5は15T出土で、甕または鉢の底部付近とみられる。外面に浅いハケメ状調整後、縄文を施す。縄文は直前段反撫。内面をミガキ調整。6は20T出土で、甕の頸部～胴部または鉢の口縁部～体部で、外面に輪積痕を残す。輪積痕より上をナデ調整後、縄文を施し、以下にケズリ調整。縄文は附加条第一種

を回転させるか、無節 R を連續押圧したものとみられる。7は21T出土で、壺の胴部とみられ、外面にミガキ調整。8は21T出土で、壺の胴部とみられ、外面をケズリ調整後にナデ調整。

3.まとめ

7次調査において、16・22Tでは、弥生時代の竪穴住居跡6軒および土坑3基を検出した。帰属時期については、遺構外出土土器のうち数点は後期の可能性はあるが、遺物を伴わない22T-005住居跡および22T-009土坑をのぞいて、遺構・遺物のうち大半は中期後半の宮ノ台式期に位置づけられる。船橋市内では、弥生時代中期の集落遺跡として唯一の事例となる。このほか、遺物からは詳細な時期比定ができるものの、16T-005土坑では年代測定の結果、弥生時代後期に相当する年代が得られた。

弥生時代中期中葉以前は、千葉県域全体でみてもきわめて遺跡数が少なく、分布も散漫な傾向にあるが、中期後半に至ると県内の遺跡数は増加し、印旛沼沿岸域や東京湾岸域などで大規模な環濠集落が形成される展開を示す。船橋市の近隣では、市川市国府台遺跡、八千代市田原窪遺跡、流山市加村台遺跡などで環濠集落が確認されている。さらに、低地の市川市道免き谷津遺跡では土器と木製農具が検出され、集落近隣での水田稻作活動を示唆する(千葉県教育振興財団 2018)。

これまでに把握されている、船橋市内の弥生時代中期の遺跡としては法蓮寺山遺跡が挙げられ、遺構外からほぼ完形の宮ノ台式土器が出土している(日本鉄道建設公団・財団法人千葉県都市公社 1973)。また、東町遺跡では遺構外から後期の土器片に混じって宮ノ台式期の土器片が出土している(船橋市教委 2014)。夏見大塚遺跡(23)では宮ノ台式土器を伴う方形周溝墓が1基検出され、外原遺跡では試掘時に宮ノ台式土器が出土した(小林 2014)。このほか、いずれも採集品ではあるが、飯山満町近辺での採集とみられる中期前半の土器片(石川 2010)、古作貝塚で採集された中期後半とみられる有角石器(領塚 1988)がある。

周辺地域における弥生時代遺跡の分布傾向としては、海老川左岸および本郷台北側から柏井台にかかる範囲の、2地域に大きく分かれて点在する状況とみられる。柏井台では、市川市域でも法伝西遺跡において宮ノ台式期の集落が検出されている(市川市教委 1980)。

取掛西貝塚において、弥生時代の遺構は台地が現存する範囲のうち西側に展開しており、21Tでは遺構を検出しなかったものの、22Tの北側および西側にも住居跡や環濠などが分布する可能性が考えられる。ただし、さらに西側の範囲は昭和期の土砂採取などにより、台地が大規模に削平されているため、集落の全体像を把握することは困難と想定される。

出土遺物については、サブトレーンチ内の部分的な調査を主体とするため、22T-006土坑をのぞいて限定的な内容にとどまるが、いずれの遺構も、出土土器は宮ノ台式土器を主体とする。他地域由来の土器としては、22T-001住居跡の土器2点(第342図17・18)が足洗式土器と考えられるほか、22T-002住居跡の土器1点(第345図6)が北島式系統の土器と考えられる。また、22T-001住居跡の土器(第342図9)も異系統要素を取り込んだ土器とみられる。

中期後半における弥生土器の編年的な位置づけについては、本遺跡の近辺では遺跡数が少なく、地域固有の編年構築や、地域色の抽出には十分に至っていない状況である。近在する遺跡分布圏のうち、資料や編年の充実する印旛沼南岸域の編年(ET I～III期、小倉 1996など)を参照すると、甕の口縁部内面に櫛描鎖状文をもつ個体がなく、ET I期の確実な個体はない。また、施文・器面調整に用いる縄文原体の種類には羽状縄文、S字状結節回転文、結節縄文がみられないことから、ET II b期新段階～ET III期に特徴的な要素を欠く。加えて、ET III期に特徴的な、幅広で構図が退化したタイプの櫛描文がみられない点も、

上記の特徴と符合する。甕については、口唇部を内外面から指でつまみ押捺するものと、ヘラ状工具・ハケメ状工具・指頭で刻みを施すもの、の二者がある。また、平底の甕と台付甕が共存する。

上記の諸特徴をふまえると、出土土器の時間幅は ET II a 期～ET II b 期古段階の範囲におさまるものとみられる。しかし、各遺構の位置関係を考慮すると、5軒の竪穴住居跡は互いに密接または重複しているものが多く、すべて同時に利用されたものとは想定しがたい。とはいえ、出土土器からは明瞭な時間差を設定しがたいことから、短期間のうちに狭い範囲での廃絶を繰り返したものと想定される。あえて型式学的な時間差を求めるべくすれば、22T-003 住居跡については、赤彩した壺が多い点や、広義の磨消縄文手法において無文部のミガキ調整を徹底し、器面にハケメ調整痕を残さない点が挙げられ、他の住居跡や土坑よりも新しい様相となる可能性がある。22T-003 住居跡は ET II b 期古段階、他の中期遺構は ET II a 期に対比させておきたい。

石器については器種組成の全体像を把握するに至らないが、扁平片刃石斧を伴うことから、宮ノ台式土器を主体とする他の集落と同様に、大陸系磨製石器を保有するものと考えられる。鉄製品については、宮ノ台式土器に伴うものとして鉄斧の事例はあるが、管見の限りでは第344図47のような事例はなく、後世の遺物が混入した可能性を想定しておきたい。

検出した遺構のうち、住居跡については、全体の規模が確認できるものは 22T-002 住居跡に限られ、8.0m × 6.0m 程度の規模とみられる。市川市国府台遺跡で全形が判明している第29次調査 SI54 (6.94m × 5.90m) と比較すると、やや大型の規模である(国府台遺跡第29地点調査会 2002)。サブトレーンチ内の限定的な調査ではあるものの、壁面に沿った周溝、中央部付近の炉が確認されたことから、内部施設については宮ノ台式期の他の集落と同様の構造をもつと推定される。

土坑については、22T-006 土坑のような、大型土器片を集積する土坑が単独で設けられた事例は、宮ノ台式土器を主体とする集落において、管見の限り類例を欠く。

22T-006 土坑出土土器の欠損については、後世に土器集積上部が削平された可能性も一部ありえるものの、各土器の重なり方と順序を確認した結果、完形土器が埋設後に破損されたというよりも、あらかじめ破損した状態の土器片が集積された状況が認められた。また、器種組成における壺の比率および復元率が高い点は、住居跡とは異なる傾向と考えられる。

宮ノ台式期の集落で、このように復元率の高い壺を埋設した事例としては、方形周溝墓の周溝内での埋設がある。ほかには、住居跡内部に土坑を掘り、土器棺墓を設置する事例が挙げられ、なかには千葉市大森第2遺跡のように、埋没した柱穴を再利用するものを含む(日本鉄道建設公団・財団法人千葉県都市公社 1973)。しかし、どちらも大量の破損品を集積するのではなく、少数の完形品を埋置するものが主体である。

そこで、宮ノ台式土器の分布圏外まで範囲を拡大し、比較対象を検索した(第354図)。検索にあたっては、弥生時代中期後半(または近接する時期)の関東地方および周辺域において検出された土坑で、平面プランが長楕円形で長軸 1 m 以上の規模のもの、複数土器の大型破片や半完形品を集めるもの、住居内ではなく屋外に構築されるもの、という特徴を条件とした。以下に、主な事例を 3 例挙げておきたい。東北地方南部(福島県域および山形県域)では、弥生時代中期中葉から中期後半にかけて、長方形または長楕円形の土坑が群集する事例があり、「陣馬・一ノ堰 B 型土壙墓」と呼称され(芳賀 1988)、詳細な類型化がなされているが(佐藤 2011)、土坑墓または樹皮で遺骸を包むタイプの木棺墓と考えられる(石川 2009)。

土坑底面には墓標杭とみられるピットをもつ事例があり、被葬者の頭位を示す可能性がある。主な出土

遺物は土器と管玉で、土器は壺が大半を占め、覆土上層から遺構検出面よりも上部にかけて破片を集積する。また、完形品の小型土器を土坑底面に埋置する場合がある。集積された土器は、復元率が低いものがある一方で、遺構・地点をまたぐ接合例があるため、土器が破碎された状態で持ち込まれた可能性が指摘されている（品川 2004）。さらに、こうした土坑墓の類似例は、宮ノ台式分布圏外ではあるが、関東地方でも、栃木県大塚古墳群内遺跡で確認され、在来の土器に加えて、東北地方南部系統の土器を伴っている（栃木県教委ほか 2001）。

静岡県古川遺跡では、弥生時代中期後半に長方形・長楕円形・不整円形の土坑約 70 基が群集する（菊川市教委 2019）。土坑の底面からやや浮いた位置に、壺・甕を含む土器片が集積され、土器の復元率は低いようである。報告者は集落で使用された日常容器の廃棄跡と判断しているが、竪穴住居跡が近在しておらず、集落から独立した立地とみられるなど、土坑墓または木棺墓である可能性も考えられる。

埼玉県池上・小敷田遺跡は、弥生時代中期中葉の集落であり、大型土器片を伴う土坑が複数検出されている（小敷田遺跡第 44 号・77 号・203 号・205 号・206 号土坑など。埼玉県教委 1984、埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991）。いずれも覆土上～中層に炭化物を含み、一部の土坑からは管玉や骨片が検出された。同遺跡内には当該期の方形周溝墓もあるが、それらと共に存する土坑墓とみる見解がある（黒沢 2006）。

以上のように、比較対象を検索した結果は、墓制に関係する事例が主体となった。特に、遺構検出面よりも上面を主体に土器が集積される点などは、前述の「陣馬・一ノ堰 B 型土壙墓」の一部に類似する。ただし、副葬品とみられる遺物（玉類や小型完形土器など）を欠く、覆土中に骨片をふくまない、土坑の深さが異なるなど、前述した各事例とは相違点もみられる。

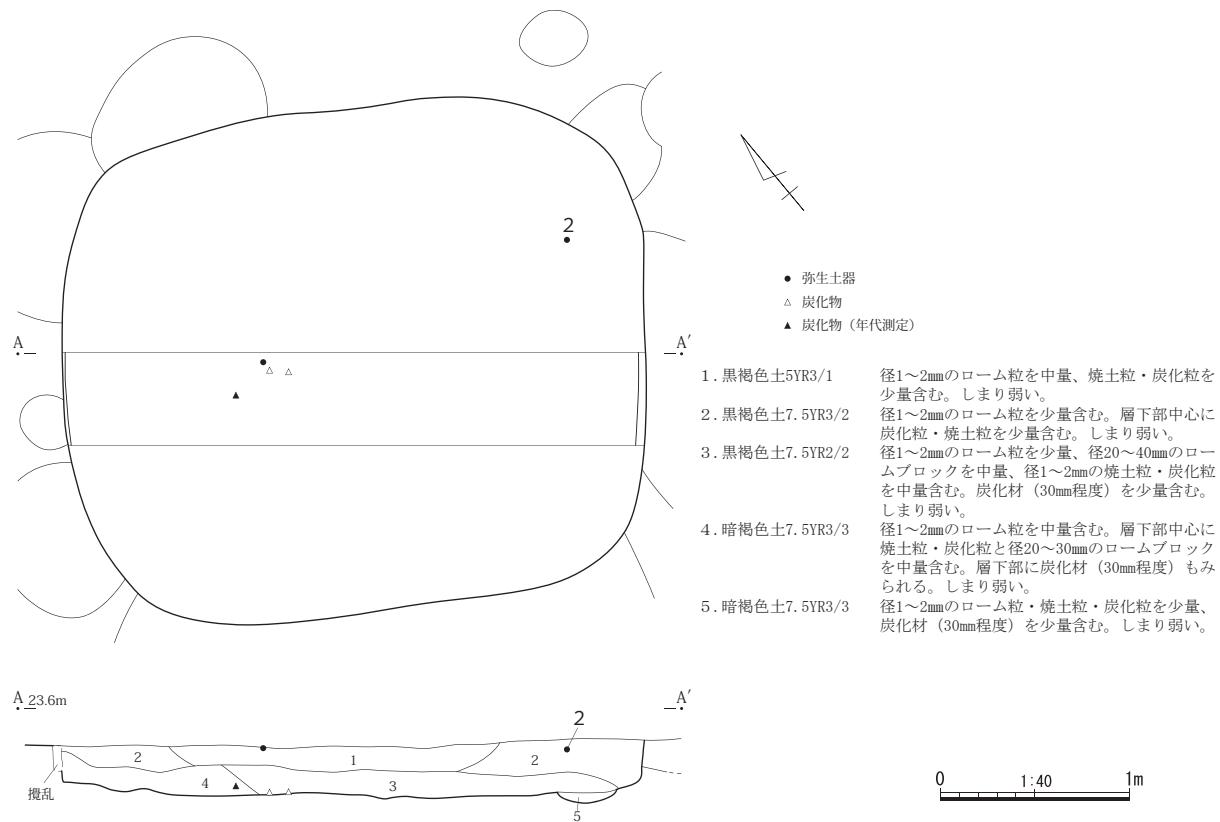
ひとまず、現時点では、22T-006 土坑の性格について判断を保留しておきたいものの、器種組成における壺の比率がきわめて高く、甕をほとんど含まない点は住居跡の組成と隔たりがあり、単に日常容器を廃棄した痕跡とも判断しがたい。

いずれにしても、本遺跡における宮ノ台式期集落の検出は、弥生時代の遺跡が希薄な当該地域において、時空間上の空白を埋める重要な成果と評価できる。

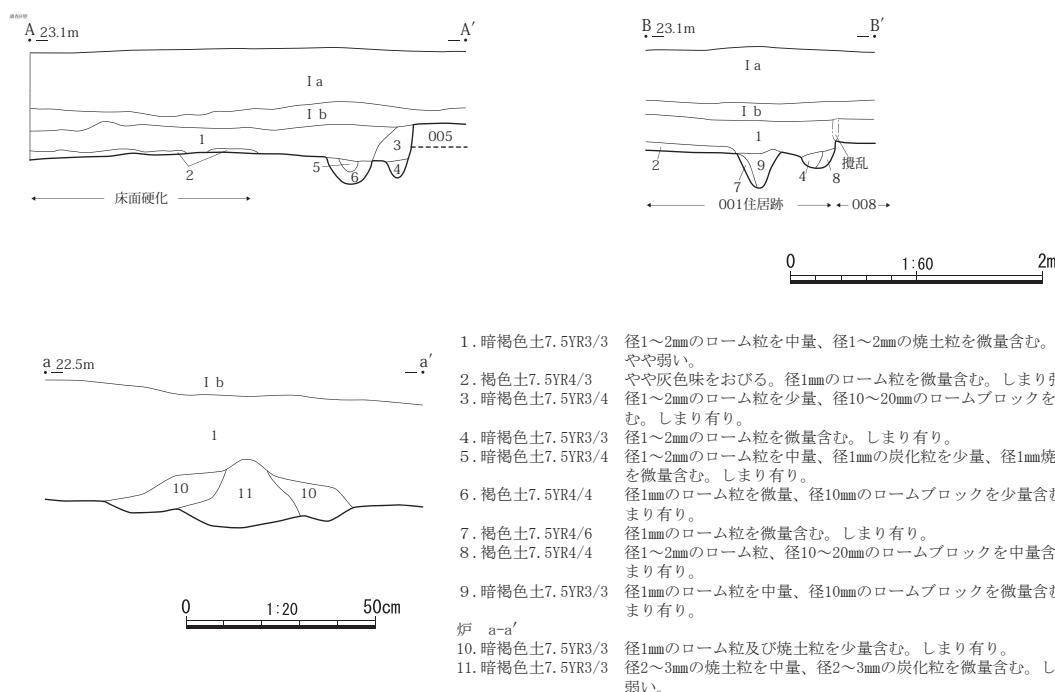
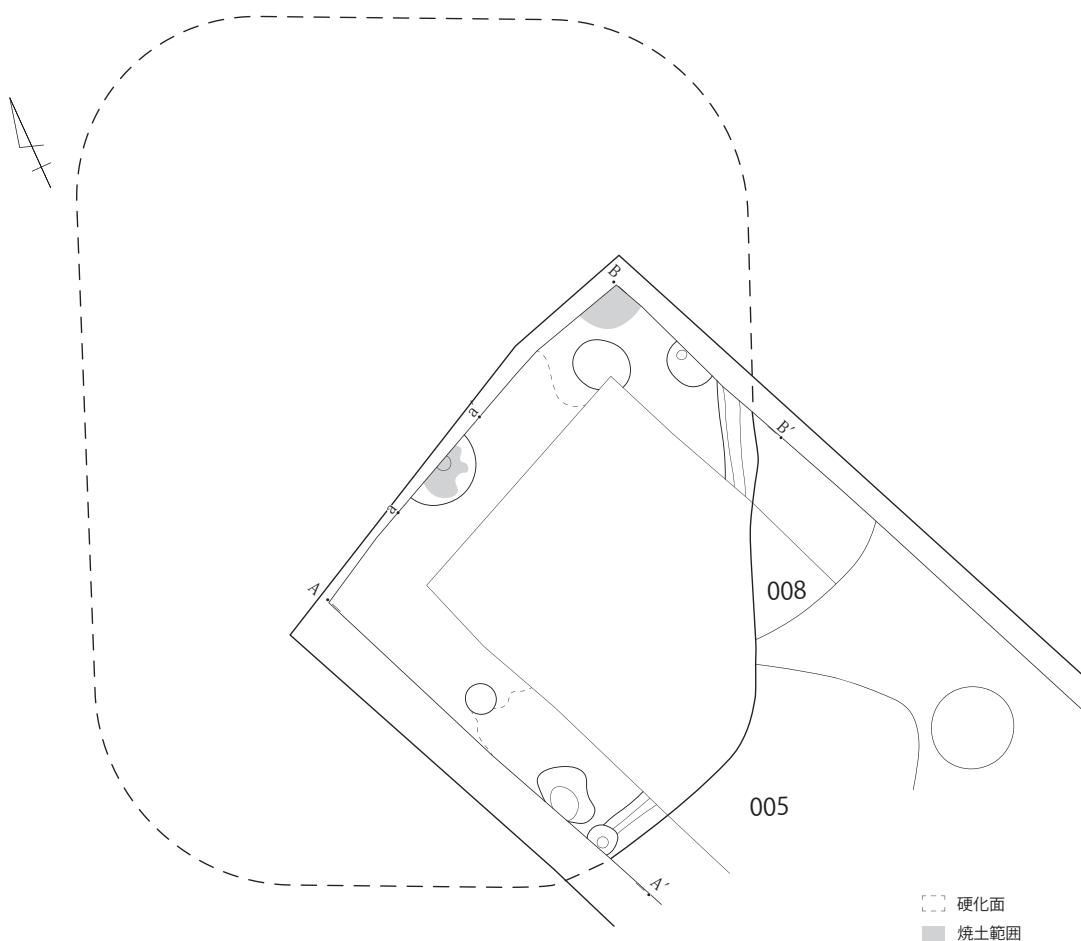
参考文献

- 石川日出志 2009 「弥生時代・壺再葬墓の終焉」『考古学集刊 5』 明治大学文学部考古学研究室
- 石川日出志 2010 「高橋瀬氏採集の弥生時代中期壺形土器片」『飛ノ台史跡公園博物館紀要』 第 7 号 飛ノ台史跡公園博物館
- 市川市教育委員会 1980 「2 法伝西遺跡 B 地点」『昭和 54 年度 市川東部遺跡群発掘調査報告』
- 小倉淳一 1993 「千葉県佐倉市大崎台遺跡の宮ノ台式土器について」『法政考古学』 第 20 集
- 小倉淳一 1996 「東京湾東岸地域の宮ノ台式土器」『史館』 第 27 号
- 小倉淳一 2004 「宮ノ台式土器にみる櫛描文の地域的変遷—印旛沼周辺地域の概要理解のために—」『法政史学』 第 61 号
- 小倉淳一 2005 「テーマ 2. 宮ノ台式の地域差と周辺 報告 (2) 宮ノ台式土器分布域の東側から」『考古学リーダー 5 南関東の弥生土器』 六一書房
- 小倉淳一 2014 「印旛沼周辺地域における宮ノ台式土器出土遺跡の変遷—壺形土器を中心として—」『法政考古学』 第 40 集、法政考古学会
- 菊川市教育委員会 2019 『古川遺跡—第 2・3 次—発掘調査報告書（県営圃場整備事業に伴う発掘調査）』

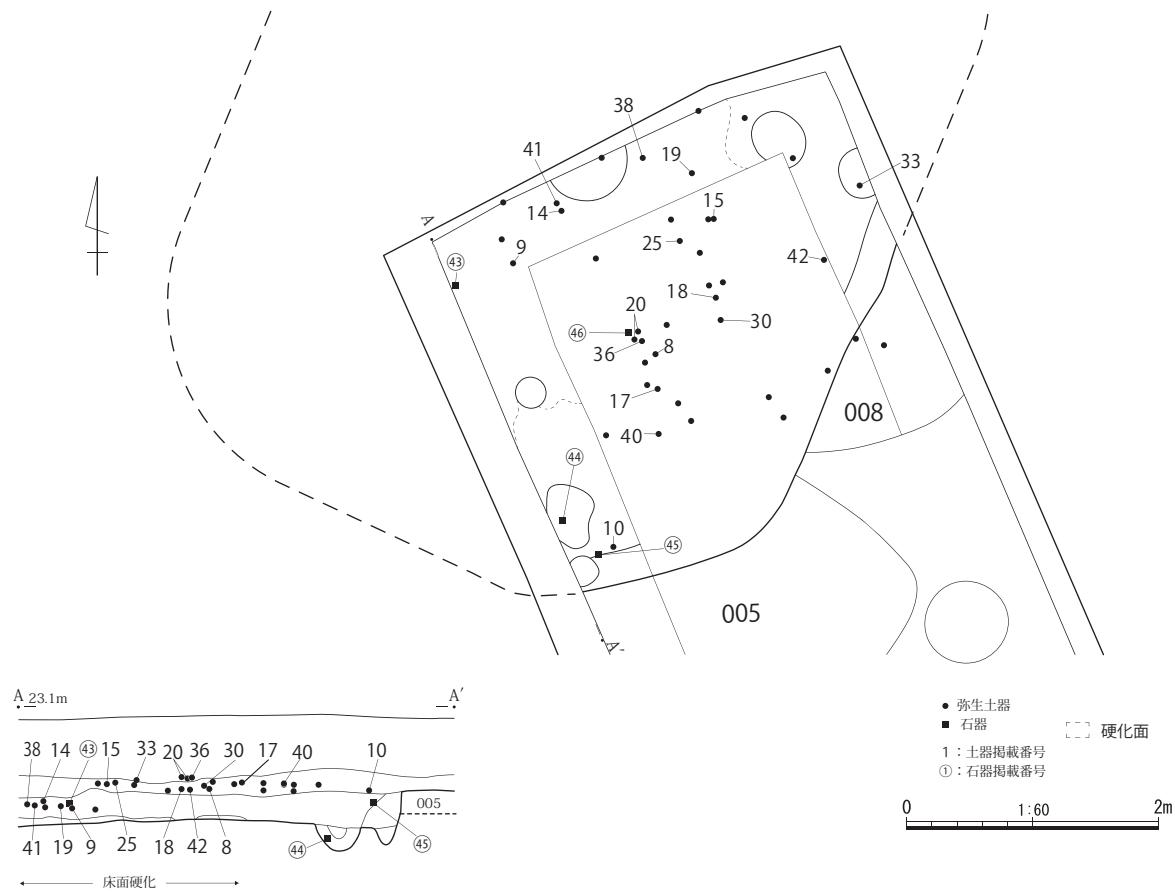
- 黒沢浩 2006 「墓場の変容～再葬墓から方形周溝墓へ～」『墓場の考古学 第13回東海考古学フォーラム 2006』
- 国府台遺跡第29地点調査会 2002 『国府台遺跡—第29地点発掘調査報告書—』
- 小林理恵 2014 「船橋市で見つかった弥生土器」『第8回千葉県北西部地区文化財発表会 文化的縊～モノとヒトの出会い』千葉県北西部地区文化財行政担当者連絡協議会
- 埼玉県教育委員会 1984 『一般国道125号埋蔵文化財発掘調査報告書 池守・池上』
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991 『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集 小敷田遺跡』
- 佐藤祐輔 2011 「米沢市堂森遺跡の再検討—東北地方南部・弥生時代中期後半の墓制について—」『地底の森ミュージアム・縄文の森広場研究報告 2010』
- 品川欣也 2004 「弥生再葬墓と同時代遺物集中区」『考古学ジャーナル』524、ニュー・サイエンス社
- 千葉県教育振興財団 2018 『東京外かく環状道路埋蔵文化財調査報告書13—市川市道免き谷津遺跡第3地点(2)・(3)、第2地点(3)—』千葉県教育振興財団調査報告書第772集
- 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団 2001 『大塚古墳群内遺跡・塚原遺跡』
- 日本鉄道建設公団・財団法人千葉県都市公社 1973 『小金線』
- 芳賀英一 1988 「福島県に於ける弥生時代墓制の展開」『第9回三県シンポジウム 東日本の弥生墓制—再葬墓と方形周溝墓—』群馬県考古学研究所・千曲川水系古代文化研究所・北武藏古代文化研究会
- 福島県教育委員会 1988 『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告VI 一ノ堰A・B遺跡(会津若松市)』
- 船橋市教育委員会 2014 『東町遺跡(2)』
- 領塚正浩 1988 「中島辨智氏旧蔵の石器(I)」『昭和62年度市立市川考古博物館年報』市立市川考古博物館



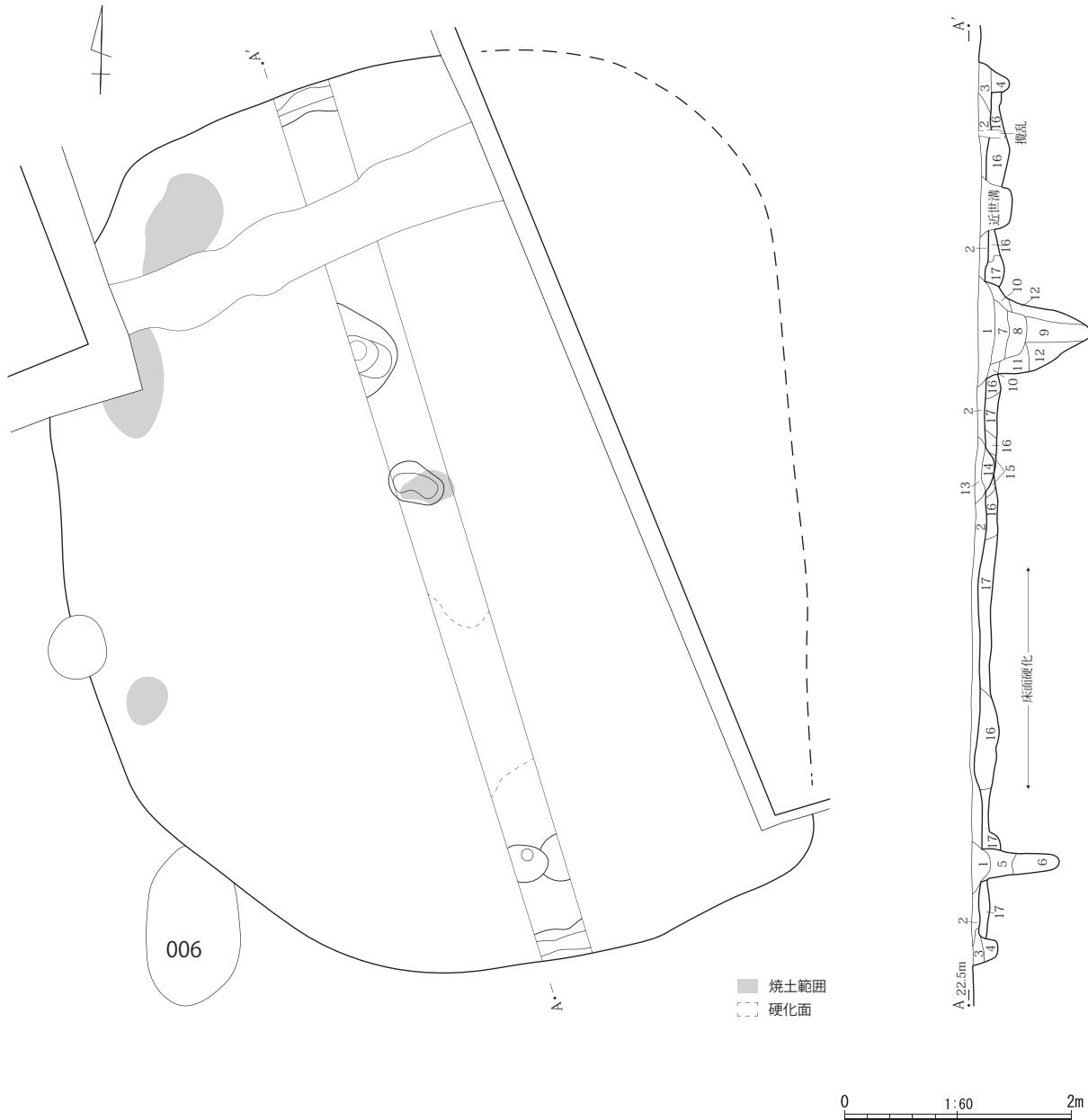
第331図 16T-005 土坑



第332図 22T-001住居跡(1)

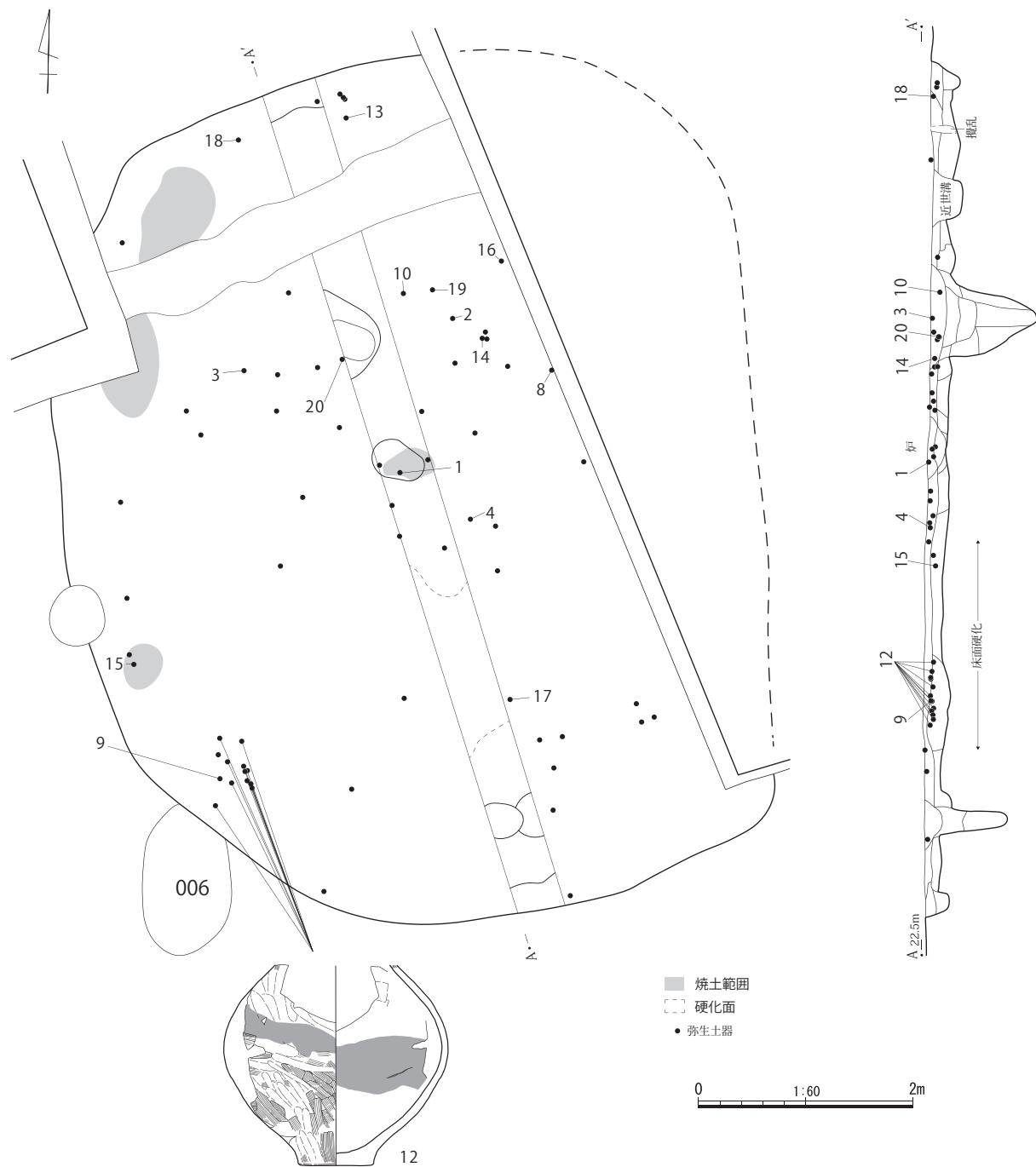


第333図 22T-001 住居跡(2)

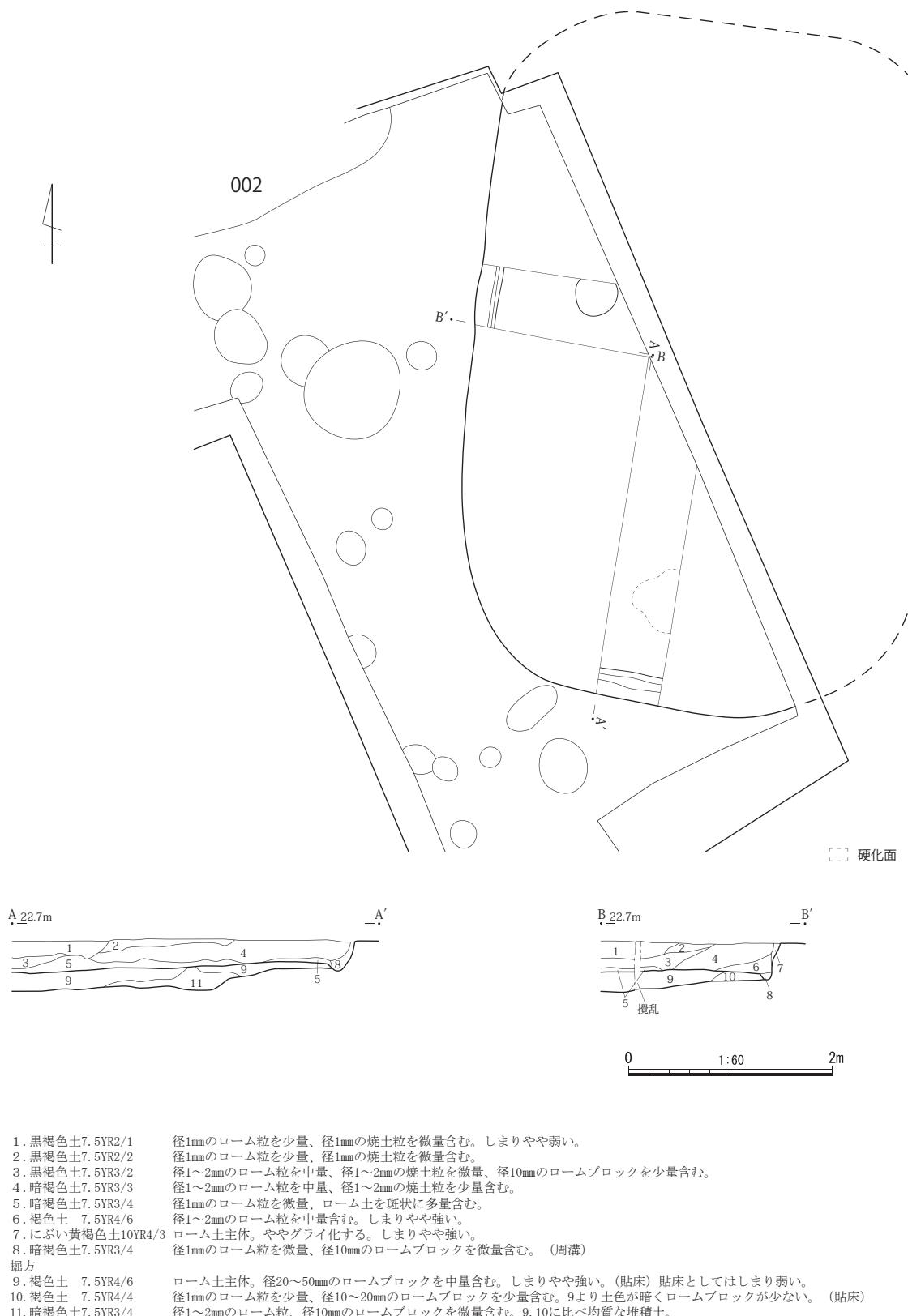


1. 暗褐色土7.5YR3/4 径1mmのローム粒を少量含む。均質な覆土。しまりやや弱い。
2. 暗褐色土10YR3/4 1層に比べ黄色味が強い。径1mmのローム粒を中量、径10mmのロームブロックを少量、径1mmの焼土粒、炭化粒を少量含む。しまりやや強い。
3. 褐色土 7.5YR4/6 径1mmのローム粒を少量、径10mmのロームブロックを中量含む。(壁崩落土か)
4. 暗褐色土10YR3/4 径1mmのローム粒を微量、径10mmのロームブロックを微量含む。均質な覆土。
5. 暗褐色土10YR3/4 径1mmのローム粒を中量含む。しまりやや弱い。
6. 暗褐色土10YR3/4 径1~2mmのローム粒を少量、径10~30mmのロームブロックを少量含む。しまりやや弱い。
7. 黒褐色土7.5YR2/2 径1mmのローム粒を少量、焼土粒を少量含む。1層の土が混ざる。しまり弱い。
8. 黑褐色土7.5YR2/2 径1~2mmのローム粒を中量、径1~2mmの焼土粒を少量、径10mmのロームブロックを微量含む。しまり弱い。
9. 暗褐色土10YR3/4 径1~2mmのローム粒を少量含む。しまり弱い。
10. 暗褐色土7.5YR3/3 径1mmのローム粒を少量、径20~30mmのロームブロックを中量含む。
11. 黑褐色土10YR2/3 径1~2mmのローム粒を少量、径20~30mmのロームブロックを中量含む。しまりやや弱い。
12. 暗褐色土7.5YR3/4 径1~2mmのローム粒を少量、径10~20mmのロームブロックを多量含む。しまりやや強い。
- 炉
13. 黑褐色土10YR2/3 径1mmのローム粒、径1~2mmの焼土粒を少量含む。
14. 黑褐色土7.5YR2/2 径1~2mmのローム粒を中量、径2~3mmの焼土粒を少量含む。
- 掘方
15. 黄褐色土10YR5/8 径20~30mmのロームブロック主体。被熱によりカリカリ。
16. 暗褐色土10YR3/4 径20~40mmのロームブロックを中量含む。しまりやや強い。
17. 褐色土 10YR4/6 ロームブロック主体。しまり強い。

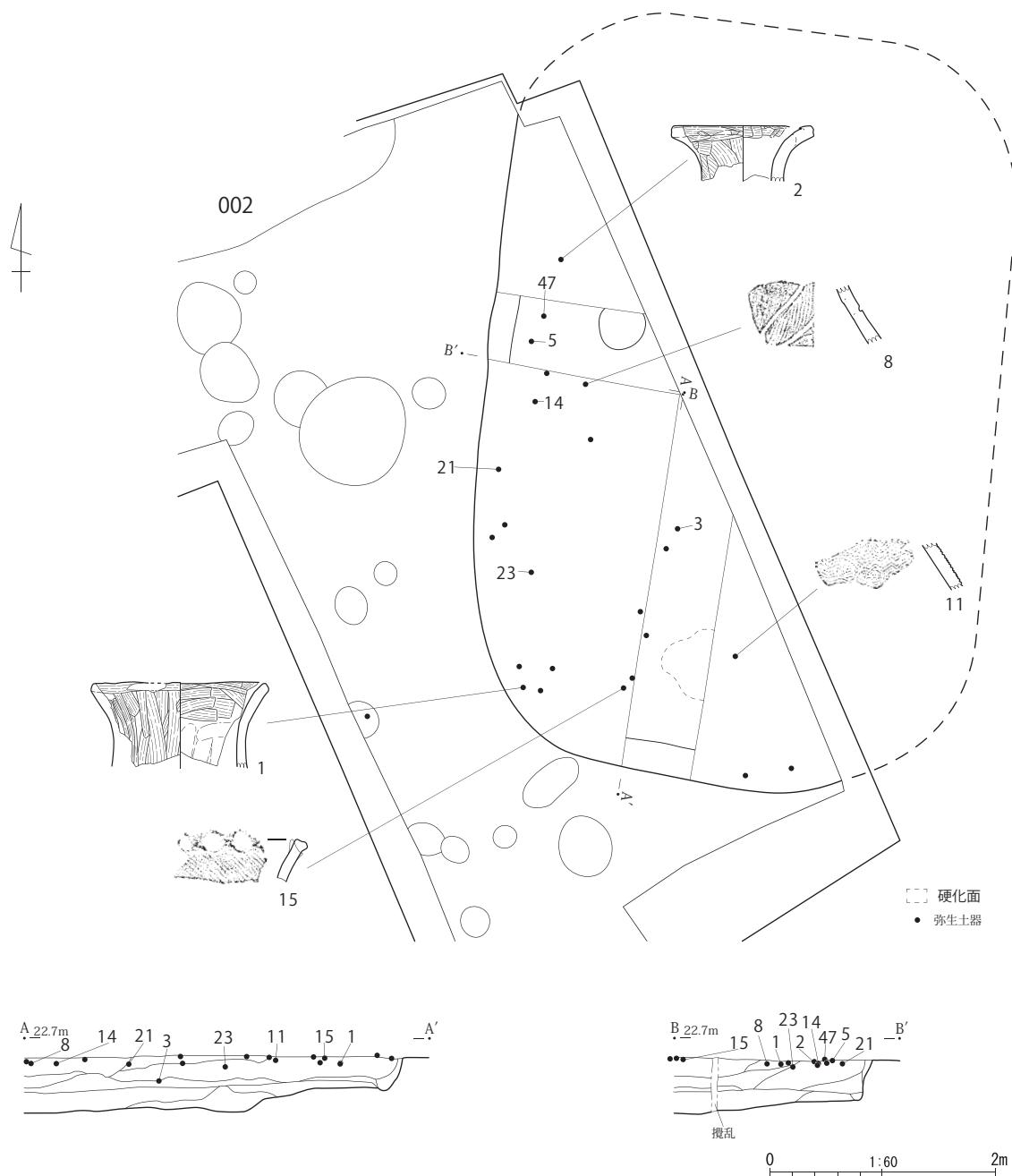
第334図 22T-002 住居跡(1)



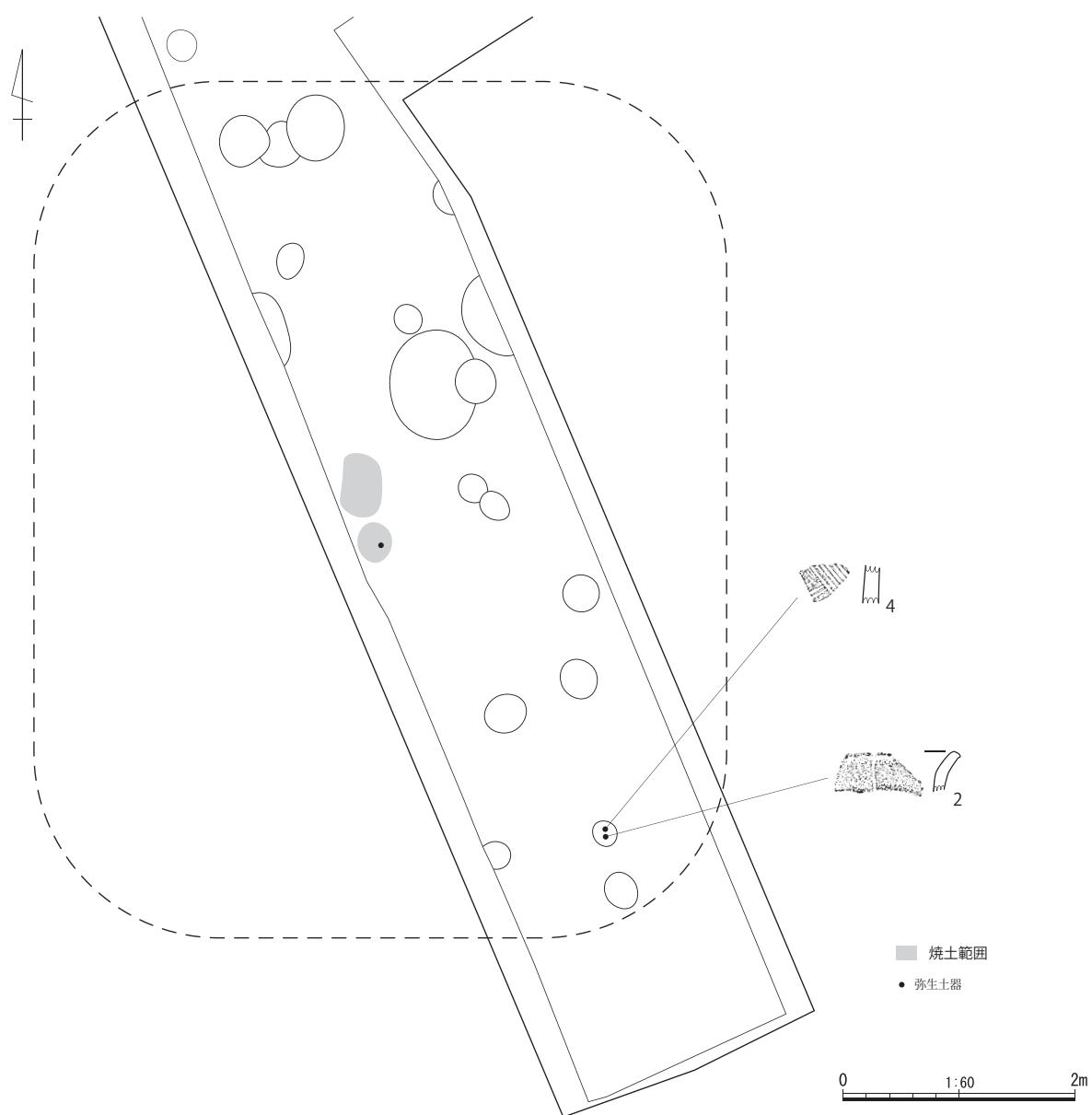
第335図 22T-002 住居跡(2)



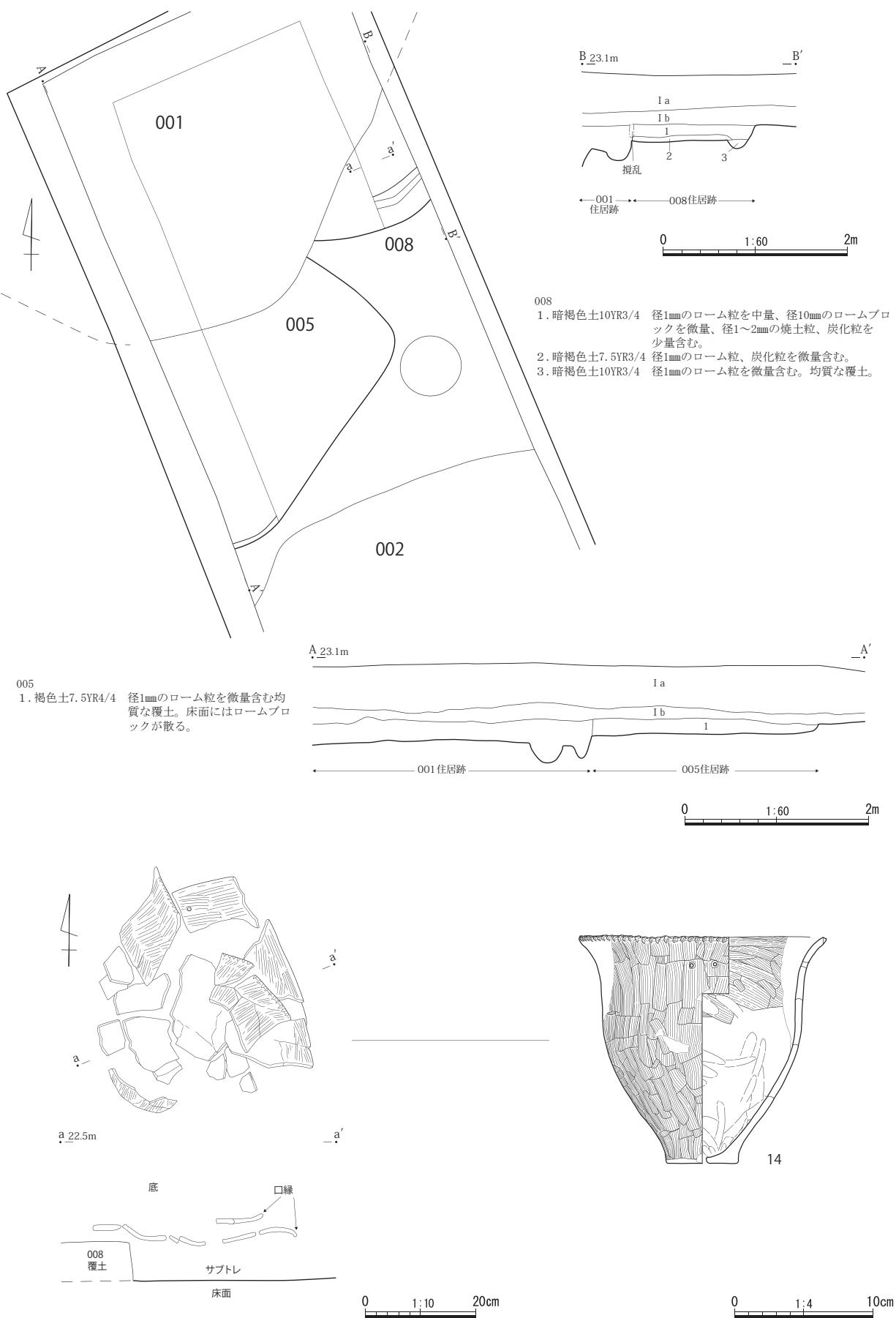
第336図 22T-003 住居跡(1)



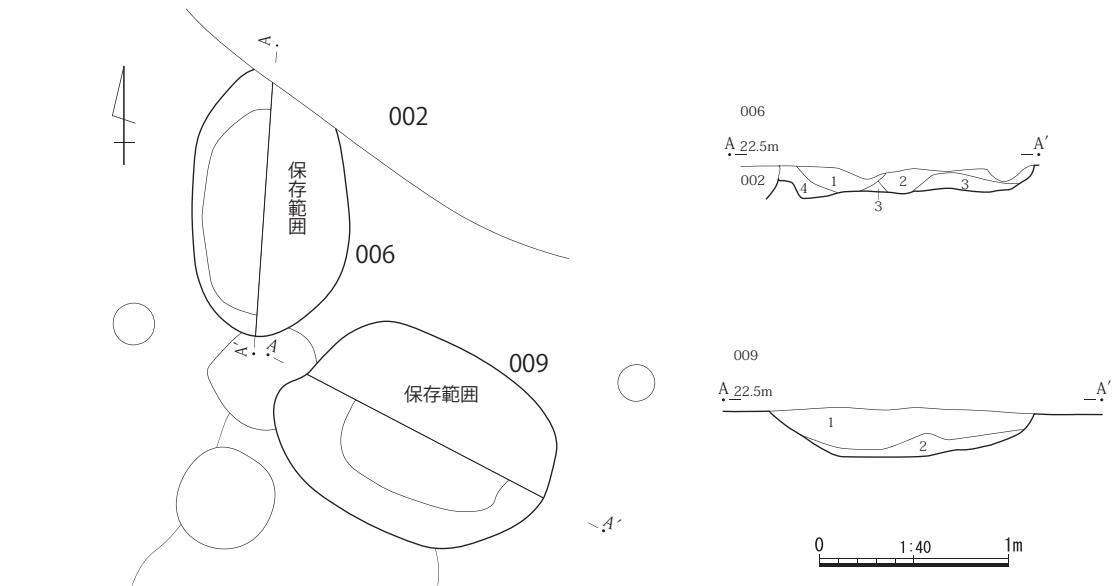
第337図 22T-003 住居跡(2)



第338図 22T-004 住居跡



第339図 22T-005・008住居跡

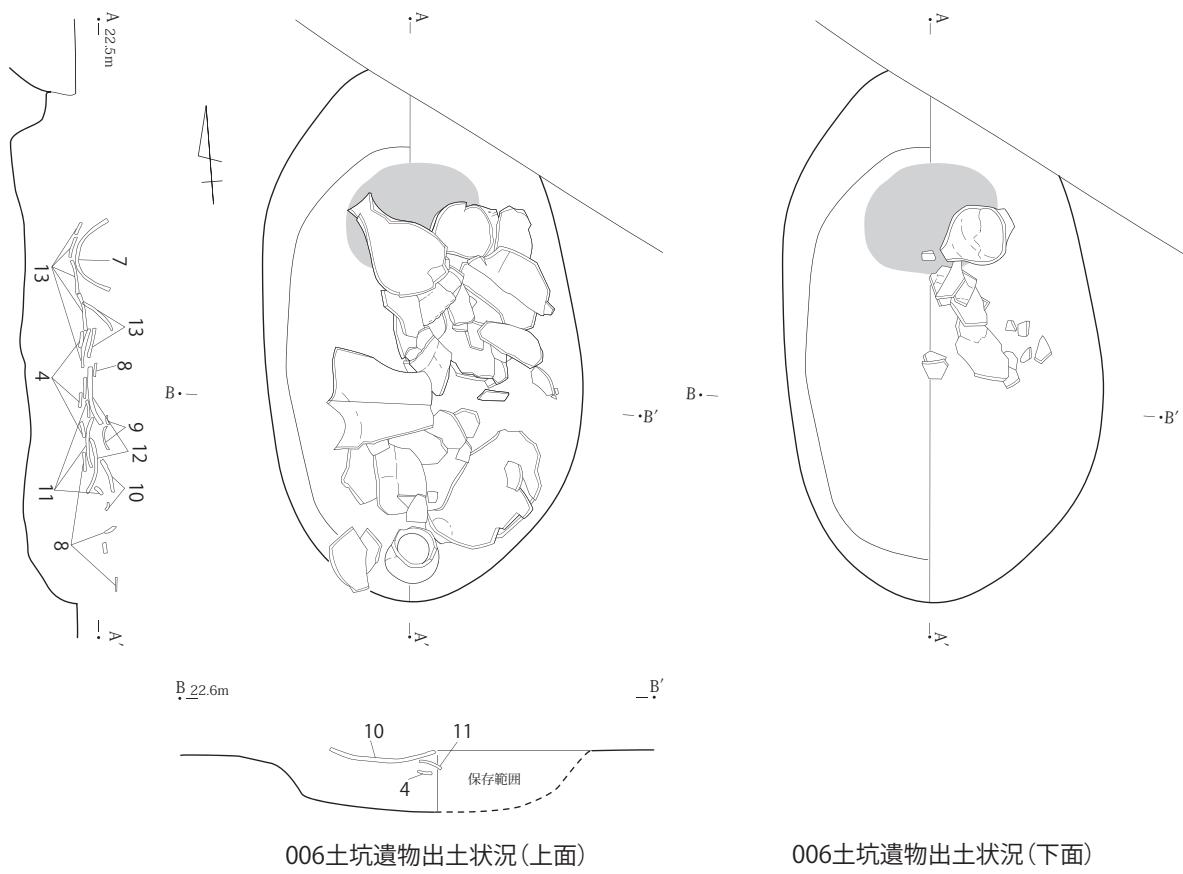


006

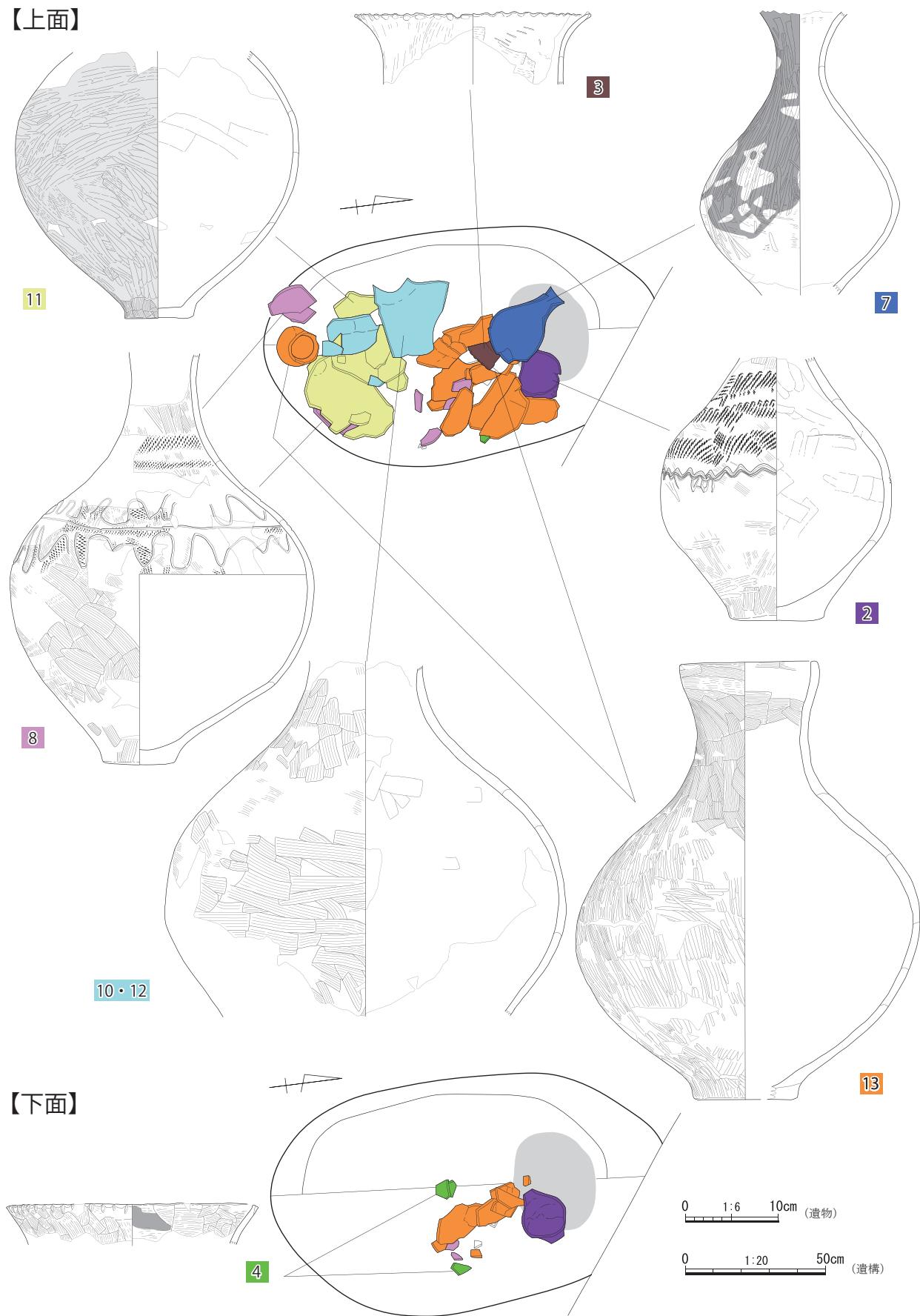
1. 暗褐色土7.5YR3/4 径1~2mmの焼土粒を多量、径1mm以下の炭化粒、ローム粒を少量含む。しまり弱い。層上位には壺形土器出土。
2. 暗褐色土10YR3/4 径1mm以下の焼土粒、炭化粒、ローム粒を少量含む。層下部に径2~5mmのローム粒を少量含む。しまり有り。
3. 褐色土 10YR4/6 ローム主体。特に層下部に径2~5cmのロームブロックを含む。しまり有り。
4. 暗褐色土10YR3/4 径1~2mmのローム粒を多量、径20~50mmのロームブロックを少量、径1~2mmの焼土粒、炭化粒を少量含む。しまり有り。

009

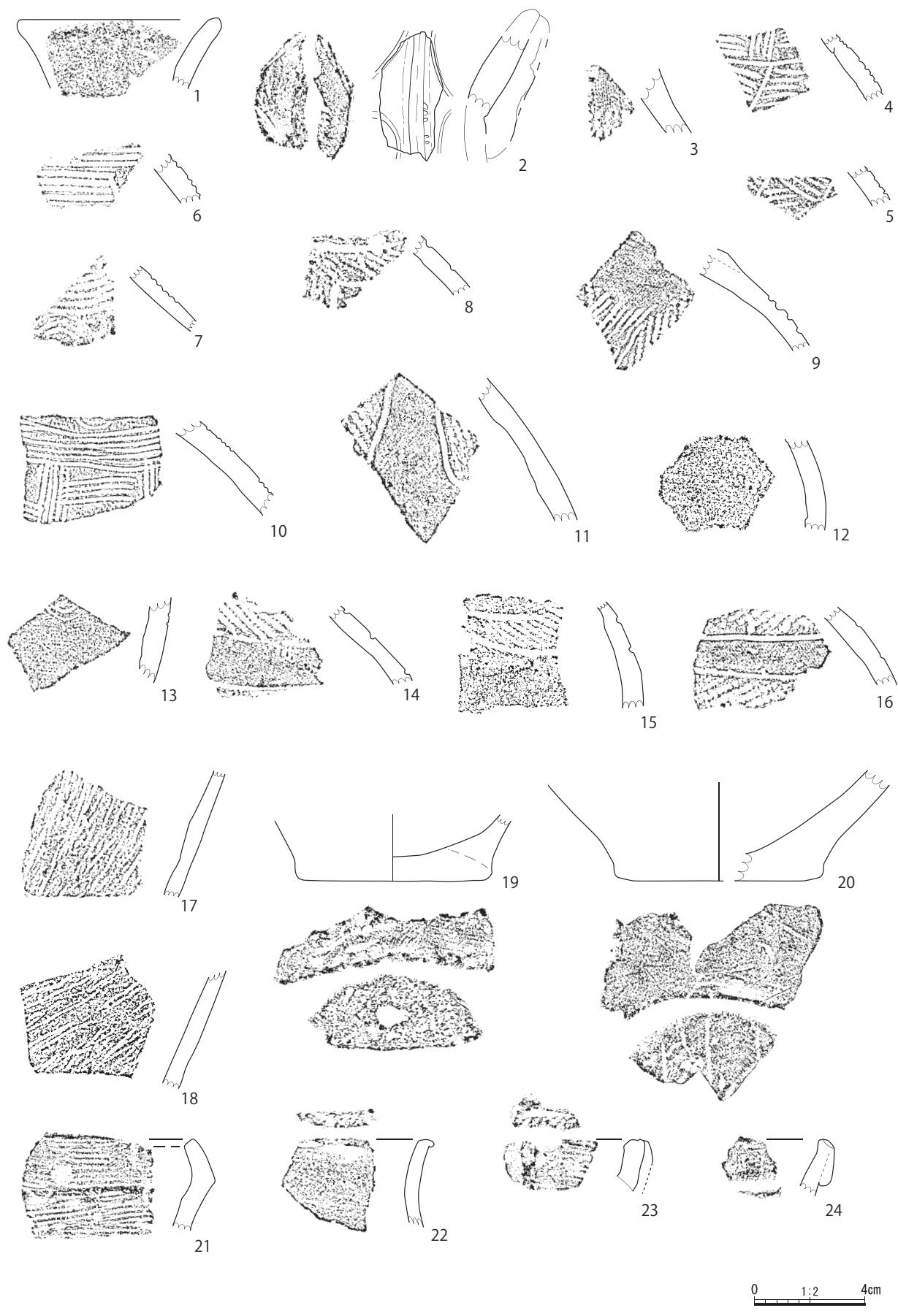
1. 黒褐色土10YR2/3 径1~2mmのローム粒を少量、径20~50mmのロームブロックを少量、焼土粒、炭化粒を微量含む。しまり有り。
2. 暗褐色土10YR3/4 径1~2mmのローム粒を微量、径20~50mmのロームブロックを多量含む。しまり有り。



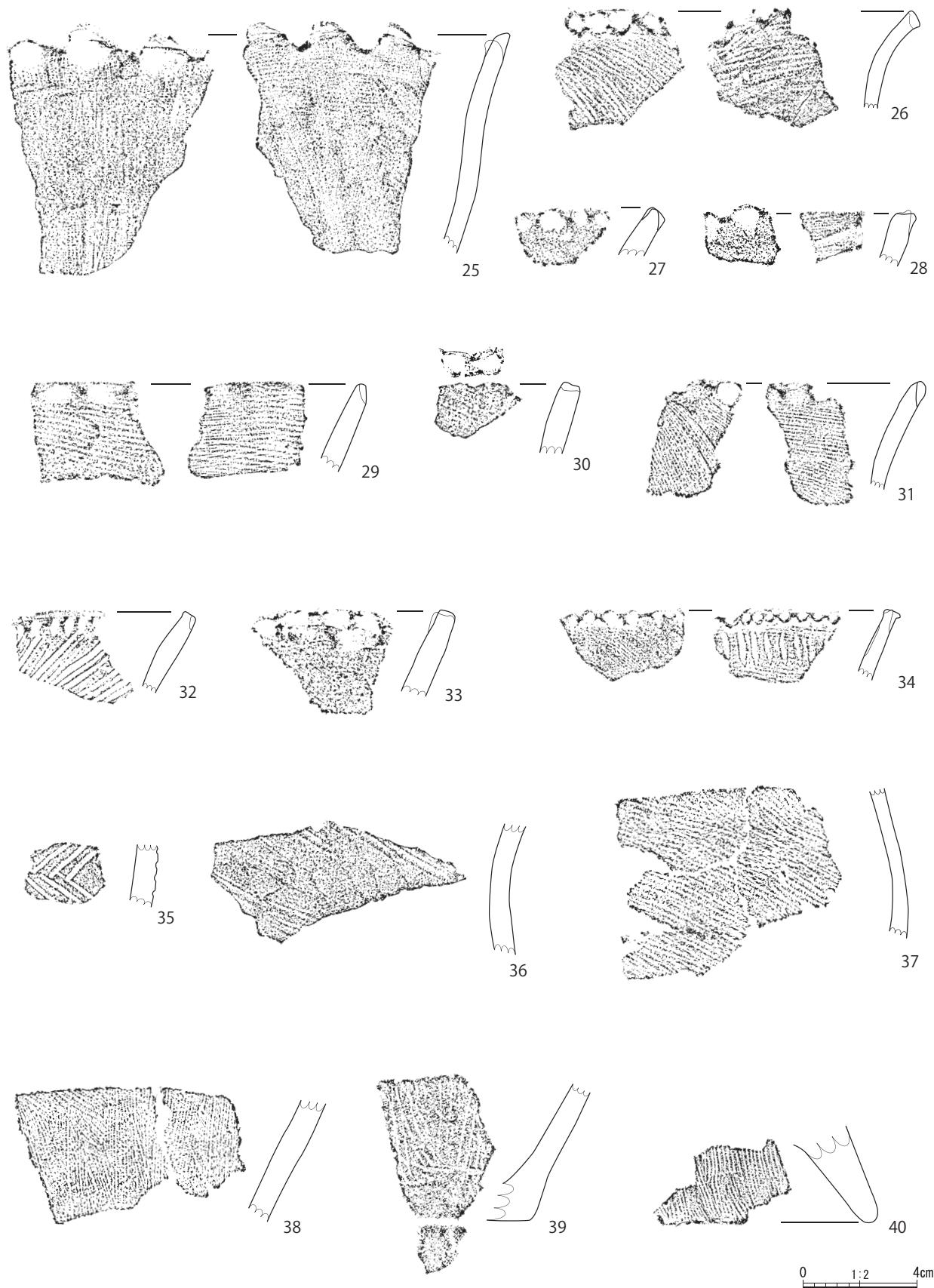
第340図 22T-006・009土坑



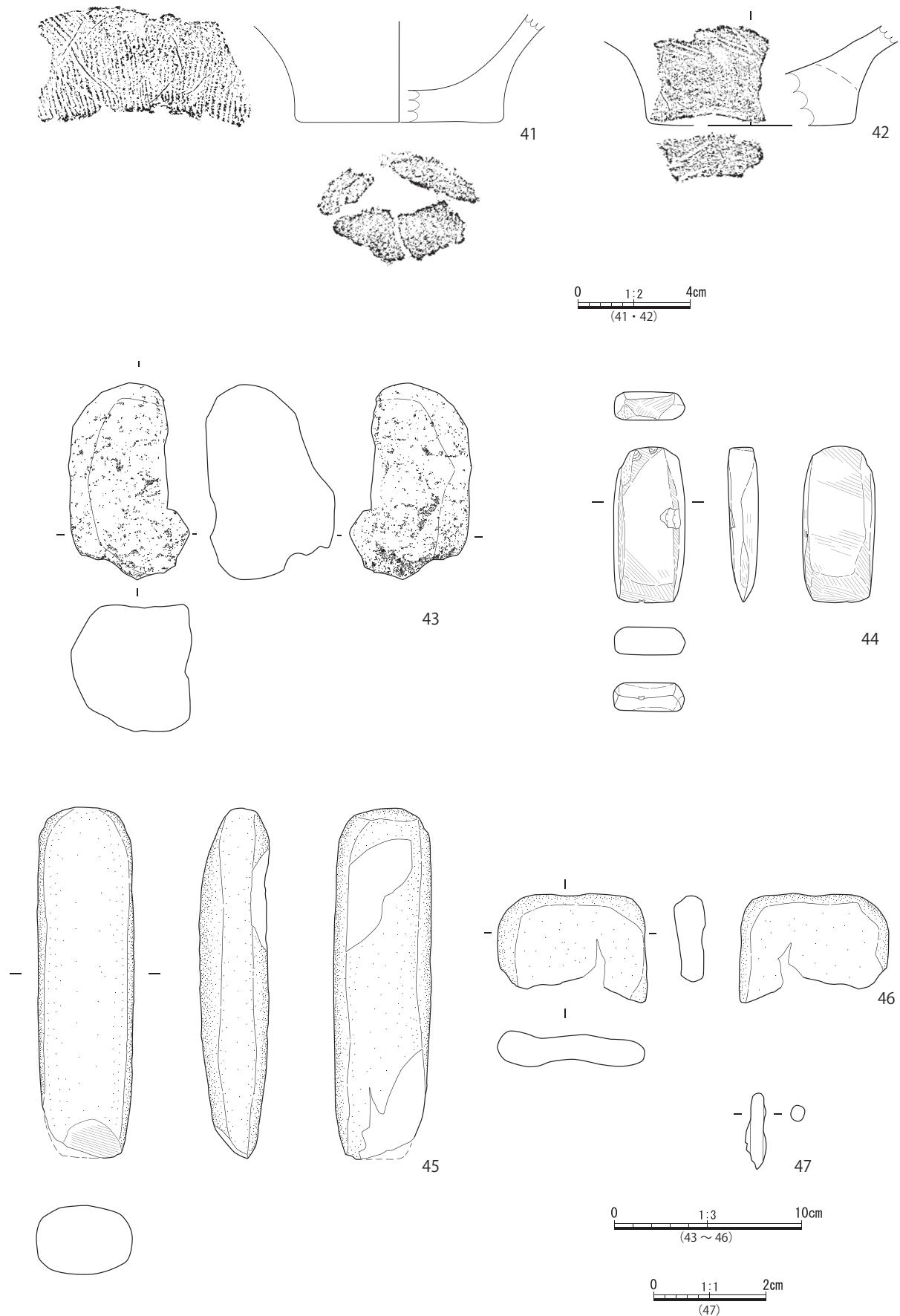
第341図 22T-006 土坑遺物出土状況



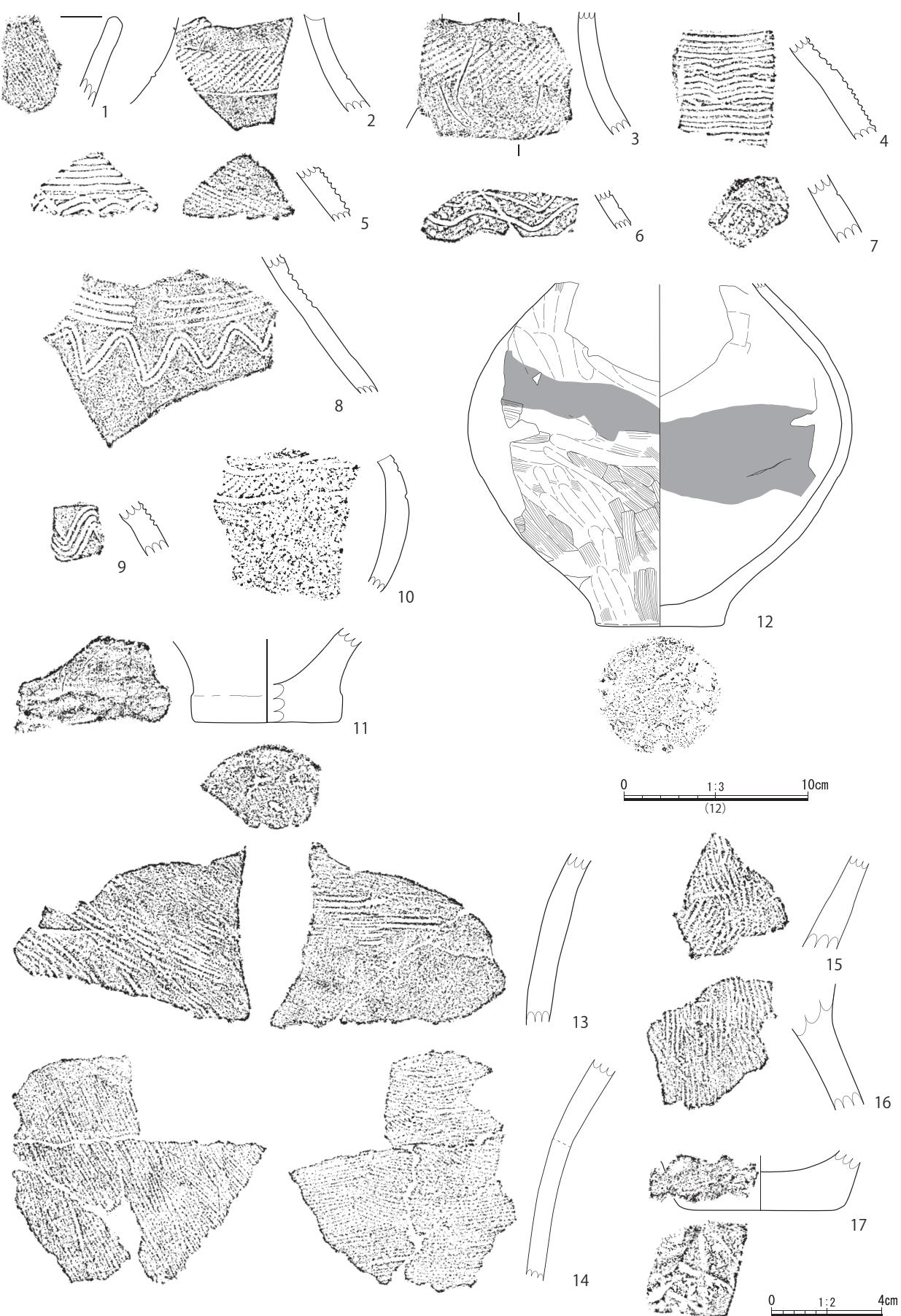
第342図 22T-001 住居跡出土遺物(1)



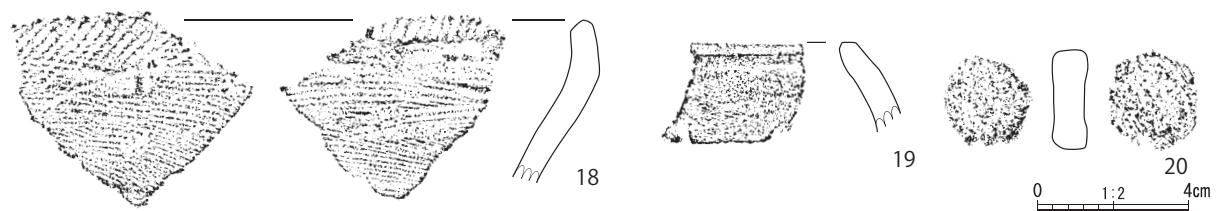
第343図 22T-001 住居跡出土遺物(2)



第344図 22T-001 住居跡出土遺物(3)



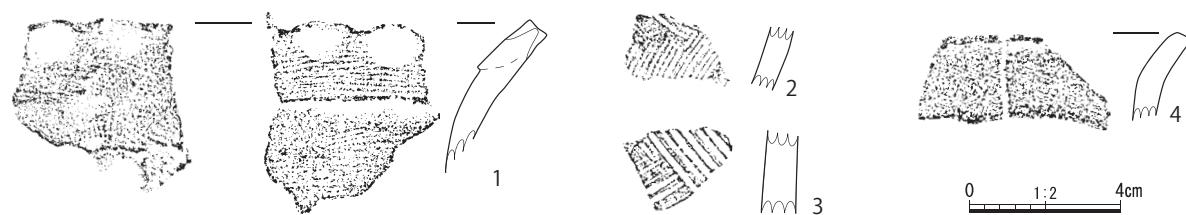
第345図 22T-002 住居跡出土遺物(1)



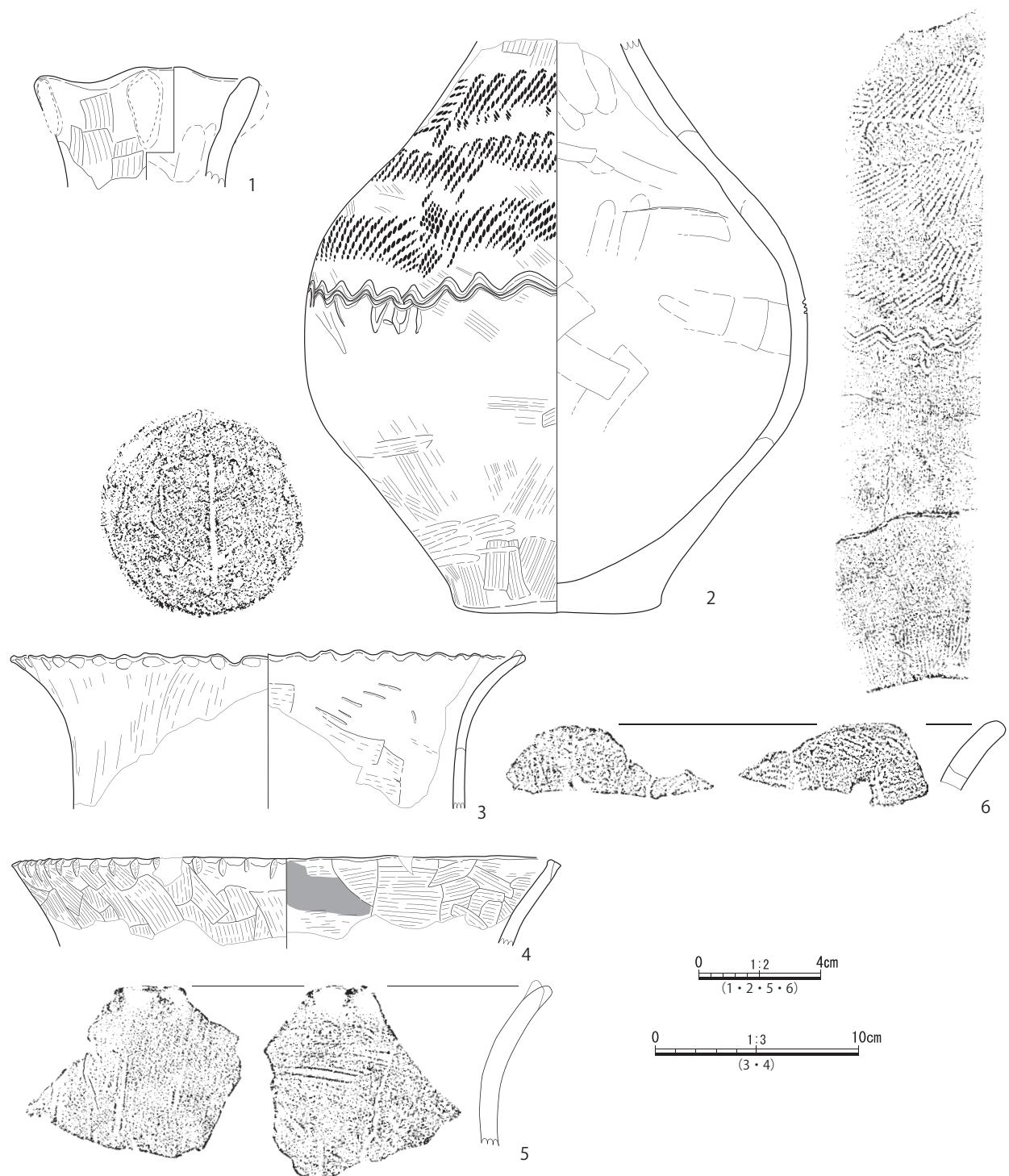
第346図 22T-002 住居跡出土遺物(2)



第347図 22T-003 住居跡出土遺物



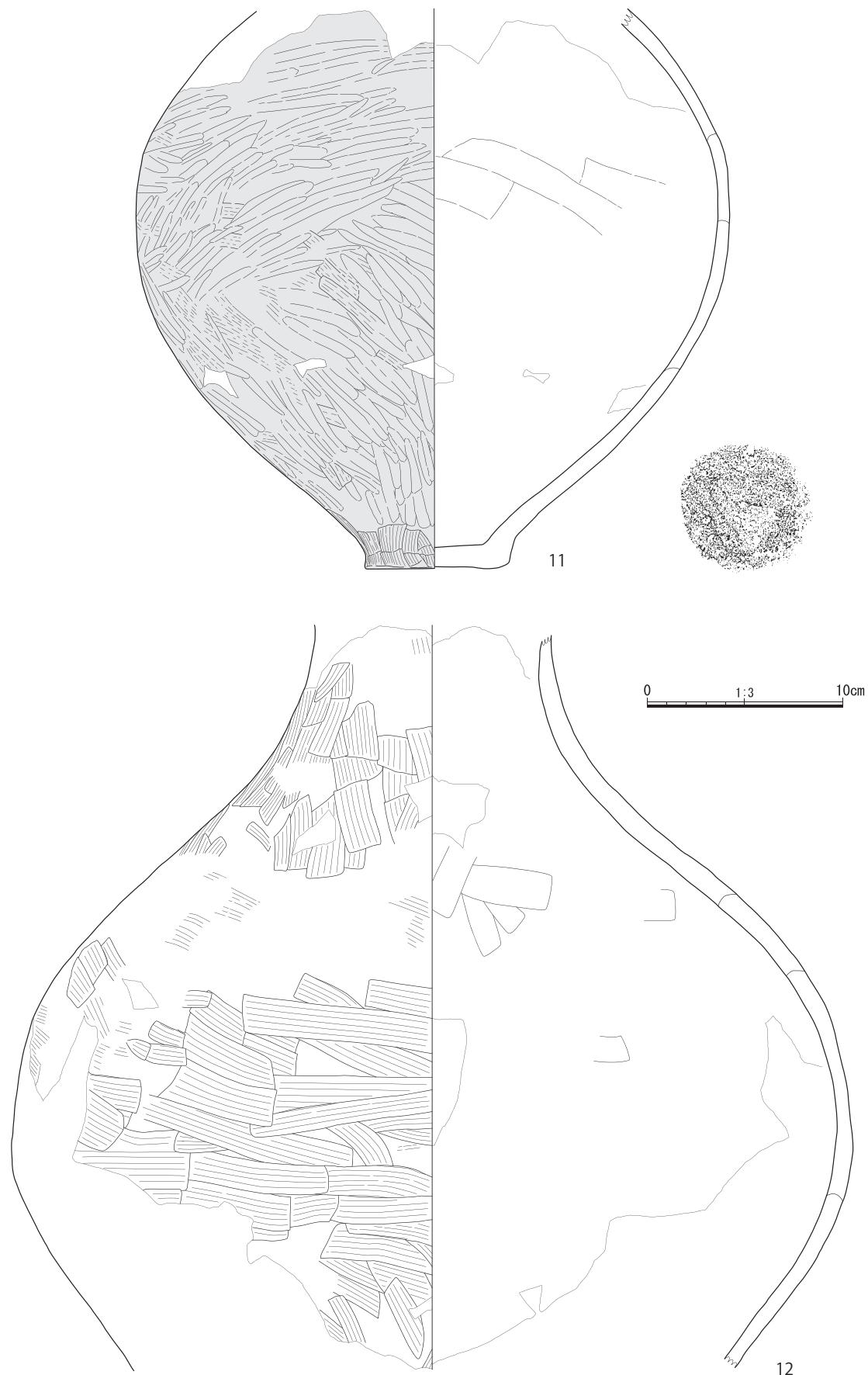
第348図 22T-004 住居跡出土遺物



第349図 22T-006 土坑出土遺物(1)



第350図 22T-006 土坑出土遺物(2)



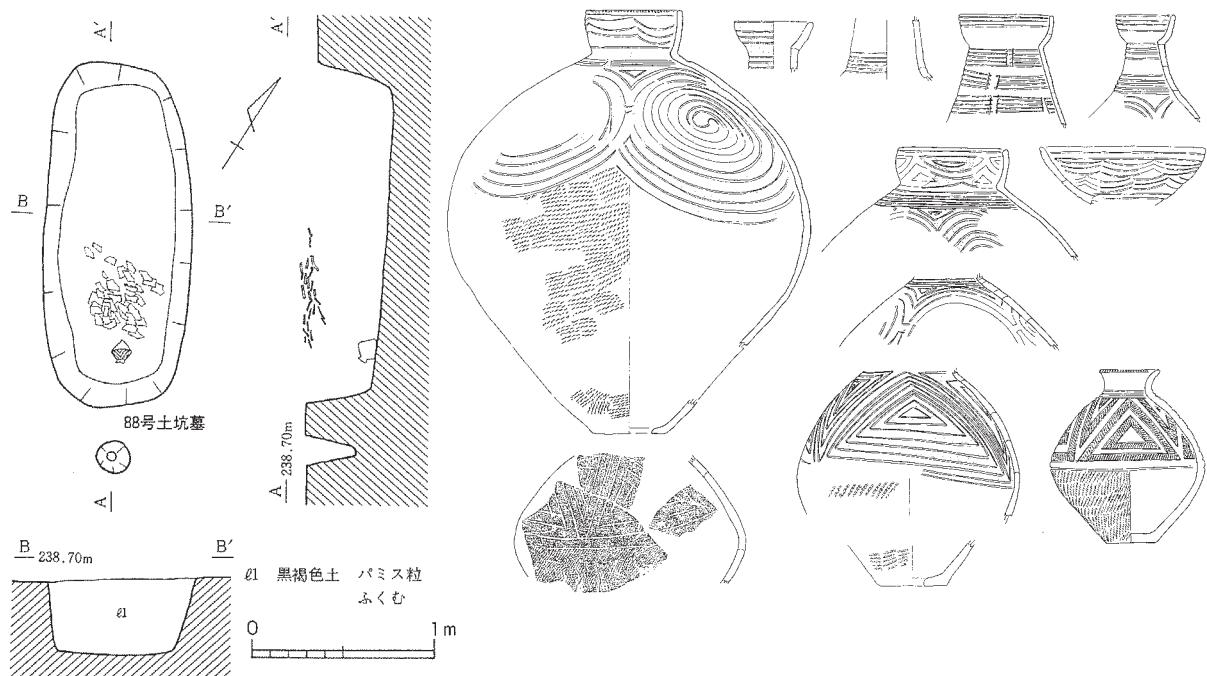
第351図 22T-006 土坑出土遺物(3)



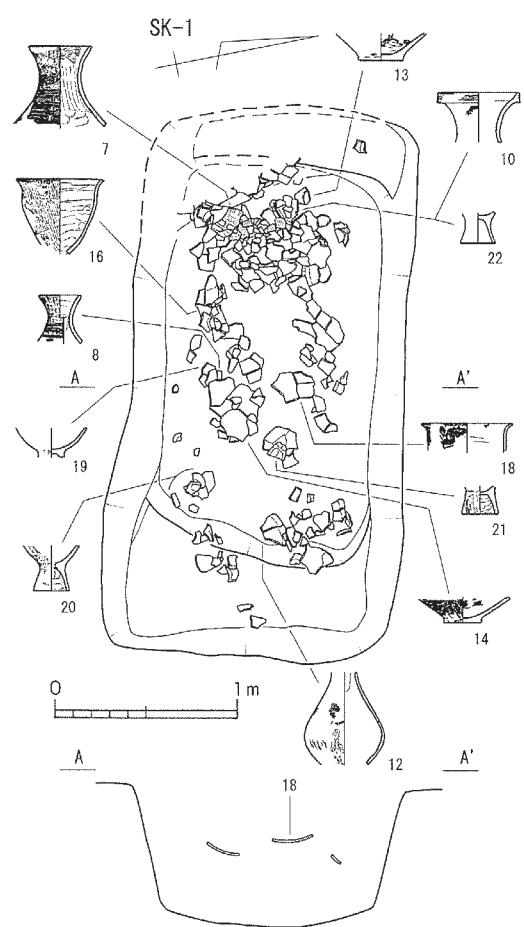
第352図 22T-006 土坑出土遺物(4)



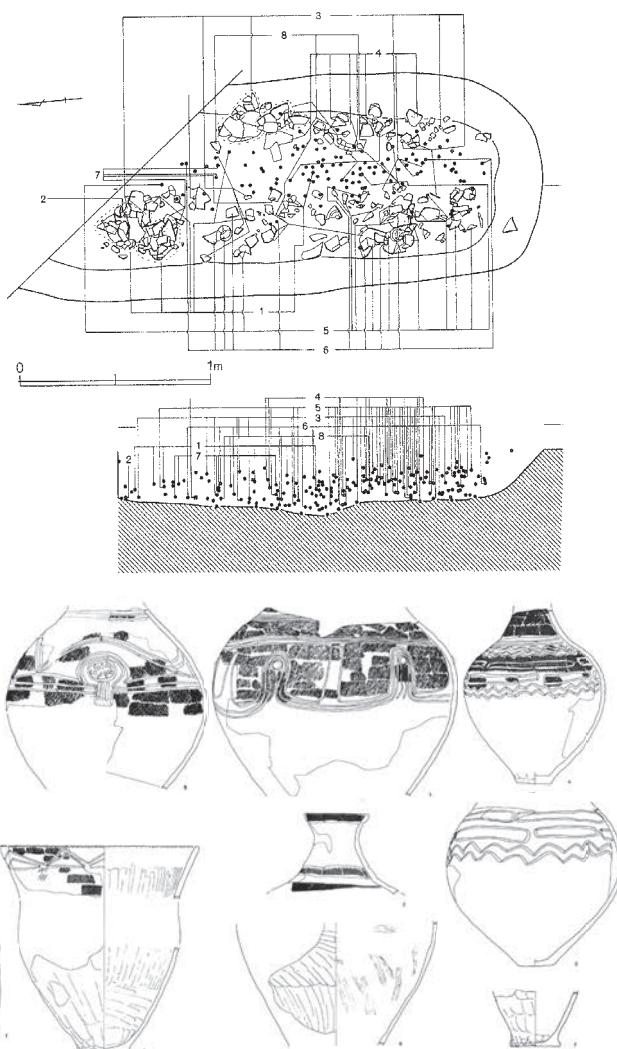
第353図 22T-008 住居跡出土遺物、22T 以外出土弥生土器



福島県会津若松市 一ノ堰 B 遺跡
第 88 号土坑墓 (福島県教委 1988)



静岡県菊川市 古川遺跡
SK-1 (菊川市教委 2019)



埼玉県熊谷市・行田市 小敷田遺跡
第 44 号土坑 (埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991)

第354図 22T-006 土坑の比較事例

第6節 その他の時代

これまでの調査で検出した縄文時代・弥生時代以外の時代の遺構は、奈良・平安時代(取掛西IX期)の住居跡が3軒、近世(取掛西X期)の掘立柱建物跡1棟である。このほか、遺跡南部の道路沿いで近世の溝跡も検出している(19T・26T)。

5次 SI-001(第355・356図)

5次調査地点のほぼ中央部、SI-002の北側で検出した。他の遺構との重複は認められない。規模は南北2.8m、東西3.9mで長方形を呈する。確認面から床面までの深さは28cm、カマドを基準とする主軸方位はN-44°-Wであった。東壁には張り出し部が認められる。壁溝はカマド周辺を除いて全周する。床面の硬化は認められない。掘方は西部の掘り込みが深く、貼床も厚い。床面上の広範囲に焼土及び炭化物層が確認されたため調査所見では焼失住居の可能性が示されているが、構築材等の出土は認められない。出土遺物はカマド内及びその周辺から集中して出土しているが極めて少ない。第356図1は土師器壺である。口縁部はロクロナデ、体部下端は回転ヘラ削り。底部は回転糸切り後未調整。2は須恵器甕である。口縁部は肥厚する。胴部は平行タタキ目で下端を横位ヘラ削り。下総産と推定される。また、破碎された状態で出土したため接合できず図示できなかったが、2と同一個体と考えられる須恵器甕の底部破片がカマド内を中心で出土している。3は土師器甕である。口唇部は摘み出され、口縁部は横ナデされる。胴部上半は縦位ヘラ削り、下半は横位ヘラ削りが施される。底部には木葉痕が認められる。胴部中位にはカマド構築材が付着する。

出土した遺物から、時期は取掛西IX期(9世紀後半)と考えられる。

10T-006住居跡(第355・356図)

8次調査時に10Tの拡張区南西端で検出した。10T-005住居跡(取掛西II期)と重複し、新旧関係は10T-006住居跡が新しい。平面形態は方形を呈すると考えられ、規模は南北方向で3.6mを測る。覆土は黒褐色土が堆積し、東壁のほぼ中央部にカマドが設置される。平面形態を確認したのみで精査は実施していない。

図示した遺物は1点である。1は土師器壺である。口径は復元値で114mm、底径は76mm、器高は36mm。口縁部はロクロナデ、体部下端は回転ヘラ削り、底部は回転糸切り後周縁部を回転ヘラ削り。

出土した遺物から、時期は取掛西IX期(9世紀前半)と考えられる。

11T-003住居跡(第355・356図)

6次調査時に11Tの南部のII層上面で検出した。他の遺構との重複はなし。平面形態は方形を呈すると考えられ、規模は南北方向でおよそ3.3mを測る。覆土は黒褐色土が堆積し、北壁のほぼ中央部にカマドが設置される。平面形態を確認したのみで精査は実施していない。

図示した遺物は2点である。1・2は土師器甕である。1は小片のため明確ではないが、武藏型甕の口縁部破片と考えられる。

出土遺物が少なく時期の特定は難しい。概要報告書では古墳時代の住居跡と記載したが、あらためて出土遺物を確認したところ第356図1の口縁部破片が認められた。遺構の規模も考慮すると、時期は取掛け西IX期(8~9世紀)と考えられる。

12T-004 掘立柱建物跡(第357図)

7次調査時に12T拡張区の北部で検出した。12T-001住居跡(取掛西Ⅱ期)と重複し、新旧関係は12T-004が新しい。主屋が桁行5.1m、梁行3.6mとなる東西棟で、比較的小規模の掘立柱建物跡である。柱穴の一部にはヤマトシジミ片が含まれているものがあった。柱穴は平面形態を確認したのみで精査は実施していない。

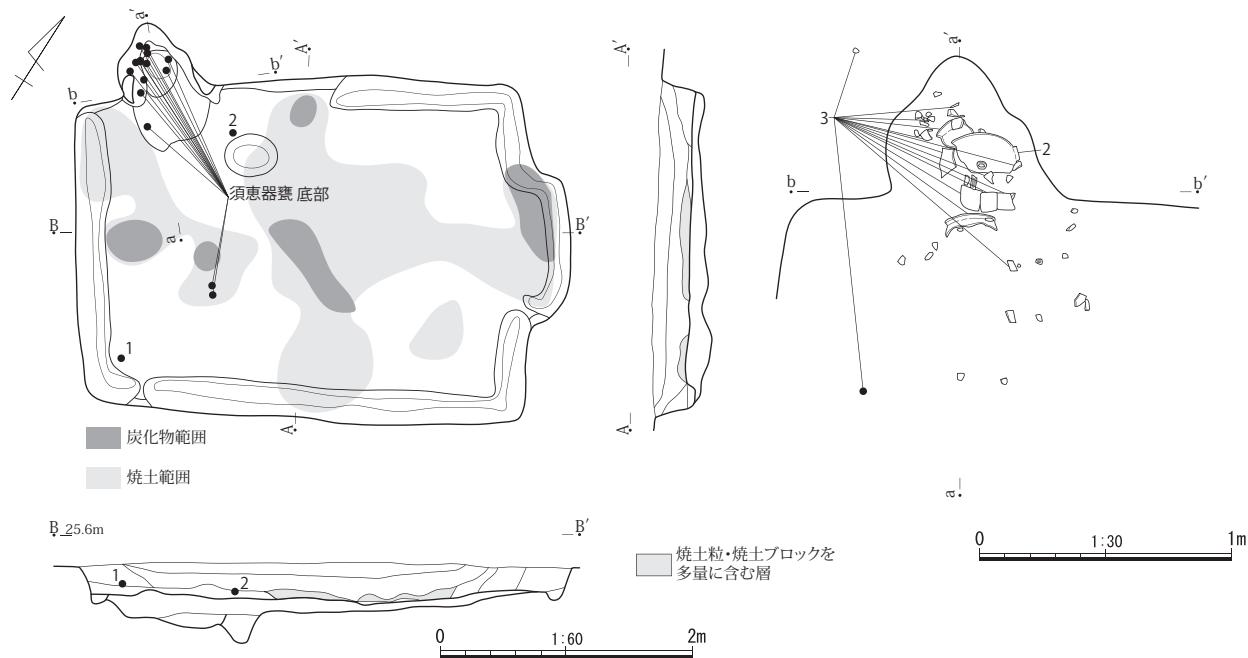
遺物の図示はしていないが、多くの近世陶磁器が出土した。主体となるのは瀬戸・美濃産の陶器と肥前産の磁器だが、瀬戸・美濃産の磁器も少量ながら認められた。

出土した遺物の時期から、取掛西X期(19世紀)と考えられる。

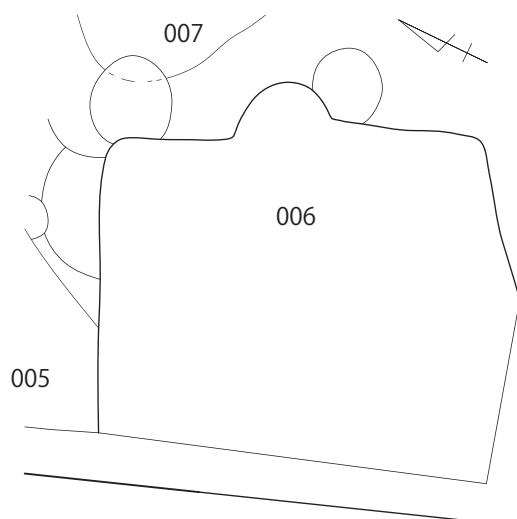
遺構外出土遺物(第356図)

1は黒褐色を呈するガラス製の小玉である。25T-002土坑の覆土中から出土したが、明らかに遺構に伴わない遺物であるため、ここに掲載した。直径2.2mm、厚さ1.6mm、孔径1.0mm。帰属時期は不明である。

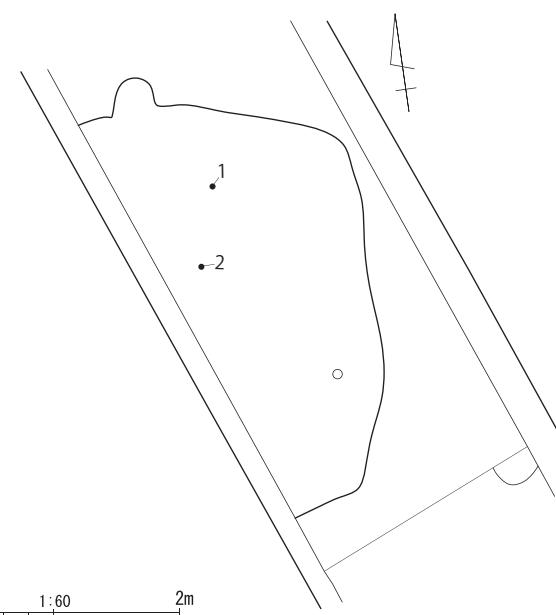
5次 SI-001



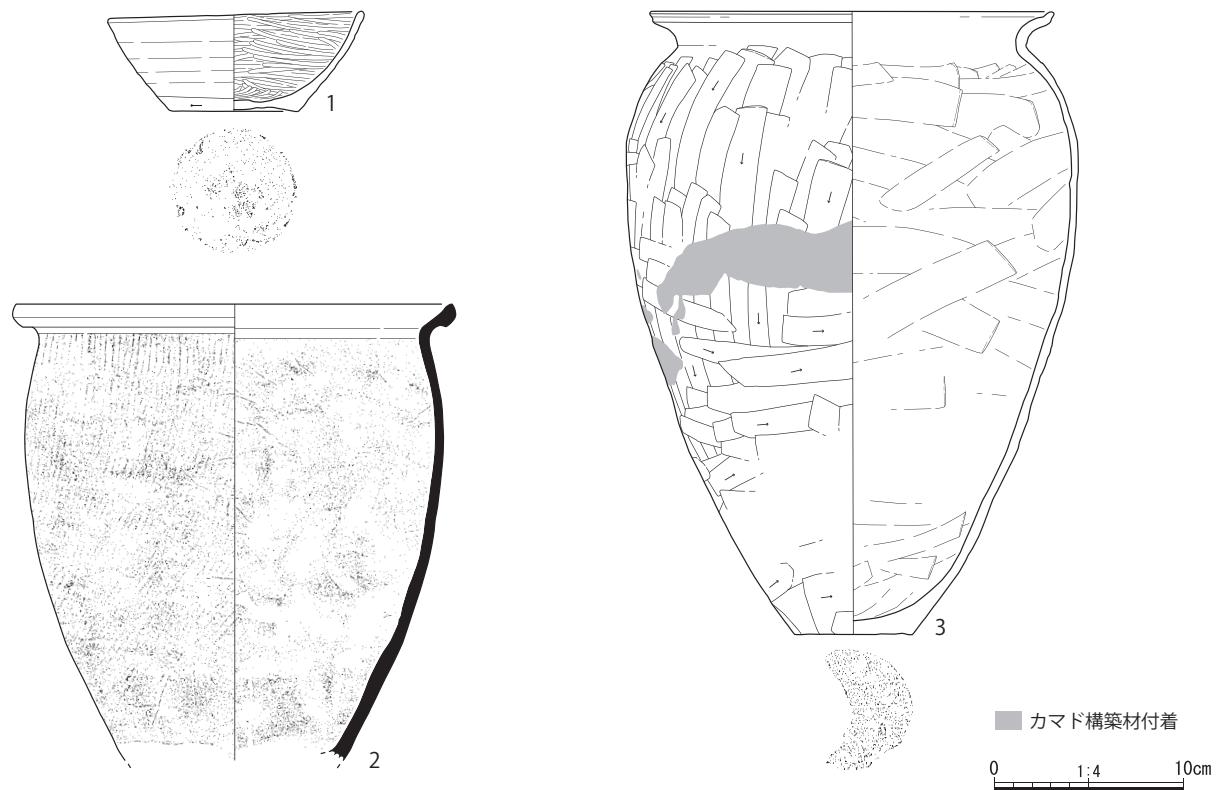
10T-006 住居跡



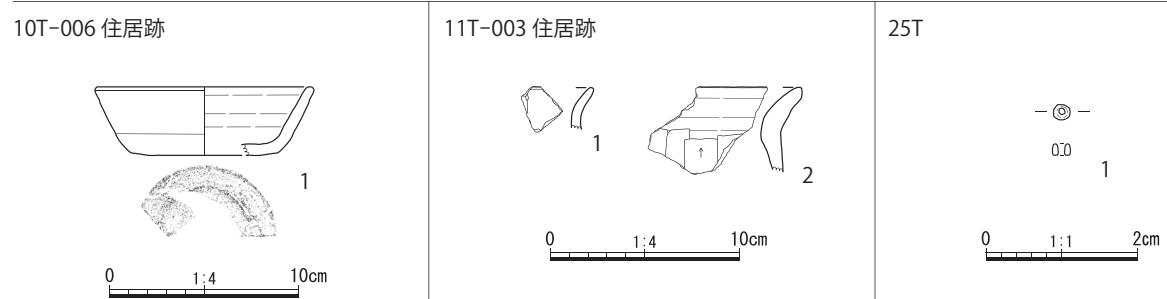
11T-003 住居跡



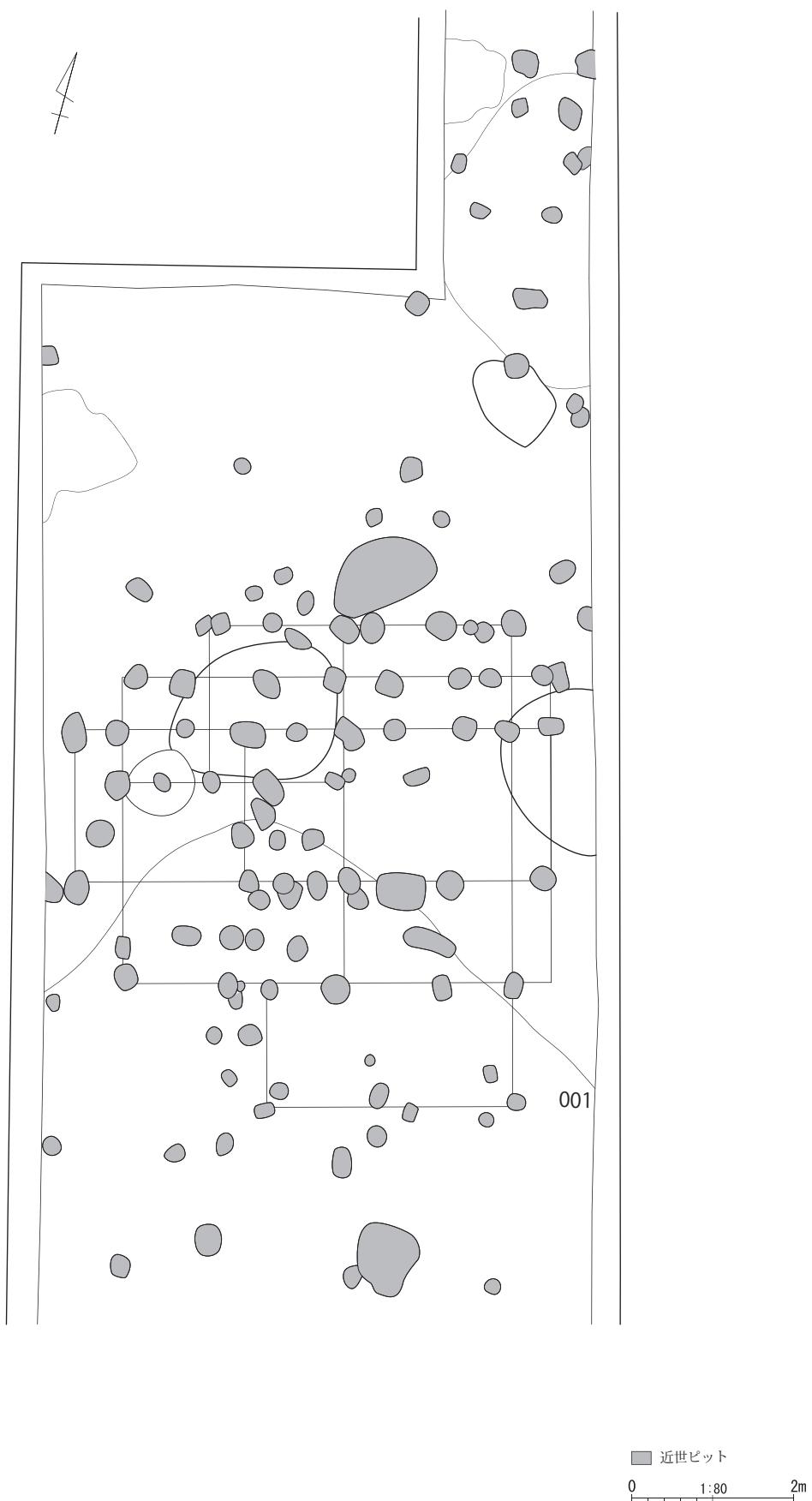
第355図 奈良～平安時代住居跡



5次 SI-001



第356図 奈良～平安時代出土遺物



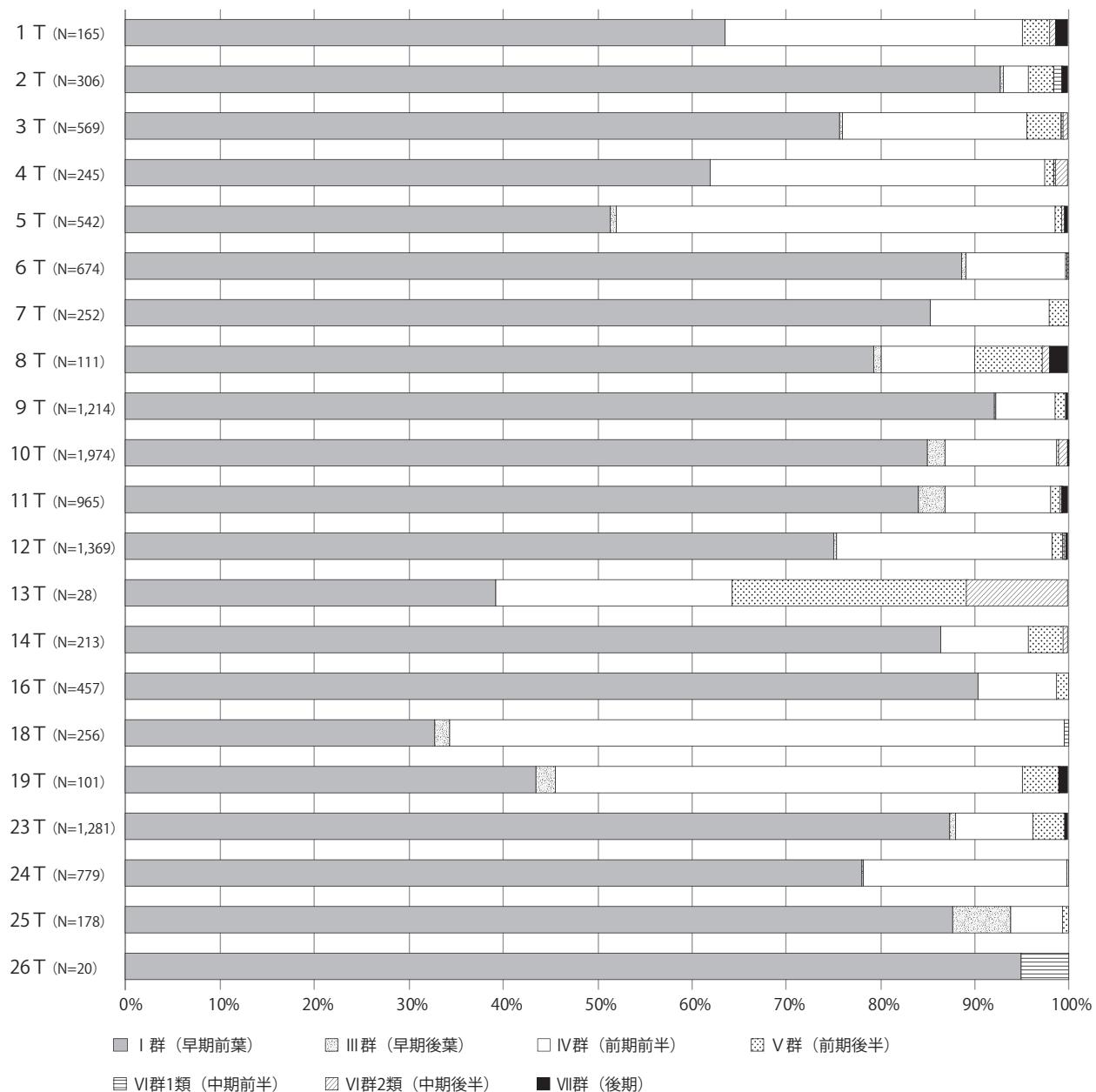
第357図 12T-004 掘立柱建物跡

第7節 出土遺物の特徴

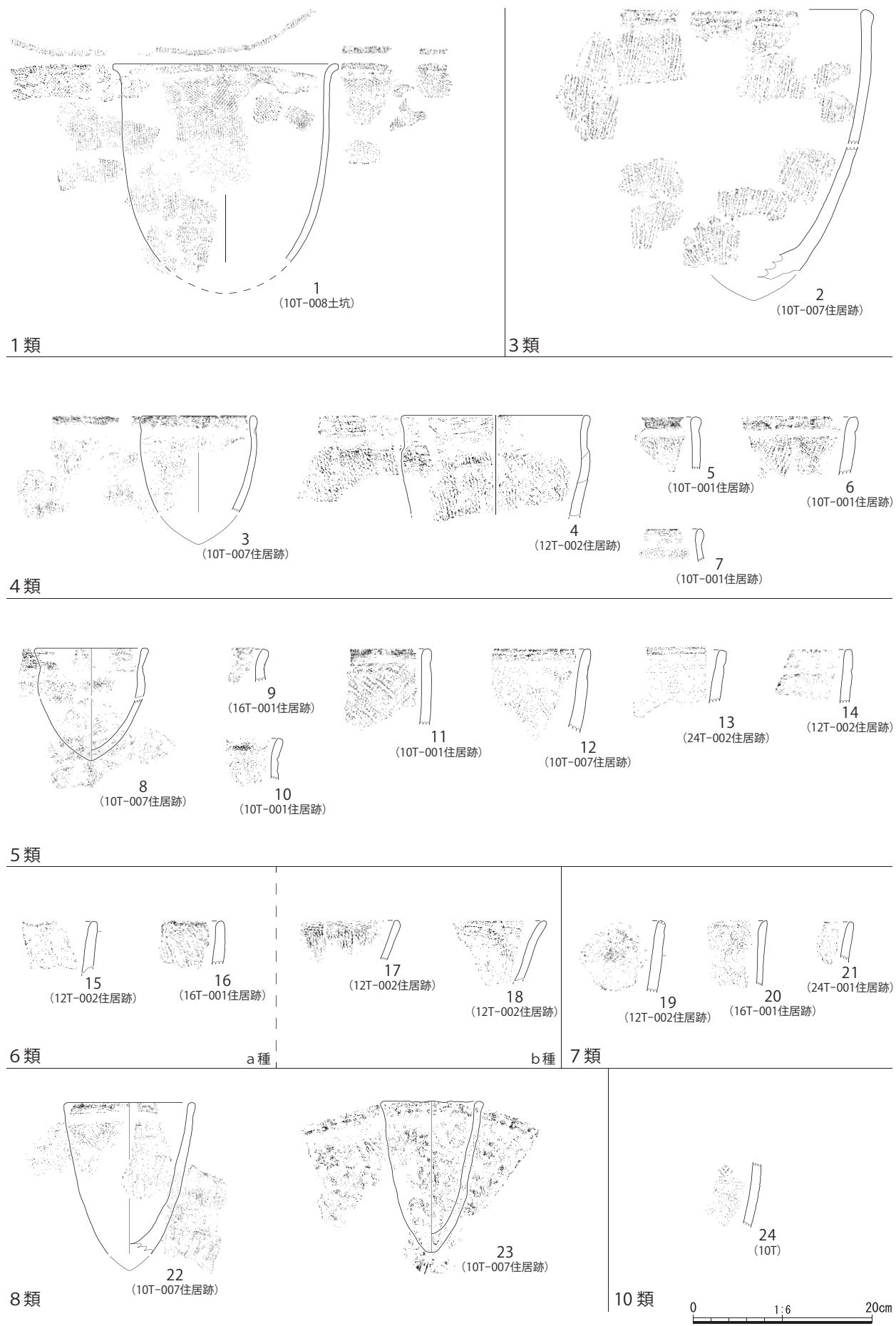
第1項 土器

これまでの調査で確認した縄文土器は、分布調査分や分類できなかったものも含めるとおよそ27,000点であり、縄文時代早期から後期にかけての土器が確認されている。最古の土器型式は井草式、最新の土器型式は後期安行式と考えられる。第358図には6～8次調査の各トレンチから出土した土器群の出土傾向を示した。ただし、出土点数が20点未満のトレンチに関しては除外している。

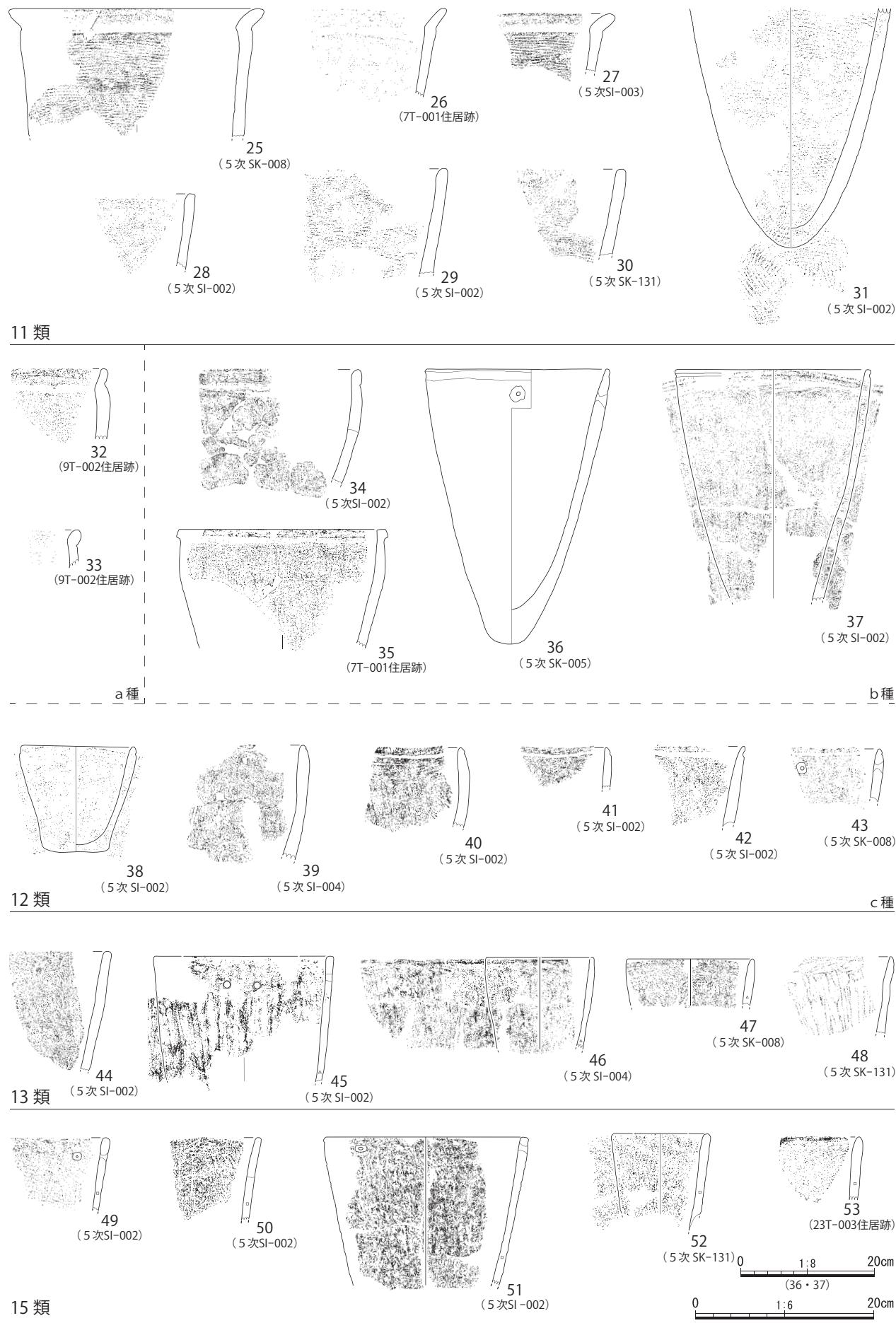
いずれのトレンチでもI群土器(撫糸文系土器群)が出土土器の主体であることは間違いないが、前期前半の住居跡を検出した5・18・19TではIV群土器(前期前半)の占める割合が高い。1・4TでもIV群土器の出土量が目立つが、1Tについてはこの時期の住居跡を複数検出した4次調査地点に隣接することが影響したと考えられる。このほかIII群土器(条痕文系土器群)は、10・11・25Tなど遺跡中央部のトレンチでの出土が目立つものの、全体に占める割合は少ない。



第358図 I～VII群土器出土量比（トレンチ別）



第359図 I群土器集成図 (1)



第360図 I群土器集成図（2）

以上のように、取掛西貝塚で出土した縄文土器は早期前葉のものが全体の約7割と大部分を占める状況であった。そこで、I群土器を中心にその分布傾向などを以下にまとめる。

第359～360図にはI群土器のうち代表的なものを図示した。分類基準については、第3章第1節を参照願いたい。

第359図1に代表される1類は、全体に占める割合は低いものの、10T-008土坑からまとまった出土が認められる。出土が確認されたトレンチは10～12・14・16・24～26Tであり、遺跡中央部に集中する傾向を示している。この傾向は第359図2のような3類でも同様であるが、取掛西貝塚では1～3類土器の出土は微々たる量である(第361図上段)。

4類はその多くが新しい様相を示すものであり、古段階に相当するものはわずかである(第359図3)。胴部の施文はほとんどが縦位の撲糸文となるが、まれに単節縄文を異方向施文したものも認められる(第359図6)。出土量は比較的多く、10～12・16Tでまとまった量の出土が認められた。

5類は口縁部が屈曲するもの(第359図8～12)と、直線的なもの(第359図13・14)が認められ、峰村篤氏は前者を形態区分型、後者を装飾区分型としている(峰村2009a,b)。口縁部が屈曲するものは10T-001住居跡や10T-007住居跡、16T-001住居跡などで確認された。出土量はわずかに4類より多い。4類と同じく10～12・16Tでの出土点数が多いが、24Tでの出土も目立つ。10T-007住居跡や16T-001住居跡で3類と共に伴しており、これらの住居跡では口縁部が屈曲するものが目立った。

このように、4類と5類は類似した出土傾向を示しており、遺跡中央部から西部にかけてその分布が集中する。これは、4・5類の胴部破片が主体となる9類や6～8類の出土分布についても同様である(第361図中段・下段)。特に9類は、トレンチ毎の各類の出土点数組成(第363図)をみると、4・5次調査地点を含め遺跡東部ではほとんど認められないことが明確である。また、4～9類はいずれも遺存状態の良い個体は少なく、接合率も低い。

住居跡における出土状況を確認すると、4類と5類の一方が単独で出土するような状況は認められない。また、12T-002住居跡のように、わずかながら12類a種と共に伴する例も認められ、これらの住居跡では14類の出土点数も多い傾向にあった。

押型文が施文される10類は3点確認されており、10・12・14Tで各1点出土した。出土トレンチの組成からは4・5類に伴うものと推測され、押型文と共に単節縄文も施されるような在地化されたものが認められた(第359図24)。

横走する撲糸文が特徴である11類(第360図25～31)は、分布圏の中心が三浦半島から多摩丘陵周辺であり、千葉県内、特に北総地域での出土は希であったが、取掛西貝塚では胴部破片も含め300点以上が確認できた。他の各類にくらべ、有色鉱物(角閃石・輝石など)を含む個体が多いことも特徴のひとつである。出土状況を確認すると、10T以西でもわずかに出土が認められるが、9Tより東側での出土量が多い(第362図上段)。7T-001住居跡や5次SI-002、5次SK-008などから比較的大型の破片が出土している。

また、住居跡ごとの出土状況を確認すると、口縁部が屈曲するものと直線的なものがそれぞれ単独で特定の遺構に集中するような状況は認められなかった。9T-002住居跡では共に4・5類が出土しているが、これは9T-001住居跡との重複の影響と考えられ、基本的には4・5類とは共伴しないと考えられる。まとまった量の出土が認められた5次SI-002や5次SI-004では、12類や13類が伴出しており、同様の出土状況を示す住居跡が多い。

12類は口唇部が角頭状を呈するb種(第360図34～37)の占める割合が高く、次いで口唇部が尖頭



第361図 I群土器出土分布図（類別）（1）

状のc種(第360図38～43)が多い状況である。口唇部が円頭状のa種(第360図32・33)は最も少なく、その出土は遺跡中央部に散在する傾向にあり、本調査を実施した5次調査地点でもほとんど確認できていない。12類の主体となるb種は、5次SI-002・004、5次SK-008でまとまった量が出土している。c種については、9Tより東側に散在する傾向にある。種別ごとに分布状況にやや差があるものの、全体的には11類と同じく遺跡中央部より東側に集中し、4～9類とは分布域が異なる傾向を示している。特に5次調査地点からの出土が際立ち、遺存状態の良好な個体も多い。

また、第6表により住居跡ごとの出土状況を確認すると、取掛西貝塚では東京都武藏台遺跡や滝坂遺跡のように12類が単独で組成の主体となるような状況は認められず、基本的に一定量の11類や13類が共伴する。

13類も口唇部形態により3種に細別したが、それぞれの出土量に大きな差は認められない。しかし、5次調査地点に限るとb種の占める割合が高くなる。出土状況を確認すると9～11・23・24Tでの出土が目立つが、遺跡全体に散在する傾向が認められる(第362図中段)。4～9類の分布状況を踏まえると、口縁部形態からは分類できなかったが8類とすべきものが一定量含まれる可能性も否定できない。

14類とした無文の胴部破片は出土量が最多となり、13類と同様に遺跡全体に広く分布する(第362図下段)。このことから、8類の胴部破片がここに含まれる可能性は高いものの、出土点数は遺跡西部に比べて東部の方が多い、その多くは12類や13類の胴部破片と考えて良いだろう。

15類は6・23Tに集中して分布する状況が明瞭である(第362図中段)。第363図でその組成を確認すると、4次調査地点でも組成の主体を占める状況であり、1・2・6・23Tなど遺跡東部に集中する傾向を示している。8・9Tでも少数ながら出土を確認しているが、これより西側のトレンチでの出土はほぼ認められない。

また、第6表により住居跡ごとの出土状況を確認すると、まとまった量の出土が認められた6T-001住居跡や23T-001～003住居跡では、12類が伴出してもその点数はわずかであり、13類についても客観的な状況であった。

以上、取掛西貝塚におけるI群土器の様相を確認してきたが、第363図にその各類の組成を示した。ただし、出土点数が10点に満たないトレンチについては除外している。上段が遺跡東部にあたる24T以東のトレンチおよび調査区、下段が遺跡西部のトレンチである。

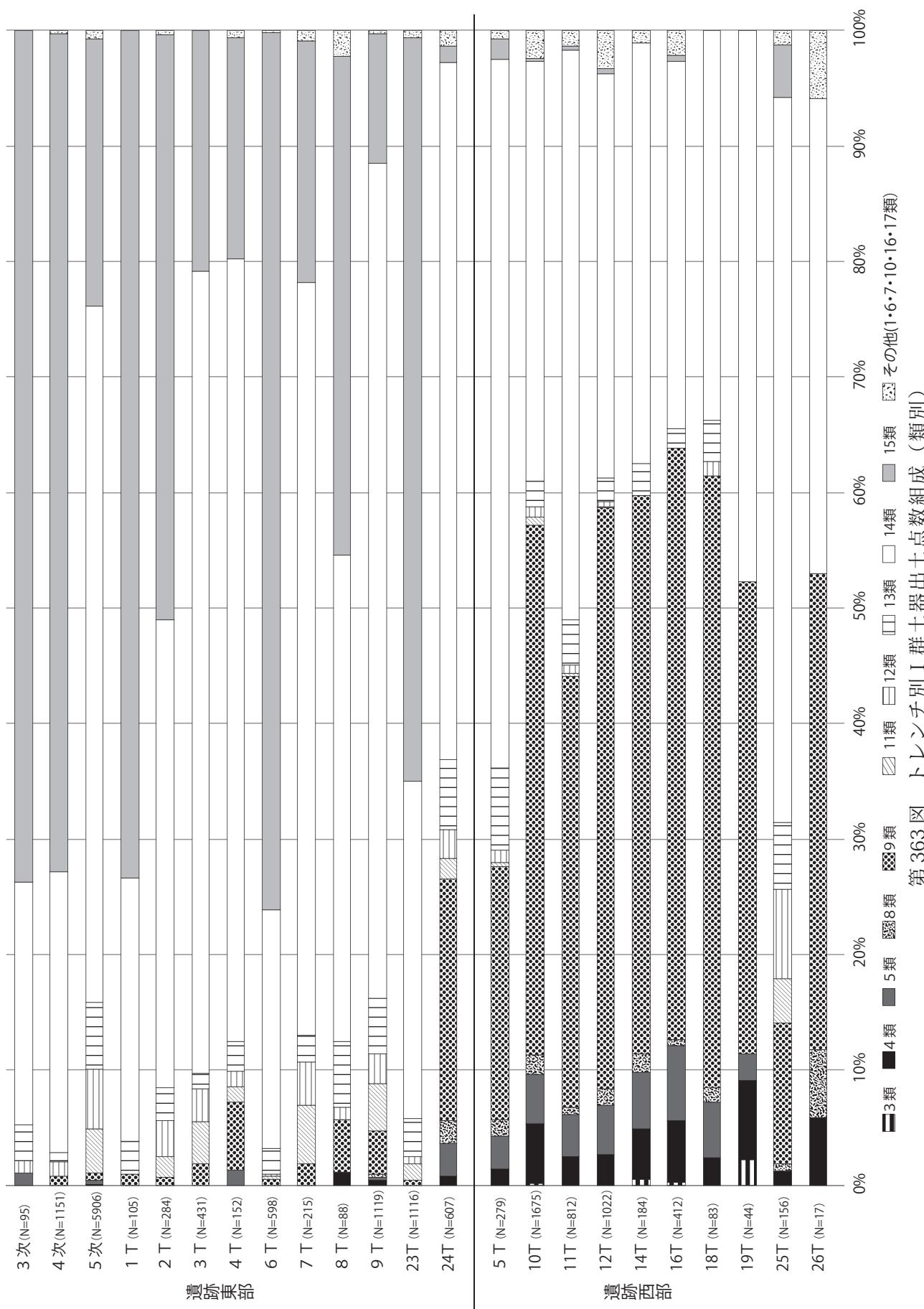
遺跡西部のトレンチでは4～9類の占める割合が高く、東部では11～15類の占める割合が高いことが明瞭である。特に15類は6Tや23T等に偏在する傾向が認められた。このように、取掛西貝塚では各類の土器により分布域が異なる状況を確認することができた。

参考文献

- 高麗 正 1988 『滝坂遺跡 東京都三鷹市中原 滝坂遺跡発掘調査報告書』三鷹市教育委員会
 坂詰秀一他 1994 『武藏台遺跡』II－資料編2－ 都立府中病院内遺跡調査会
 坂詰秀一他 1999 『武藏台遺跡』IV 都立府中病院内遺跡調査会
 原田昌幸 1991 『撲糸文系土器様式』ニュー・サイエンス社
 峰村 篤 2009a 「花輪台I式土器に関する基礎的研究(1)－印旛沼西岸遺跡群を中心とする検討－」『日々の考古学2』六一書房
 峰村 篤 2009b 「花輪台I式土器に関する基礎的研究(2)－千葉県を中心とする撲糸文土器後半の変遷－」『千葉縄文研究』3 千葉縄文研究会



第362図 I群土器出土分布図(類別)(2)



第6表 主要遺構別I群土器出土点数

遺構	1類	3類	4類	5類	6類		9類			10類			11類			12類			13類			14類			15類			16類			合計	
					a種	b種	a種	b種	c種	a種	b種	c種	a種	b種	c種	a種	b種	c種	a種	b種	c種	a種	b種	c種	a種	b種	c種	a種	b種	c種		
5次SI-002			1	2			9	1					44	58	30	10	23	65	14	1252	149	2	14	1674								
5次SI-003							2	1					9	8	4	6	1	85	10													134
5次SI-004			3	1			2	5	3				20	1	14	8	8	22	5	289	28	2	1	420								
5次SI-006			6										1																			24
5次SI-008													1	1	2					1	7	4									16	
5次SI-009													4		1					1	1										7	
5次SI-010													1	2					1	3	4	103	120								236	
5次SI-011																																35
5次SI-012													1				1			1	31	7									41	
5次SI-015																		1			9	1									11	
5次SK-005																			3	4	3		1								41	
5次SK-008			4	1			3						36	21	13	8	14	9	7	275	33		3								427	
5次SK-114			1										5		2	1	5	2	2	48	6		1								73	
5次SK-131													15			4	1	4	4	53	28									110		
5T-005 住居跡													2	3			1				1	3									10	
6T-001 住居跡													1	1			1		2	1	3	72	285									366
7T-001 住居跡																9	4		2	1	1	34	5		1							57
9T-001 住居跡			1										3	1		1	1	2	2	48	6									77		
9T-002 住居跡			4	2			2	10	5	1	2		17	2	3	9	8	9	1	137	4		1								217	
10T-001 住居跡			5	35	30	2	1	8	187	66	4	1	5	7	1	2	1	4	4	5	120	1									489	
10T-004 住居跡							2			2	3	2							1			8									18	
10T-005 住居跡			1	4	4					14	3					1			1			8									36	
10T-007 住居跡			1	3	8	9				4	52	11		1			1	1	1	37										128		
10T-008 土坑			1										1								1									3		
12T-001 住居跡			1				1	1	1		20	8										20		1							53	
12T-002 住居跡			14	24	9	2	9	158	63	1	1	1				4	5	141	2		28	64	1	1							438	
16T-001 住居跡			1	1	13	15	3	1	2	61	26	1				1	2		40										168			
19T-002 住居跡												1	1							3										5		
19T-003 住居跡												1									4										6	
23T-001 住居跡																		1		2	2	28	64	1	1							99
23T-002 住居跡																		1	1	1	17	33									53	
23T-003 住居跡																		1	5	42	112		1								170	
23T-004 住居跡																					9	2									14	
24T-001 住居跡			1	4			1	9	28	7		1				1	5	4	6	153	1		3							240		
24T-002 住居跡				2			1	5												13										22		
24T-003 住居跡			1							6	3	1								1	11									23		
総合計	10	4	87	105	17	4	5	39	575	207	5	5	10	198	11	123	83	32	88	146	66	3151	934	5	31	5941						

第2項 石器

調査により出土した石器は約2,700点と、調査面積を考慮すると極めて多く、礫類(礫・破碎礫・礫片)を含めると8,000点を超える(第7表)。石器の分類については、『取掛西貝塚(5)II』で示した石器器種分類にしたがった。また、最終的に磨石類など別の器種として利用される石器が多かったため、判別できるかぎり元の器種に分類している。最終的な利用器種に関しては、石器観察表(添付DVDに収録)に記載した。また、剥片石器と礫石器2,161点、礫類および小礫5,671点について柴田徹氏による石材同定を行った(第5章第5節)。

第7表 遺構別石器器種出土点数

遺構番号	ナイフ形石器?	尖頭器	石鎌	搔器	削器	楔形石器	石錐	抉入石器	不明石器	R F L	U F L	U C H	石核	剥片	碎片	原石	礫斧	礫器	スタンプ形石器	三角錐形石器	敲石	石皿	台石	砥石	磨石	磨き石	軽石製品	磨製石斧	礫類	小礫	合計
5次SI-002			6	2	6					2	2		3	5	1		6	1	4		2	4	8	4	16	5		58	11	146	
5次SI-003																	1	1					1	2	2			9	3	19	
5次SI-004							1		1					1	1								1	1	2	4		29	3	44	
5次SI-006																												6	9	15	
5次SI-008																												1		1	
5次SI-010				1						1	1			2	1				1	1		1	1	4			83	18	114		
5次SI-011														1													4	2	8		
5次SI-012																												1		1	
5次SI-015		1																										1	2	4	
5次SK-005							1																				6	2	9		
5次SK-008				1													1	3					1	8		1	14	3	33		
5次SK-014														2			1	1					2			16	2	24			
5次SK-131		1												1	2		2			2		1	4		1	71	3	87			
5次SK他			1											1	2		2					1	5			39	17	68			
5次SH				1										2				1					2			35	42	83			
5次遺構外		3	2	5	4		4		1	3	3	1		6		10	8	2	1	2	20	4	1	1	358	40	479				
5次確認調査	1		1	1			1	1	1	1	4			1	4	3	3	1	2	2	11				105	38	178				
分布調査		4	2	1	17	5	2	8		1	74	15	1	5	1	4					5	3	41	1	190						
5T-005 住居跡		1																									2		3		
6T-001 住居跡														1	1		1	2								51	37	99			
7T-001 住居跡																			2	1	1	1	2			9		17			
9T-001 住居跡							2																1			10		13			
9T-002 住居跡		1	1	2				1	1		1	1		2									1	2		22		35			
10T-001 住居跡		7	2	1	6		3	5	18	434	1			1	1	2					2	2	2		94	255	836				
10T-004 住居跡						1		1	134		1														8	37	182				
10T-005 住居跡							1		59								1									15	21	97			
10T-007 住居跡		1				2	1	1	3	155															61	164	388				
12T-001 住居跡																1							2			10	2	15			
12T-002 住居跡														3								6	2		120	72	203				
16T-001 住居跡													1	1				1		1	1	1			29	6	41				
19T-002 住居跡													1													1		2			
19T-003 住居跡						2	1		4																	5		12			
23T-001 住居跡					1			2	9						1						4				19	3	39				
23T-002 住居跡							1															1				6		8			
23T-003 住居跡													1			1	1					1			22	4	30				
23T-004 住居跡													1	1												9		11			
24T-001 住居跡		7	12	1	5	6	2	2	26	508					2	2	3				2				42	38	658				
24T-002 住居跡								1		2	13															5	2	23			
24T-003 住居跡						1			1													1				8	17	29			
1T						1		1			1	1										1	1			32		38			
2T							3	1					1			1						3				50		59			
3T		1		1			2						1		3	2						1	12		1	184		208			
4T		1																				2				35		38			
5T		2						1	2	1	1	2	4		1	1	1	1			2	8	2	9	2	84	15	139			
6T		1	1	2	1	1				2		2		2	2	2	6	1	6		3	15	1		151		197				
7T		2				2	1	5		3	2			1	1	3					1	8	1	1	86		117				
8T		1	1		2	1		1	1	1	2		3	1	5	2	1	1	2			50			145	7	197				
9T				4	1	1	3	2		4	3	4	7	5		1	9	1							466	270	865				
10T		5	1	7	1	9	5	2	7	26	36	1	2	3	6		1	3	9	4	1			421	268	742					
11T		2	1	1	4		2	8	2	11	4		1	1	2	1	6		2	4	1			104	31	146					
12T										6			2			1					2				84	90	177				
13T		1				1					1															97	26	128			
14T		1						1	1									1								2		4			
15T								1										1								66	19	92			
16T		2		1					1					1	1	2						1				7	3	10			
17T																											2		4		
18T				1							2											2	6		46	3	60				
19T										1	3	2				1						1	1		38	10	57				
20T					1										1								9			11					
21T																							1			1					
22T								2	1														6	8		17					
23T	1				1	1		4	8		2		5		1		1	10	1					167	40	244					
24T		6		6	2	7	4	1	3	18	8		1	1	1	2		2	4	2			97	70	235						
25T	1	3		1	1	1	1	10	120				2									1		57	27	226					
26T		1									18		1													14	12	46			
合計	1	4	59	6	12	76	7	27	4	65	45	22	32	254	1544	3	48	8	77	10	62	10	18	33	204	28	39	3	3926	1745	8372

出土した石器の内訳は、剥片石器が 2,161 点、礫石器が 541 点である。剥片や碎片などを除いた剥片石器は 360 点であり、剥片石器に比べ礫石器が多い。礫類は全体の約 6 割が被熱している状況であり、破碎した礫が約 2,000 点と礫類のほぼ半数を占める。5 次調査で有舌尖頭器が 1 点出土しているが、縄文時代早期以前の資料はわずかであった。また、確実に前期以降と判断できたものとして乳棒状の磨製石斧があげられるが、数点の出土にとどまる。耕作土中から出土した敲石や磨石類などの器種については前期以降のものとの区別が困難ではあるが、土器の出土状況から石器・礫類の大半は早期前葉のものと考えられ、礫斧やスタンプ形石器など特徴的な器種が目立った。

以下に、代表的な器種について、その特徴をまとめる。

石鏸：出土した全 59 点中 10 点は未成品と考えられる。チャート製のものが大部分を占める、黒曜石を利用したものは 8 点のみであった（第 5 章第 5 節）。時期的な出土傾向は認められなかった。10T や 24T での出土が目を引くが、これは石鏸の製作を行っていた可能性が高い 10T-001 住居跡や 24T-001 住居跡の存在を反映したものと考えられる。

第 364 図に石鏸のうち主なものをまとめた。基部形態は凹基、平基のものが多い。早期前葉に特徴的な「五角形鏸」や「三角形鏸」が目立ち、器面を研磨した局部磨製石鏸も少なくない。また、厚さの平均が 3.1mm と全体的に薄いものが多く、前期の住居跡から出土した 1 のような厚さが 4 mm を超えるものは少ない傾向にあった。

楔形石器：全体で 76 点が出土した。剥片や小型扁平礫を素材として、上下端で対となる剥離痕（潰れ痕）が認められるものを分類した。第 365・366 図に楔形石器のうち主なものをまとめたが、1～12 のような両極打法により得られたと考えられる剥片・石核についても、分類困難な個体があるためここに含めている。石材は石鏸と同様にチャートが主体であり、24T からの出土が最も多い。

抉入石器：全体で 27 点が出土した。このうち 6 点が 10T-001 住居跡から出土している。当初、石坂雅樹氏による報告（石坂 2019）からツノガイ類製品の製作との関連を考えたが、分布傾向からも時期的傾向からも、その関わりを裏付けることはできなかった。

礫斧：全体で 48 点が出土した。調査面積を考慮すると比較的多い点数といえるであろう。10T より西側で出土したものは明らかに少数であり、土器の出土状況を考慮すると、その多くは取掛西Ⅲ～Ⅳ期に属するものと考えられる。使用石材は、緑色凝灰岩類など神奈川県方面との関わりを示すものの占める割合が高い（第 5 章第 5 節）。同一石材の礫片等の出土がほとんど認められないことから、現時点ではこれらの石材を使用した礫斧が遺跡内で製作されたとは考えにくく、I 群 11 類土器との関係を窺うことができるが、今後さらなる検証が必要である。

第 368・369 図に礫斧のうち、主なものをまとめた。刃部は片刃状を呈するのものが多く、刃部の再生や使用に伴うと考えられる剥離・潰れが認められるものもある。1・2 は剥離整形により刃部を作出するもの、3～14 は一部に研磨が施されるが原礫面が多く残されるもの、15・16 や 22～38 はほぼ全面が研磨により整形されるものである。1・2 のように研磨が施されないものは少ない。全体的に小型のものが多いため、前期以降にみられるような磨製石斧と同様の利用がなされたのか不明であり、「植物性食料の採集に関わる土掘り具」（戸田・中山 2019）とする説もある。

スタンプ形石器・三角錐形石器：スタンプ形石器は77点、三角錐形石器は10点出土した。砂岩や石英斑岩製のものが主体を占める。10T以西で出土したものは全体の2割以下であり、礫斧と同様にその多くは取掛西Ⅲ～Ⅳ期に属すると考えられる。

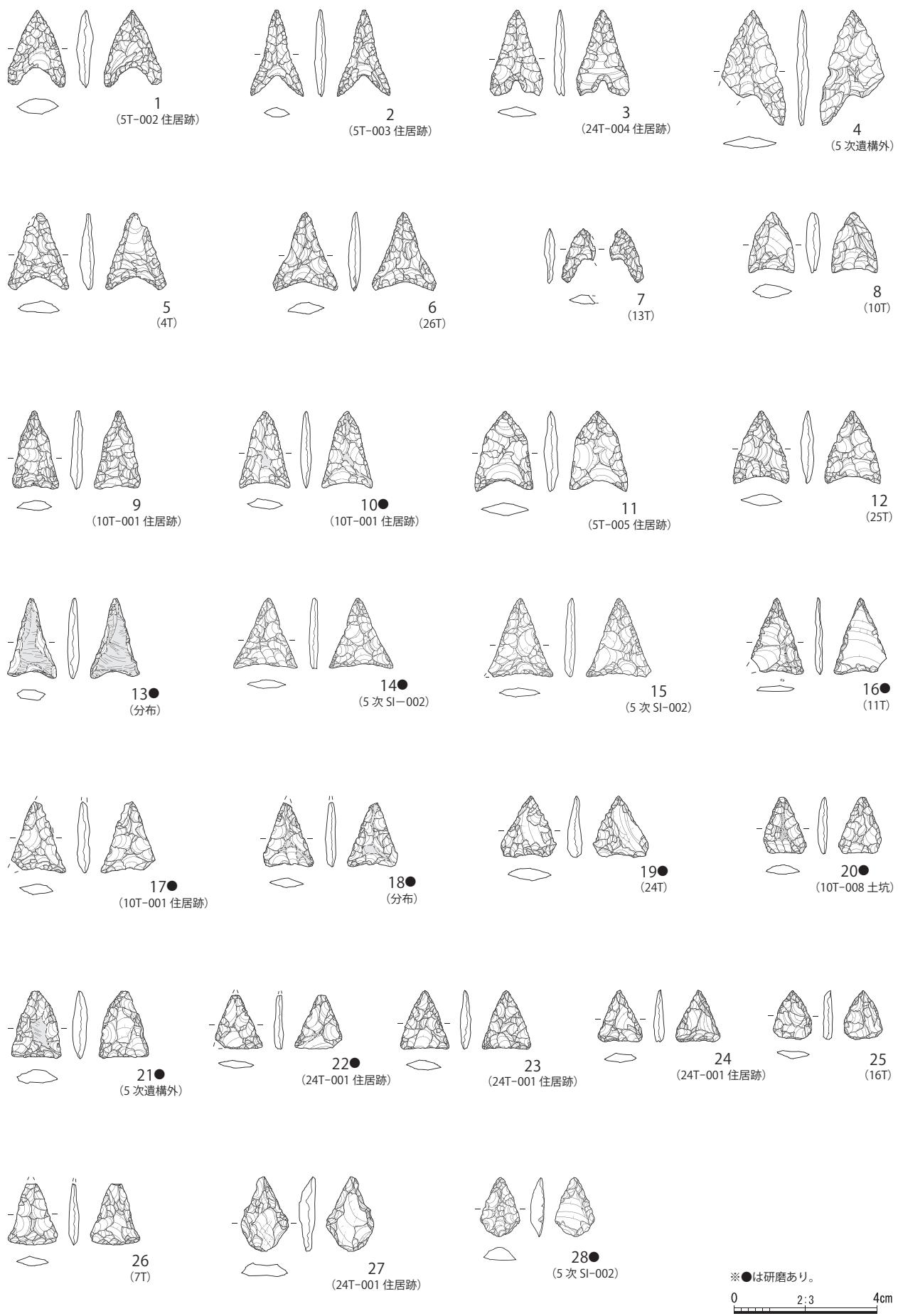
第371・372図のうち、1～26はスタンプ形石器、27～31は三角錐形石器である。スタンプ形石器は1～12が扁平礫、13～20が棒状礫を素材としている。磨石など他の器種から再利用されたものも目立つ(第369図38など)。32のように下端部の利用面を剥離したと考えられるものも24T-001住居跡から出土しており、比較的頻繁に利用面の再生を行っていたと推測される。

磨石類：磨石類は全体で204点出土した。敲打の有無にかかわらず原礫面に広い磨面が認められるものをA類、礫側面に使用面があり特殊磨石と考えられるものをB類、礫等の破断面やその縁辺部に磨耗痕が認められるものをC類として分類している。内訳はA類が172点、B類が2点、C類が30点となるが、C類については使用面の状況から、植物質食料の加工具としての利用だけでなく、他の用途にも利用された可能性もある。いずれにせよ、磨石類の主体となるA類に関しては、取掛西Ⅲ～Ⅳ期に増加する傾向を示している。

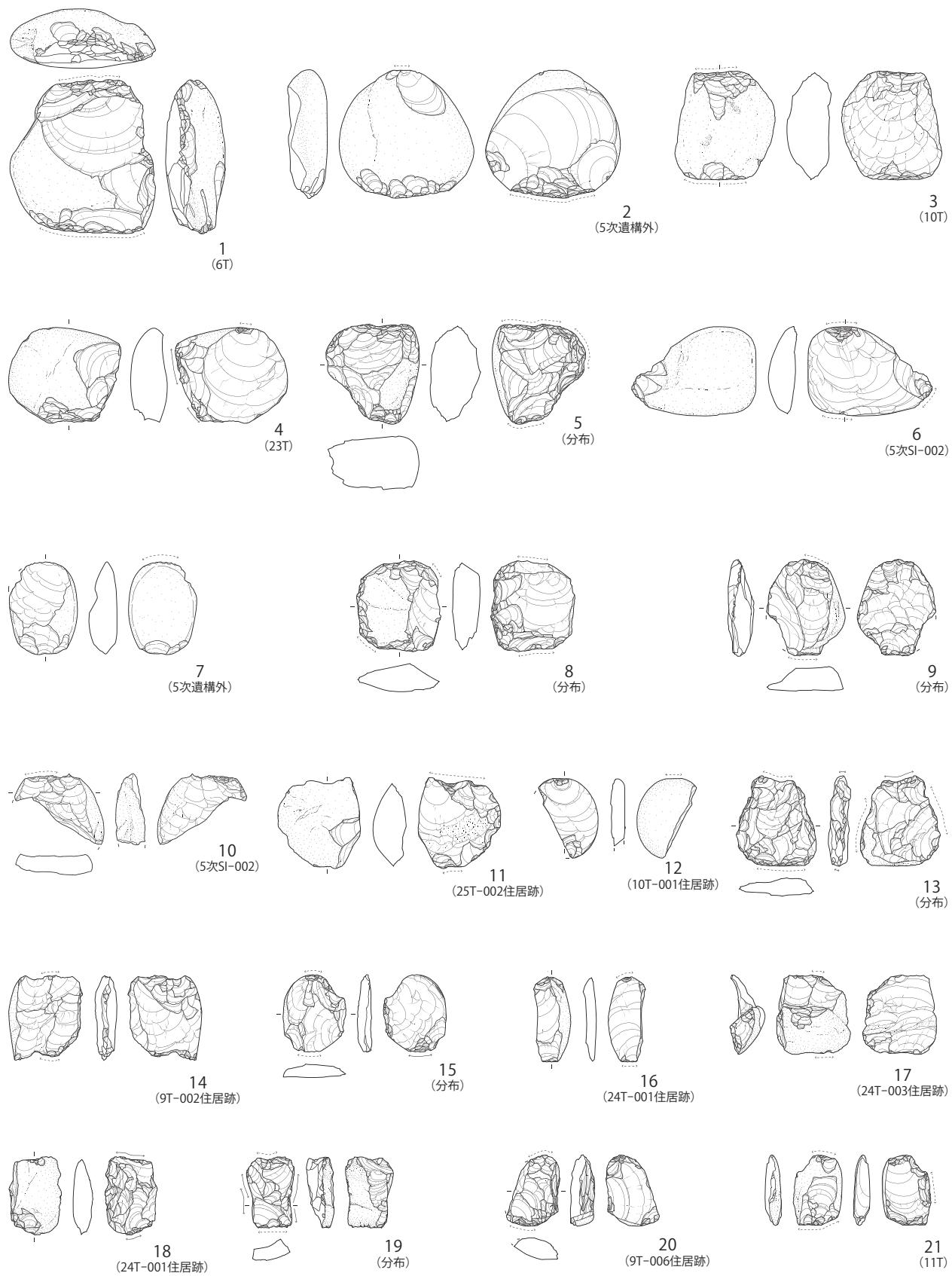
石皿・台石：石皿は10点、台石は18点が出土した。前期以降の縄文集落に比べ出土量は極めて少なく、破損品が大半である。また、割れた破片もほかの器種に利用されることが多く、本来の形状が残されるものはまれである。5次調査で出土したものは、軟質の石材を利用したものが目立つ。石皿・台石とともに、出土地点から取掛西Ⅱ期と推測されるものは数点のみであり、その出土は取掛西Ⅲ～Ⅳ期にほぼ限定されるようである。

参考文献

- 石坂雅樹 2019 「コラム① 取掛西貝塚について」『身を飾る縄文人—副葬品から見た縄文社会ー』雄山閣
上條信彦 2015 『縄文時代における脱穀・粉碎技術の研究』六一書房
戸田哲也・中山豊 2019 「藤沢市江の島植物園内遺跡の礫斧」『神奈川を掘るⅢ』玉川文化財研究所
橋本勝雄 2018 「出現期の石鏃の特質とその意味—縄文時代草創期後半から早期前半まで—」
『千葉縄文研究』8 千葉縄文研究会
船橋市教育委員会 2020 『取掛西貝塚(5)Ⅱ』



第364図 石鏸集成

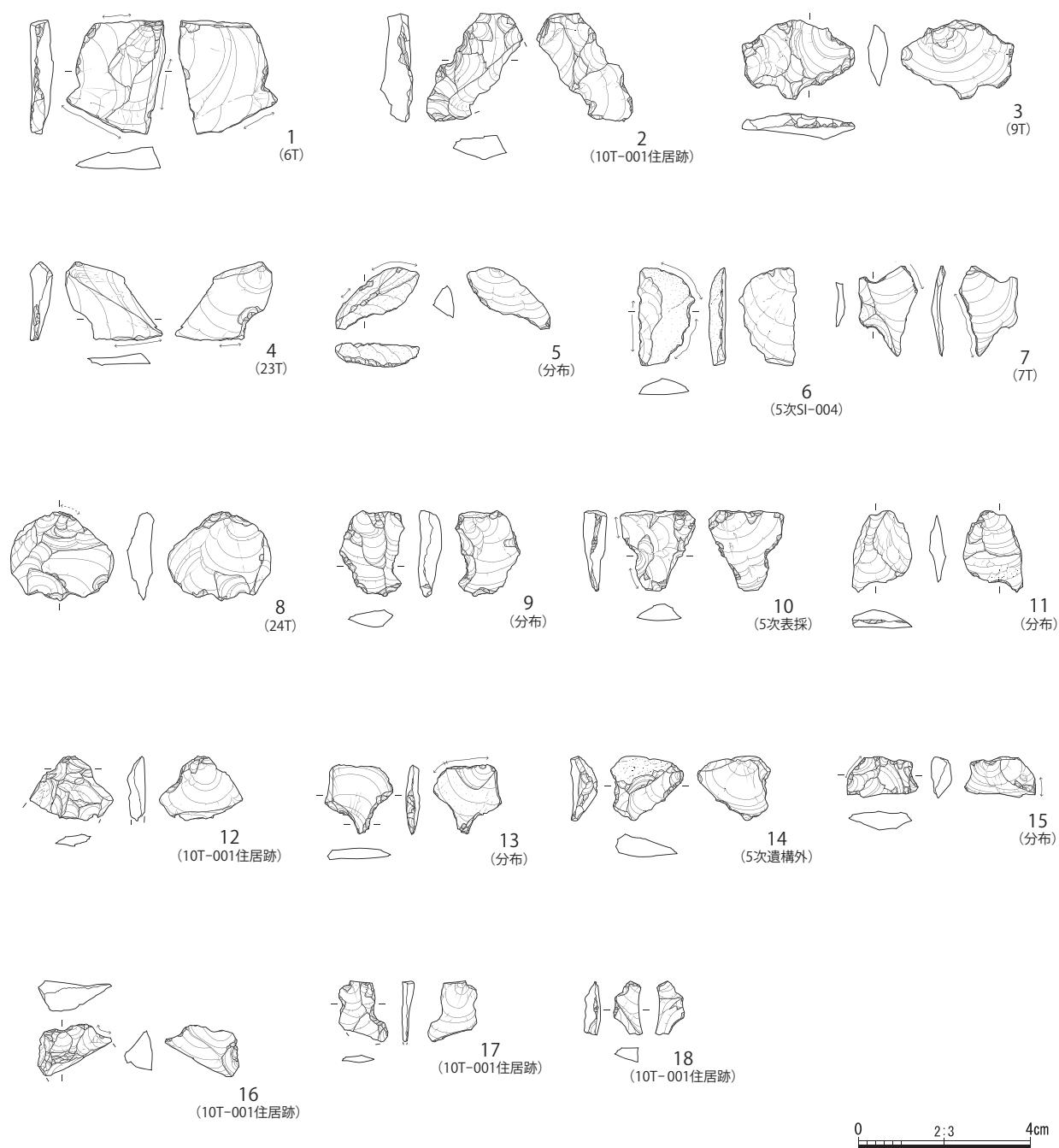


0 1:2 4cm

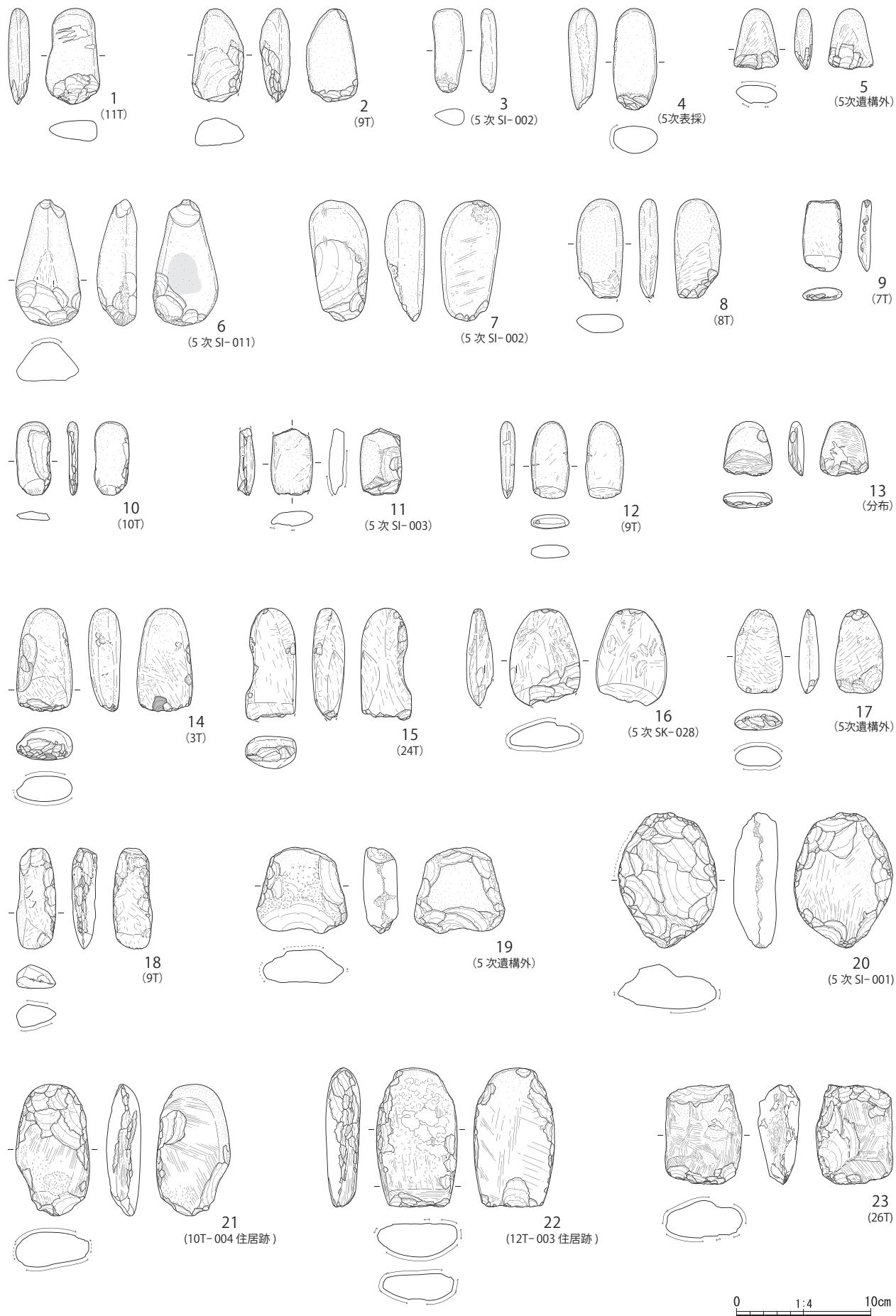
第365図 楔形石器集成（1）



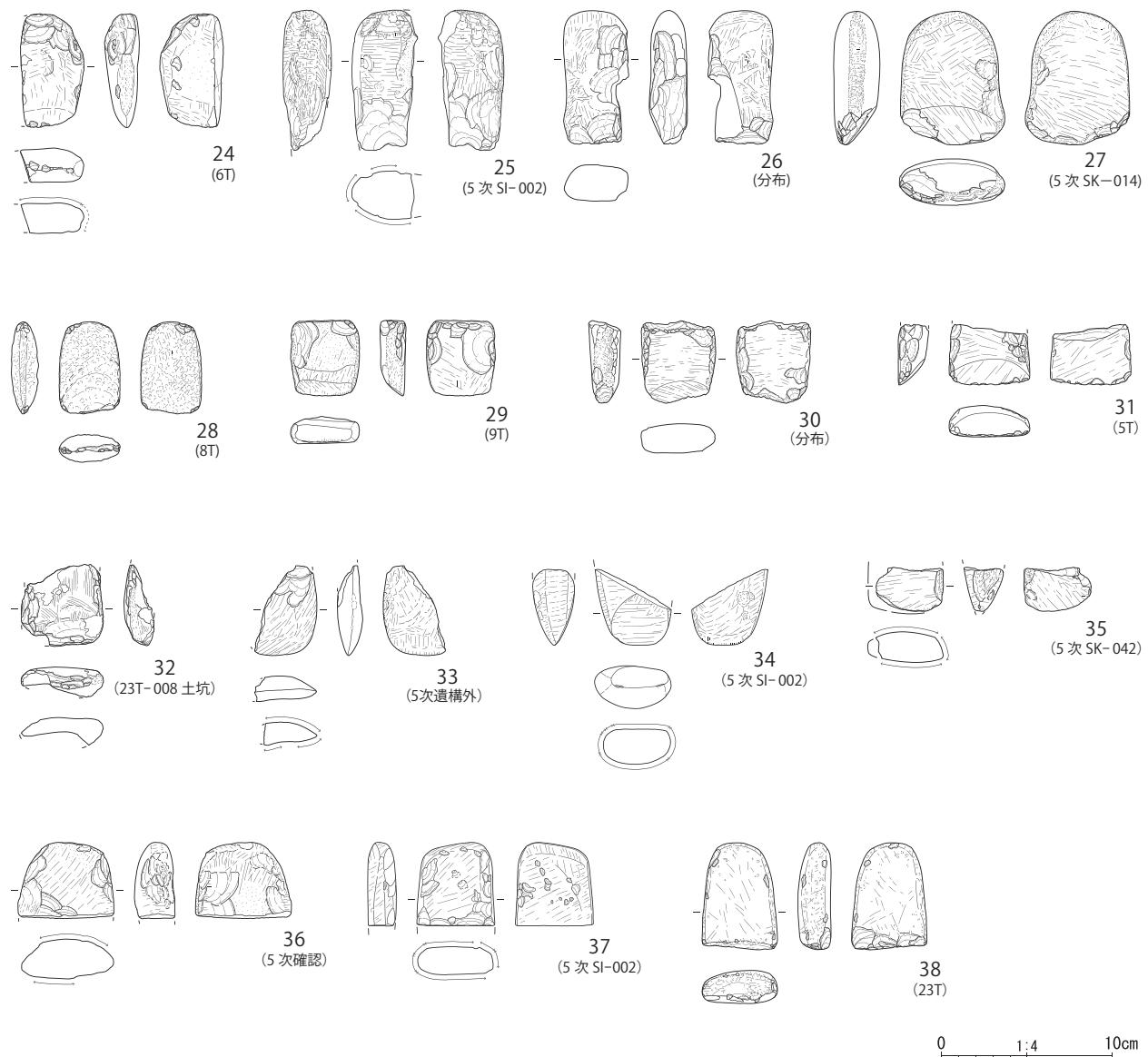
第366図 楔形石器集成（2）



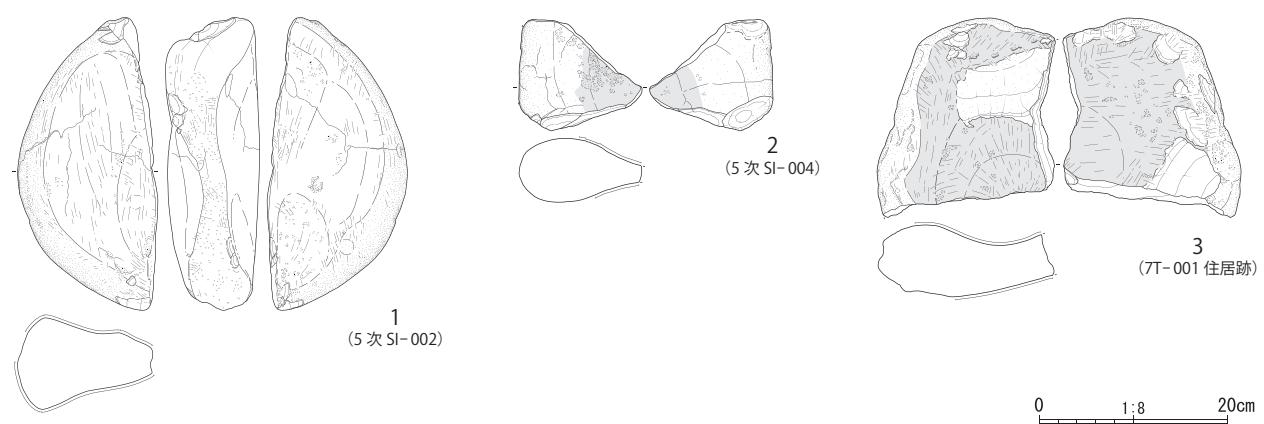
第367図 挿入石器集成



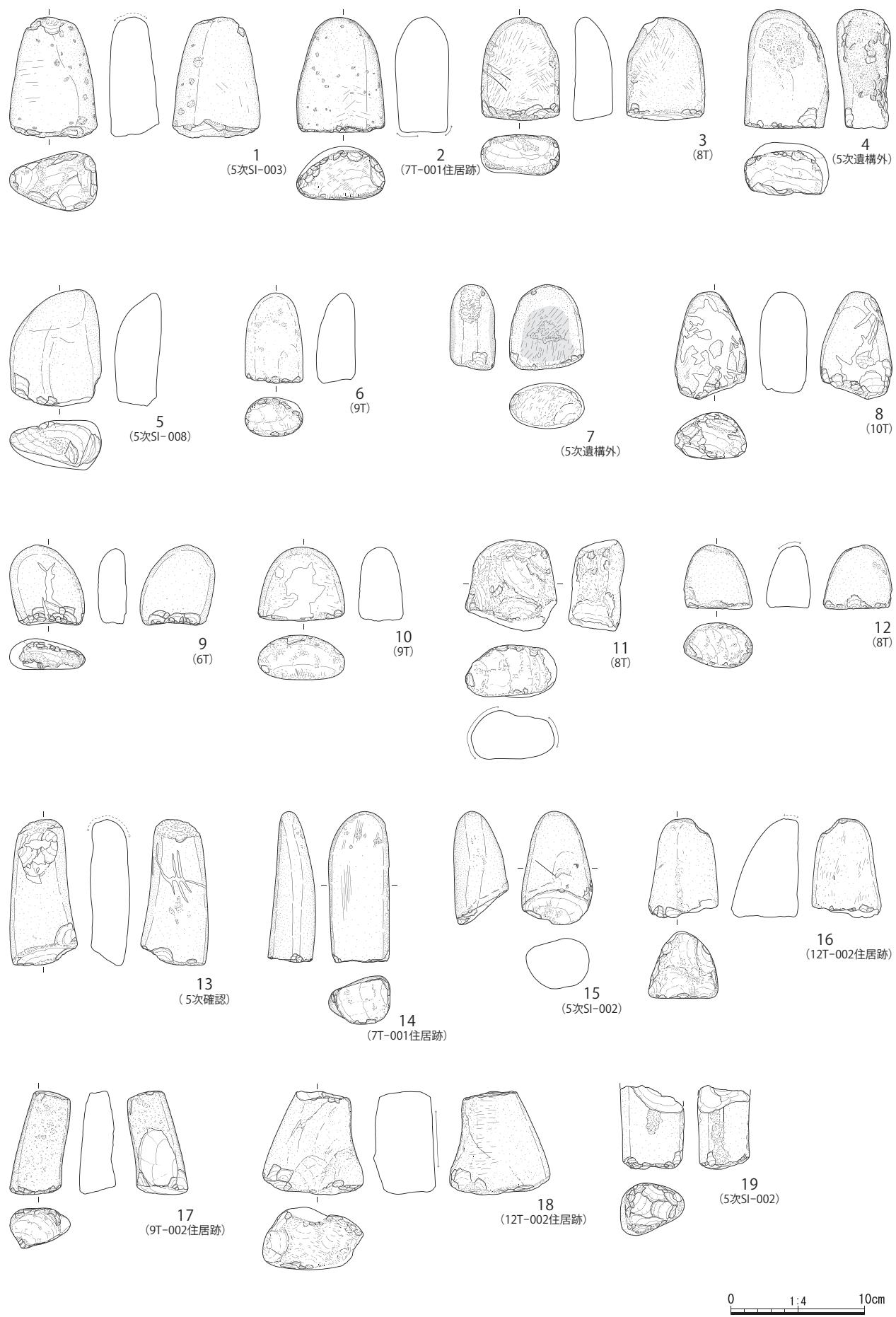
第368図 磚斧集成（1）



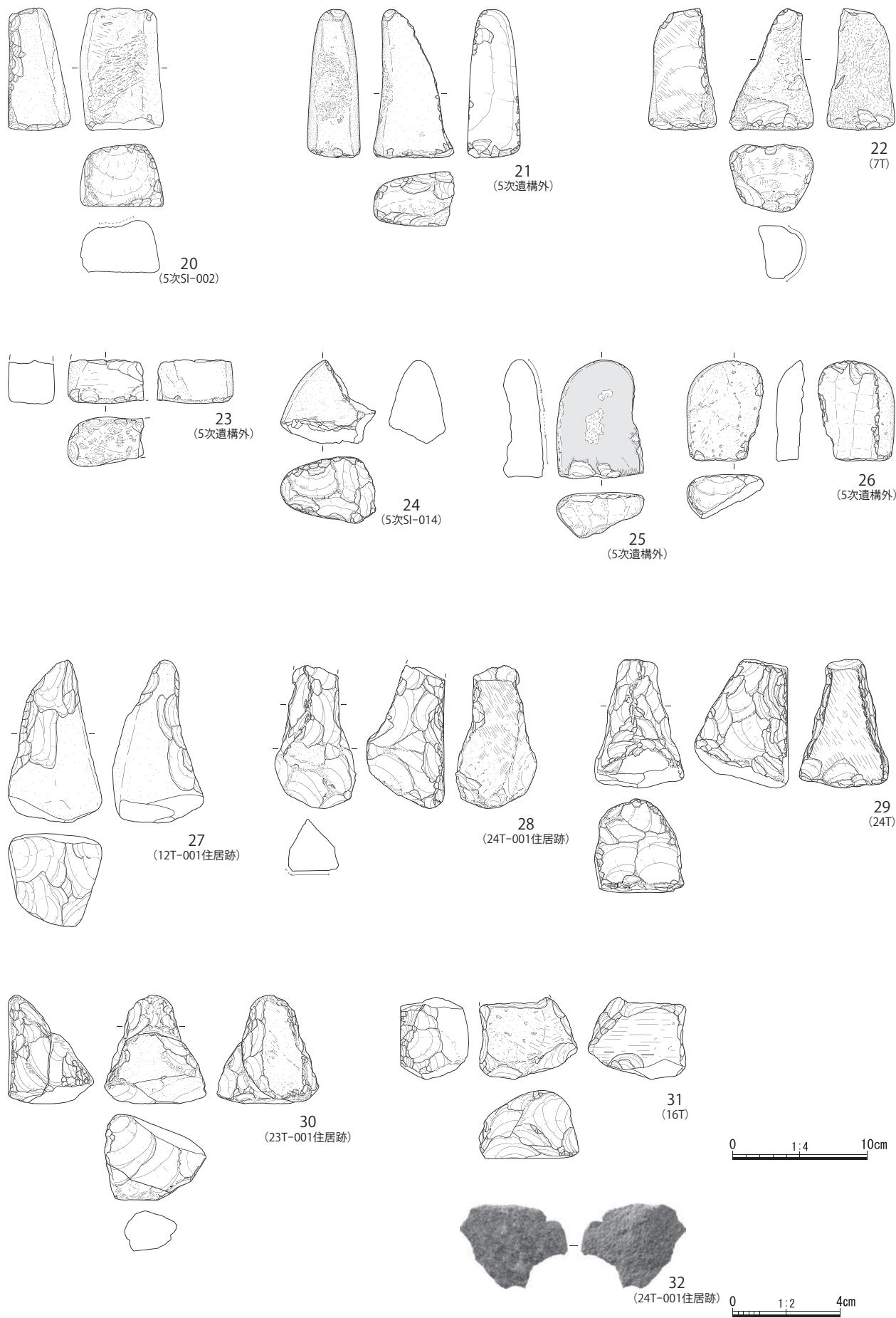
第369図 石斧集成（2）



第370図 石皿集成



第371図 スタンプ形石器・三角錐形石器集成（1）



第372図 スタンプ形石器・三角錐形石器集成（2）

第3項 骨角歯牙製品・貝製品

取掛西貝塚では、多くの骨角歯牙製品・貝製品が出土したが、主体となるのは早期前葉のものであり、前期のものはわずかである。発掘調査中に出土位置を記録できたものは少なく、大部分は貝サンプルの乾燥フルイ作業により回収されたものである。

骨角歯牙製品

確認できた器種は、刺突具、骨鏃、針、錐、装身具などであり、全部で129点が出土したが、そのほとんどは5次SI-002から出土したものである。

刺突具としたものの多くは漁撈具と考えられ、5次SI-002・004から27点が出土したが、前期の貝層からは確認できなかった。早期前葉には淡水域・汽水域・内湾沿岸域における漁獲が行われていたことが指摘されており（第5章第3節第3項）、刺突具の多くはこのような淡水～内湾域の漁獲に際し用いられたのだろう。このほか、骨鏃も1点出土している（第373図4）。

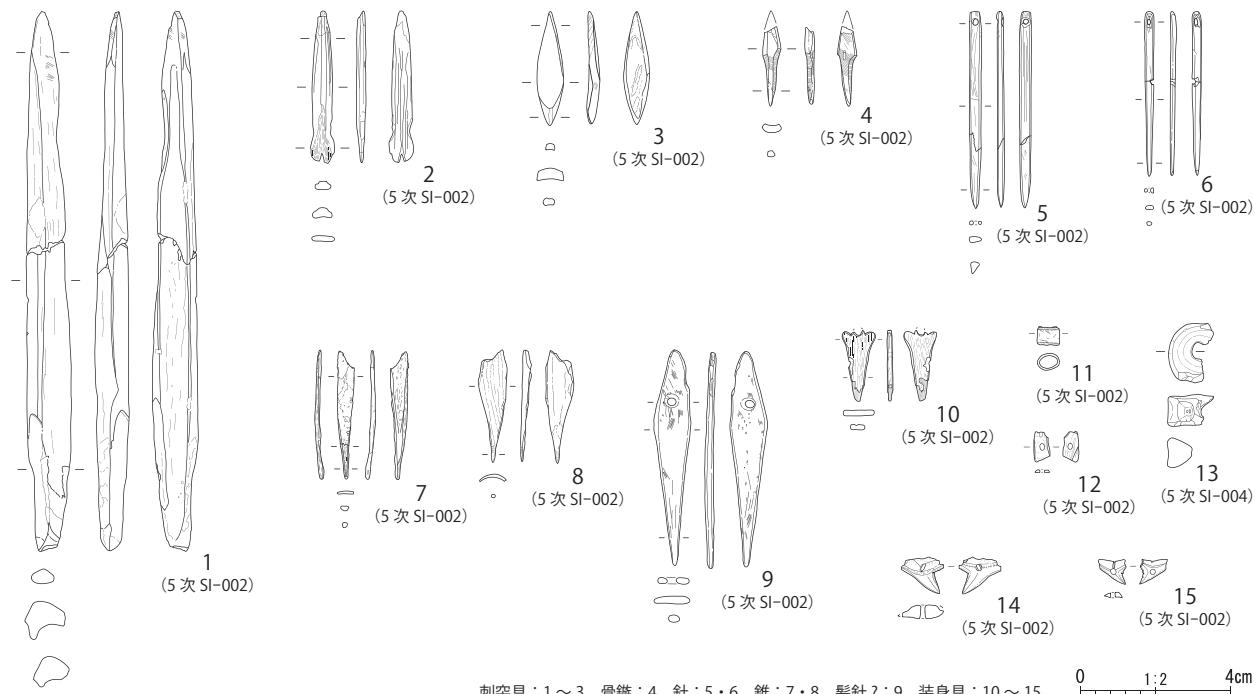
加工工具と考えられるものは針が61点、錐が6点出土した。針の出土点数が多い点も取掛西貝塚の特徴といえるだろう。刺突具と同様に、前期の遺構内貝層からは検出されなかった。

装身具類は13点出土した。イノシシの犬歯製のものが1点（第373図12）、サメ類の歯牙製のものが6点などで、いずれも穿孔が施されるものを中心とする（第373図14・15）。このほか、鳥類またはウサギ・ムササビ等の四肢骨を利用した管状製品が1点出土している（第373図11）。

前期で確認できたのは、4次SI-003から出土したエイ類の椎骨の穿孔品3点のみである。

貝製品

骨角歯牙製品と同様に、大部分は5次SI-002から出土したものである。合計して2,372点が出土しているが、ツノガイ類製品がその大半を占める。貝刃やツノガイ類・タカラガイ類製の装身具などが認められた。



第373図 骨角歯牙製品

貝刃は早期前葉の5次SI-002からハマグリ製のもの(第374図5)が3点出土しているが、他の製品に比べ出土点数は非常に少ないといえるだろう。早期前葉の段階では貝類を加工工具として利用することは少なかったようである。これに対し、前期になると4次SI-002・003からハマグリ製21点、オオノガイ製27点が出土しており、明確な増加傾向が認められた。

ツノガイ類製品は2,312点が出土した。このうち、早期前葉のものは2,280点で、5次SI-002で2,128点、5次SI-003で48点、5次SI-004で95点、5次SI-006で1点、5次SK-005で8点出土している。前期でも4次SI-003(取掛西V期)から2点、

5T-002住居跡(取掛西VI期)から30点出土しているが、早期前葉に比べ極めて少ない。ツノガイ類製品は、その長さから小玉状(第374図1・2)と管状(第374図3)の2つに分類した。早期前葉の2,280点の内訳は、小玉状999点、管状1,281点であり、管状の方が多い。出土量が極めて多く、端部に加工のないもの／端部を切断した状態のもの／弱く切断面を研磨したもの／丸みをもつまで切断面を研磨したものがあり、素材や破損品と考えられるものが認められることなどから、集落内でツノガイ類製品の製作が行われていた可能性が高いと考えられる。また、5次SI-002から出土したツノガイの一部を年代測定した結果、化石であることを示す年代値が得られた(一木ほか2021・第5章第2節第1項)。

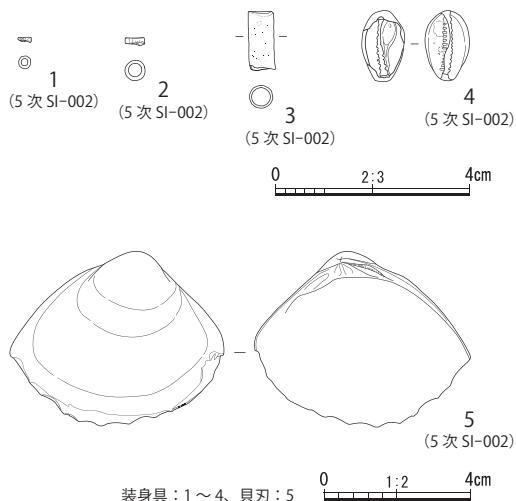
このほか、タカラガイ類を加工した装身具(第374図4)が5次SI-002・004から8点出土しているが、前期では確認できていない。

参考文献

- 忍澤成視 2011 『貝の考古学』同成社
 一木絵理・中村俊夫・小林謙一 2021 「取掛西貝塚(5)から出土したツノガイ製品の¹⁴C年代測定」『取掛西貝塚(5)II』
 船橋市教育委員会 2021 『取掛西貝塚(5)II』

第8表 遺構別骨角歯牙製品・貝製品集計表

調査次	遺構名	骨角器							小計	貝製品			小計		
		刺突具	鏃	針	錐	髪針?	不明 製品	素材 残欠品		貝刃	装身具	ツノガイ類	タカラガイ類	その他	
4次	SI-002	0	0	0	0	0	0	0	0	7	0	0	0	1	8
4次	SI-003	0	0	0	0	0	0	0	3	3	41	2	0	0	43
5次	SI-002	25	1	50	6	3	14	1	9	109	3	2,128	7	0	2,138
5次	SI-003	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	48	0	0	48
5次	SI-004	2	0	10	0	0	2	0	1	15	0	95	1	0	96
5次	SI-006	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
5次	SK-005	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	8	0	0	8
8次	5T-002 住居跡	0	0	0	0	0	0	0	0	0	30	0	0	0	30
合計		27	1	61	6	3	17	1	13	129	51	2,312	8	1	2,372



第374図 貝製品

千葉県船橋市

取掛西貝塚総括報告書

－東京湾東岸部最古の貝塚－

(第1分冊)

発行日 令和3年2月17日

発 行 船橋市教育委員会

〒273-8501 千葉県船橋市湊町2-10-25

編 集 船橋市教育委員会 文化課 埋蔵文化財調査事務所

印 刷 有限会社 エーワンネットワーク

